
恋恋記

あんのーん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛記

【コード】

N1660F

【作者名】

あんのーん

【あらすじ】

昭和17年、春。貧しい小作の娘、田川結は、幼馴染みの充三の誘いにより山岡修一郎の許に女中奉公に出る。修一郎の嗜虐癖を承知の上での奉公だったが、辱めは耐え難く、充三を恨んでは泣き暮らす日々……だが結はやがて知る。ふたりの男の真情を

前書き／はじめに

*「なるう」に於いては本文の前にそれぞれ「前書き」を書くスペースがあり、本項は本来そちらを利用すべき内容ですが、いきなり本編がエロっつーかえげつないシーンで始まるのはドーヨという思いがあり、まずはクッション代わりに、こちらで本編についてひとくさり語らせていただくと思います^^;

とりあえずおつきあいください。こらアカンと思われた方はB A C Kどうぞ。

*今コレを読まれているのは某blogのリンクからアクセスされた方がほとんどかと思いますが、直接「なるう」からいらして「??」という方は、興味がありましたら適当なキーワードでググるか、メッセージでもお気軽にお問い合わせください。

コメント欄ではお答え出来ませんので、よろしくお願いいたします。アチラでは紙幅に限りがあり冒頭のみストーリーでしたが、コチラではとりあえず脳内プロットを最後までお見せする予定デス。

細かなところがちよくちよく違ってはいますが、大きな違いといえば時代描写でしょうか……本編では戦中から戦後にかけてが舞台たとはつきりわかりますが、漫画では冒頭のみということで、戦雲についてはまるっと省きました。大戦以前の話だな、というくらいの印象ではないかと思えます。

内容に関して、もうひとつあらかじめ申し上げます。ワタシの作風はすでにご存じの方もあると思いますが、変態っぽかったり性愛っぽかったりする描写はあっても、内容自体はエロくありません……特に本編はメロドラマです。オカズには全く向きませんので、悪しからず。

*さてタイトルについてデス。

仮題の上「2」となってますが、そんなじゃ「1」はあるの？という
と実はその通りでして、元々「1」が最初に考えたストーリーであ
り、「恋愛記」はそちらにつけたタイトルでした。……が、事情に
より本編が先に公表となりました。

元々「2」、つまり本編は公表に至らなかった「1」をなんとかで
きないかとひねり出したモノなので（ついでに書くと、「1」は拙
作「紅蓮の鬼」をなんとかryと考え、作中のキャラのひとりを取
り出して時代背景を変えたモノであります^^；）、キャラや設
定、重要なシーンなどところどころが当たり前ながらよく似ていま
す。

機会があればぜひ「1」も読んで頂きたいと思いますが、そうし
たワケなので予定は未定であります……

*最後になりましたが、先にも触れたように緊縛陵辱等読む方を選
ぶ表現がありますので、苦手な方はご注意ください。というか閲覧
非推奨デス。

我ながらR15を標榜するにはかなりキビシイ内容ではないかと思
っています。topにも書きましたが、今後レーティングを見直す
ことがあるかも知れません。

当方は読者諸氏に不快な思いをさせることは望んでいません。こう
したページを最初に置いた意図をお汲みくださいますようお願い申
し上げます。

あんのーん拝

09・03・18追記

思いの外本編が長くなり、多数の方にも読んで頂いていますので、
タイトルの「仮」と「2」を外しました。

もう、上で書いた「元々の恋恋記」を、このタイトルで書くことも
ないと思うので……

序

ぎし……っ、と縄が軋む。

耐えかねたように娘が呻いた。

座敷にいるのは三人の若い男女だ。一糸まとわぬ姿で後ろ手に吊られた若い娘がひとり、その側にはもう少し年上 見たところ二十^{たち}ほどか の男。このふたりには垢抜けない鄙臭さがあつたが、座敷にいたもうひとり、先の男よりまだ三つ四つ年上と思しき椅子に座つたその男は、ほっそりとして上品な雰^ま囲気を纏^{まと}つていた。

夜半、灯火を絞つた六畳間で娘がまた呻いた。

肘を後ろに引き、その肘と背中との間に噛ませた竹棒ごと胸を縛られている。この竹棒の両端に縄をかけて吊り上げられているために肘と肩が上がり、胸にも縄が食い込んでひどく苦しそうだ。

その上娘は片足も後ろに高く吊られていた。その足首は娘の顔よりも高い。畳に着いたもう片方の足はほとんどつま先立ちで、腿もふくらはぎも震えるほどに緊張している。

涙と脂汗でどろどろに汚れたまだあどけなさの残る顔、水を打つたようにびっしょりと濡れた体ががほの暗い灯火にうごめき、ぬらぬらと照り映える様はある種の夢のようだ。大東亜戦争開戦により非常時となつた、今の世のものとも思えぬ光景である。

「ああ……もう……」

荒い息を吐きながら、娘の唇がわなないた。椅子の男は愉しそつだったが、もうひとりには厳しい表情をしていた。感情を面に表すまいという意志の見える、口元を引き締めた固い表情である。

「許して……も……もう……だ、め」

娘の側に立っていた男がちらりと椅子の男を見た。仮面のような表情が崩れ、そこには哀訴の情が浮かんでいる。

「ええぞ、充三^{ウツサミ}…… 下ろしたれ」

椅子の男が余裕のある声で言つた。

充三と呼ばれた男は娘の前に立ち、己れに寄りかからせるようにしてごくゆっくりと縄を緩めたが、長く吊られていたせいか娘は小さな悲鳴を上げた。

充三が娘の汗にまみれた体を抱きしめるようにして注意深く畳に下ろすのを、椅子の男は微かな笑みさえ浮かべて眺めていた。

「そのまま結ゆいを連れてこい」

男に言われ、充三はその娘　　結を抱き抱えると椅子の前へと進んだ。

「……いやや……いや……」

結はむずかるように身じろぎし弱々しい泣き声を上げたが、充三はそれを無視した。

「いややなかるう……ほんまは気持ちええのやろうが」

そういいながら、男は後ろ手のまま跪ひざまづかされた結をのぞき込み、くびり出されて歪んだ小さな乳房の突端をつまみ上げた。

「ああ……っ」

結の体が跳ね上がった。切迫した呼吸いきが、男の官能を押し上げる。

「口を開ける」

結は泣きながら素直に口を開いた。震える唇がすんなりした男のモノを飲み込む。

「へたくそやな、結。そんなではいつまで経っても俺をいかせることはでけんぞ」

男の声は言葉通りに醒めていた。ただ、その表情は満足げだ。

結の表情が苦しげに歪んだ。再び眦まなしりから涙が溢れ、顔を背けようとするのを男は抑えつけた。

縄を胸にかけられ後ろ手に縛られたまま、結はひとり畳に転がっていた。裸身には着物がかけてあったが、冷えた汗は結の体を濡らしたままだ。

どれくらいの時間が経ったのか、障子を開け閉たてる音がした。

充三だ。

「結」

充三は小さく声をかけると、ゆっくりと結を抱き起こした。傍らには魔法瓶とタオルの入った洗面器、それから洗ってある清潔な寝間着があった。

注意深く丁寧な手つきで腕と胸にかけられた縄を解く。結は表情を歪めたが、充三の指が胸に触れた時、びくりと体を震わせた。

充三は洗面器に魔法瓶の湯を注ぐとタオルを固く絞り、縄に擦れて敏感になった部分を気遣いながら結の体を拭いていった。熱いタオルは心地良いものだが、肌に触れる時にそれだけの熱を持っているということとは、洗面器の中は熱湯のはずだ。

だが充三は頓着する風も見せず、何度か湯を取り替えながら、結のねばついた肌がさらさらとした手触りを取り戻すまでその作業を続けた。

途中、結は何度か息を呑み、呼吸を乱しながら身をよじっていた。寝間着を結に羽織らせた後、充三は

「したろうか……？」

とその耳元に唇を寄せるようにして訊ねた。

「……いやや……恥ずかしい……」

口を開くのもかかったらしい。長く奉仕させられた顎が痛い。目を閉じたまま充三の胸に身を預けて結は消え入りそうな声で答えたが、充三は結の頭を抱き自分の胸に押しつけるようにすると、もう一方の手の中指をゆっくりと押し入れてきた。熱く潤んだそこは、充三の指を愛おしむように受け入れた。

「……っ、あ……!!」

結が大きく喘いだ。

「いや……いや……」

だが言葉とは裏腹に、体は快感を伝えてくる。己れの芯にも官能の火が点つたのを感じながら、充三は結の中をゆっくりとかきまぜた。

切ない呼吸を継ぎながら、ぐうっと充三を締めつけて結が果てた。
充三は結を抱きしめたまま、華奢なその体が柔らかく溶けるのを
待った。

01 / 奉公

田川結が山岡修一郎の許もとに女中奉公に上がったのは、三月ほども前のことである。

春に幼馴染みの充三が徴兵検査のため帰郷した折、自分の奉公先へ来ないかと誘われたのだ。充三は小学校を上がるか上がらぬかのうちに山岡家へ奉公へ出、この時が数年振りの帰郷だった。

結も充三も小作の生まれで家は貧しかった。特に充三の家は早くから借金で首が廻らなくなっていて、末子の充三はるくに学校にも通えず幼い頃から働きづめだったが、数年前、早くに家を出ていたこの男には何も知らせず、とうとう一家は夜逃げしてしまった。村には縁者があり此度の知らせもこの人がくれたのだが、充三の肩身は狭かった。帰郷といっても充三にとっては、郷里はすでに心の安まる場所ではなかったのである。

結の家は充三のそれに比べればまだましだったが、借金を抱えて呻吟していることに変わりはなかった。元々ふたりは仲がよく、充三が村を離れてからも折を見ては手紙のやりとりをしていたが、去年の冬、結は充三に「もういよいよ苦しいです。廓くわくわに奉公に出ることになるかも知れません。」と書き送った。結局どうにか年は越せたが、充三の誘いはそれを受けてのものでもあった。

充三の奉公先である山岡家は、ふたりの村からは汽車で半日ほど行った地方の大地主で、酒造や金貸しなど、商売も手広く営んでいるという話だった。

充三はここに下働きとして雇われたのだが、この家の長男が家を出た時に一緒について出たという。長男、すなわち山岡修一郎は聡明ながら幼い頃からひどく体が弱く、家は早々に次男が継ぐことに決まっていた。

家督を弟が継ぐ代わりにいくばくかの土地と財産、それから郊外の小体こていな家が修一郎に与えられた。それで修一郎は二十はたちの頃、ひと

り充三のみを連れて離れへ移ったのである。

五月、結は充三に伴われ、この家の門をくぐった。

「結と申します……どうぞよろしゅう、お願い申し上げます」

両手をつき、挨拶をした。声が震える。

座敷の上座にはこの家の主人である修一郎、ほかには医者だとい
う、四十前後と思しき眼鏡をかけた男が座っており、脇には充三が
控えていた。

初めて見る修一郎は、優しげで理知的な男に見えた。長袖の開襟
シャツの上からも薄く細い体がわかる。肌も真っ白 透明感のあ
る肌色ではなく、血の気のない紙のような白さだ。なめしたような
艶のある肌を持ち、しっかりと筋肉もついたばねのある体つきの充
三とは対照的な男だった。

「うん。じゃあ体を見せて貰おうか」

修一郎はこともなげに言った。

「……………」

帯に手をかけてはみたものの、そこからどうしても進めない。

「どないした？ 充三からあらましは聞いてきたのやる？」

「は、はい……」

結は観念したように帯を解き始めた。修一郎の嗜虐癖については
あらかじめ充三から聞いていた。だが千円という大金を目の前にぶ
ら下げられ、結と父親は一も二もなくこの奉公を呑んだのだ。結に
してみればどうせ廓に出てもすることは同じ、それなら充三の側に
いた方が……という思いもあった。

着物を脱ぎ下を向き、口元を固く結んで肌着も脱いだ。

「痩せとるな」

遠慮のない目で結の体を見ながら医者が言った。

「まあ、食い詰めて身売りもしようというくらいやからなあ」

あっさりと修一郎が応じる。

ひとり充三のみが、あばらの浮いた惨めな結の体から眼を反らした。

買ってきた家畜を値踏みするかのようなふたりの視線と会話に、結の心が挫けた。じわりと視界が歪み、腰巻きの端を握りしめたまま手が止まってしまふ。

「手が止まるとるやないか」

修一郎は結の逡巡を許さない。

「あ……こ、これは……」

「充三。手伝うたれ」

口ごもる結に言い訳もさせず、修一郎が命じた。充三は立ち上がった。

充三が懐から取り出したものを見て、結の顔色が変わった。

「……いや！ いやや……！ 充三、やめて……！」

怯えた表情が痛々しい。それを見て修一郎は満足げだった。結は涙をこぼして嘆願したが充三は反応せず、表情も変えずに手にした縄で結を縛った。左右の手首をそれぞれ同じ側の足首に縛りつける、ごく単純だが体の自由を奪うには効果的なやり方だ。

腰巻きを取り払われ、結の下半身が露わになった。

「失礼」

医者が立ち上がりそういつて結を覗き込むと、結の薄い乳房の、幼い突起をつまんだ。

思わずひきつった声が出る。

「幼い胸おほちやな」

医者はそう言い、

「こっちはどうかな」

と、次は結の両膝に手をかけた。

「いやっ！いややあ！ やめてえ……痛い！」

結が悲鳴を上げた。医者は特に手荒なわけではなかったが、怯えきっている結には触れられるだけでも恐ろしく、苦痛を感じてしまふのだ。

だが修一郎に

「外に聞こえたら体裁が悪い。口も塞ぐか？」

といわれ、その後の悲鳴は噛み殺した。

惨めさと恥ずかしさに気が遠くなる。初めて縛られ体の自由を奪われ、昼の日中ひなかに男達の前で脚を広げられ覗き込まれている……

「いやあ……見んといて……」

呻くようにそれだけを繰り返す結の嘆願に耐えかねたか、充三が目を伏せた。

「何を目を反らしとるのや。充三、おまえが連れてきた女やろうが、よう見とけ」

すかさず修一郎が叱責する。充三は立ち上がり結の後ろに回り、その頭を抱くようにしっかりと抑えるともう一方の手で結の目を塞いだ。

抵抗する気力も失せたのか医者が事務的な手つきで作業を進めて

いる間、当の結はただ泣いているばかりだったが、充三の胸の内に気づいた修一郎は笑いを漏らした。

「見たところ傷もなし、変な病気も持つてなさそうやが」

と、医者は診察室で患者を前にした時と同じような口調で言った。

「あんまりきれいにしとらん。処女おほこにはまあ、ありがちやが」

「先に湯は使つかったのやろ？」

唇を噛みしめたままの結に代わり、修一郎の問いには充三が答えた。

「はい」

「もうええぞ、ほどいたれ。それからもう一回湯を立てて、おまえがきれいに洗うたれ。それから」

と、修一郎が続けた。

「処女は何かとやりにくい。充三、おまえが破瓜したれ」

さすがの充三も顔色が変わった。

のろのろと着物を羽織ろうとしていた結も呆然と顔を上げた。

「……わ」

と、押し出すように充三が口を開いた。

「わしは……、見られていては、出来ません……！」

修一郎が面白そうに笑った。

「なんや充三、それこそ小娘おほこのようなことを言うて、おまえがそんなタマか」

充三と結は表情をこわばらせたが、修一郎は機嫌良く続けた。

「まあええ。結の寝間なり使え。結、今日はもうええぞ。充三にこのやり方を色々教えて貰え」

結に寝間として与えられたのは北側の納戸だった。

夕餉を終え片づけも済ませ、細々したことも片づけて後はするこ
とがなくなつた充三と結が、今、ここで向かいあつていた。

「……結」

充三が手を伸ばし、結の肩に触れた。びくつと身をこわばらせる

と結はその手から逃れた。

「本気なんか……充三、本気で……うちのこと……」

最後は涙声だった。昼間を思い出したか、結はまたしゃくり上げ始めた。

「お願い、やめて……！ 充三おまえは……あのひとのいうことなら何でも聞くんか……！」

ほんの少しの沈黙の後、充三が答える。

「そつや。あのおひとがわしの主あつしやからな」

そついうと再び手を伸ばし、今度はしっかりと結をつかまえた。

「いやや、放して……！ こんなん、いややあ……！」

泣き声を上げ、逃れようとする結をきつく抱きしめ諭すように言う。

「わしがやらなんだら張形でやられるだけや。聞きわけろ…… なるべく、優しくするから」

それは己れ自身にも言い聞かせる言葉のようだった。結はもう抵抗しなかった。ただ泣きながら身を固くしていた。

充三に対しては、子供の頃からほのかな思いを抱いてきた。充三も同じだと思っていたが、それは勝手な自分の思いこみだったのだ、と結は思った。

そつでなければ、主に命じられたからといって、こんなことができる訳がない。旦那様もひどい。いっそ、旦那様に犯される方が良かった。なぜ充三に強姦などさせるのか。充三への思いは、心の中で大事にしてきたものだったのに。ひどい、ひどい。

唯々諾々と主の無体に従う充三もひどい。うちよりも旦那様が大事やなんて、わかっていても知りとうなかった

絶え間ない嗚咽と固くこわばった体に無言で拒絶されながら、充三は結を抱いた。言葉通り、終始優しく丁寧に

03 / 日々 (にちにち)

目覚めた時、雨戸を立ててない納戸はもう明るかった。一瞬、今が何月で自分がどこにいるのかわからなかった。

そつだ、五月だ……昨日、この家に奉公に入って……

昨日……？ 本当に……？

「……………」
ようやく頭がはつきりしてきた。結は慌てて起きあがり、全身の痛みに顔をしかめた。肩も背中も石のように凝り固まっている。ひどく寝違えたのかと思っただが、次の瞬間には昨夜の責めを思い出した。

「……………」
頬が熱くなる。その後、充三が自分をまさぐっていかせてくれたことも思い出した。

汚れた体を丁寧に拭いてくれたのは覚えている。口中にも違和感はない。充三は口もゆすいでくれたのだろうか……
昨夜の感覚が体に蘇る。切なさが結の裏側を這い登った。結は大きく息を継いだ。次にはそれを振り切るように着物に手を伸ばした。

台所では充三が、すでにあらましのことはしてくれていた。元々結がここに来る前は充三が全てひとりで賄っていたのだ。充三は何をさせてもそつなく手際が良く、仕事も丁寧だった。

「起きたのか。具合はどうや？」

充三はいつも、何ごともなかったかのように結に話しかける。この日も通りで行きあった知り合いと挨拶でも交わすように、結に声をかけてきた。

「……あ、うん……」

結は口ごもった。

「昨夜はちよつときつかったな。手が空いたらほぐしたろう」
充三はさりげなくそう言った。

午後、雑事を終わると充三は結を自室に誘った。そこは修一郎が寝間に使っている六畳間の続きの間で、三畳ほどの小さなものだ。畳んだ夜具の他には小さな文机と行李があるだけの、つましい部屋だった。充三は結の着物を脱がせ横にさせると、肌着の上から結の体を揉み始めた。

充三の掌は厚く温かく指先の動きは繊細で、その手で丁寧にはぐされると体が溶けてしまうようだ。縄や愛撫から絞り出される鋭く切ない快感ではなく、じんわりと温かさが体の芯から広がるような懐かしく安らかな心地よさ。それに身を任せていると、襖が唐突に開いた。

「なんや、えろう気持ちが良いそうやな」

修一郎の声に充三は手を止め、結も慌てて起きあがった。

「そのままでええ。別に用事があつた訳やない」

そういうと修一郎は笑い、

「充三、おれも後で揉んでくれ」と続けた。

「はい」

短く答え、充三が立ち上がった。

「……………」

「後でまたな」

振り向きそう言った充三に、結は急いで答えた。

「ううん、もうええ。ありがと……もうラクになったから……」

充三は少し笑うと出て行った。

ひとり残った結は着物を羽織りながら、そつと文机の抽斗ひきたしを開けた。

そこにはかつて自分が出した手紙や葉書が数葉、仕舞われている。

充三の抽斗を盗み見たのは、実はこれが初めてではなかった。奉公に入つた初めのうち、それこそ毎日充三を恨んで泣き暮らしていた頃に、たまたま覗き見たのが最初だ。

そこにあつたのは結が出したものだだけだつた。親や兄弟からの便りは一通もなく、結は充三の境遇を改めて思い出し、自分の便りのみを取つておいた充三の心に胸が痛くなつた。同時に自身は大事にここまで持つてきた充三からの手紙を、破瓜された翌日に全て破り捨てたことをひどく後悔したのだつた。

「……………」

今朝方見た夢を思い出し、結の心が疼いた。

小さく息を吐くと結は抽斗を閉め、立ち上がった。

障子を開け放つた座敷では、充三が修一郎の体を優しい手つきでほぐしているのが見える。

結にはこの家に入つて驚いたことがあつた。充三の思いがけない細やかさだ。

修一郎に対するのみならず、結に対しても充三は行き届いた気遣いを見せた。例えば昨夜、ぐつたりと安心して結の体を清め寝間着を着せ、夜具を伸べてそこに寝かせたのは充三だつた。今結が来ている着物を畳んで枕元に用意したのも充三だ。充三は深爪といつてもいいほどに爪を短くしていたが、それも修一郎や結を傷つけないための気遣いに思われた。

充三はさながら幼子の世話を焼く母親、あるいは君主に尽くす小姓だつた。

しかし結は、自分に対する充三のそんな献身をどこか当たり前のよう受け止めていた。自分が今酷い目に遭つているのは充三のせいだ、だから充三が自分に尽くすのは償いだ。といった思いである。この頃、結には充三の立場や心を思いやる気持ちの余裕も少しは出来てきたが、わだかまりはなかなか消えなかつた。それは修一

郎が、結を責めるのに充三を使っていたせいもあった。

結に縄をかけ辱め、泣かせるのは、直接には充三だった。

充三の縄は厳しく責めは容赦がなかったが、そうさせているのは修一郎だということはよくわかっていた。最初の夜、修一郎が結を充三に犯させた時から、修一郎のやり方は骨身に沁みていたのである。

それでも 否、だからこそ、そんな修一郎のやり方に黙って従う充三が、結の胸の固い痼りしこりとなっていた。

「結、ちよつとええか？」

夜、充三が結の寝間の前に立った。

「うち……もう寝間着に着替えて……」

「たいした用やない。すぐに済む」

「……」
さんざん痴態を晒していても素面すめんで寝間着姿を見られるのは恥はずがかしかった。だが何でもない時に充三が結の寝間おこなを訪うのは珍しく、結は板戸を開けると充三を中に招き入れた。

「すまんな。もう寝るとこやったるうに」

そう言いながら充三は部屋すみの隅すみに腰を下ろし、結を手招いた。

黙って充三のそばに座る。充三は自分の手を差し出し

「手を」

と言った。

「……」
結が怪訝けげんそうに差し出した手を取ると、充三はその親指を口に含んだ。

「あ……っ！」

思わず引つ込めようとしたが、充三は指を口に含んだまま、その手を強く掴んで放さなかった。

「……」

熱く柔らかな舌が、敏感な指先を舐め上げる。

丁寧に、時に焦らすように……

「あ……じゅ、充三……」

いつも自分が強要されていることだ……、と結は気づいた。しかし自分とは違い、充三は丁寧に巧みだった。

ただ、指先を舐められているだけなのに、頭の芯がぼつと霞んで来る……

「……………」

なぜか切なく、もの悲しくなり、結は頭を充三の肩に凭^{もた}せかけた。充三はその頭をもう一方の手で抱いてくれた。

修一郎はしばしば朝から結を縛らせた。それは俗に亀甲縛りと呼ばれるやり方で、手足も縛るのでなければ細々した用事をこなすには支障はない縛り方だ。

「見た目は酷い^{むじ}が苦しゅうはないはずや。気になっても努めて気にするな。ええな」

朝、素肌にかつちりと縄をかけながら充三はそう言った。そして結に着物を着せ、襟元をしっかりと合わせてくれた。

縄目は確かにさほどに苦しくはなかったが、体を動かすたびに肌を締めつける違和感に、今、縛られているのだと意識してしまう。

またそんな時に限って普段は滅多に出来ない人が来た。

隣保や御用聞き………たいていは充三が応対してくれたが、手が離せなかったり婦人会の用事、近隣の人に千人針を頼まれた時などは結が出るしかなかった。

日常にありながらひとり秘かに縄に責められ、惨めさが募る……

結は夕刻には疲れ切ってしまうのが常だった。

「お願い充三、これを解いて……うち、もう……我慢でけへん……！」

夕餉の片づけを始めた頃、とうとう結は泣き声を上げた。

言っても無駄だということにはわかっていた。充三は修一郎には背かない。それがわかかっていても、嘆願せずにはいられなかったのだ。

「旦那様に頼め。わしにはなんともしてやれん」

「いやいやいや……！旦那様にいうのはいや……！充三、お願い……！」

泣き出した結を残し、充三は台所を出た。修一郎は縁側でぼんやりと星が瞬き始めた空を見ていたが、声をかけられ充三を見た。

「なんや充三。何か用か」

優しい、穏やかな声だ。ほんの少しの逡巡のあと、充三は答えた。
「結のことです、旦那様……結の縄、解いてやってはいただけませんか……？」

修一郎は空へと視線を戻した。

「おまえがそれをいうか。なんで結が来ん？」

「……………」

「まあええ」

視線を落とし、充三を見ずに修一郎が言った。

「結を連れてこい」

充三に肩を抱かれるようにして連れて来られた結は目の縁を赤くして、先刻まで泣いていたのが見て取れた。

「どないした？ 何を泣いとるのや」

結は何か言いたそうに口を開いたが、また唇を噛み締めてしまう。
「そろそろ何か、言いたいこともあるかと思っ呼んでみたが、おれの思い違いか」

そういうと、修一郎はそっけなく言った。

「下がってええぞ」

「結」

と、充三が促すのと同時に結が口を開いた。

「旦那様」

手をつき、頭を下げて震える声で懇願する。

「もう、つろつろございます……お願いします、縄を……解いてください……」

「着物を着とっては解けんやろうが」

「あ……」

結は口ごもった。

「あの……、ここで……ですか……？」

「それがどうした。往来やあるまいし、誰も見とらんわ」

三人がいるのは濡れ縁である。四方を建具に囲まれた部屋の中で

さえ身を晒すのは恥ずかしいのに、日も暮れたとはいえ屋外といつてもいい縁側で帯を解くなど、考えるだけで卒倒しそうだ。

「い」

「結！」

充三の低いが鋭い声に、結は「いや」という言葉を辛うじて飲み込んだ。

泣くまいと思っても、涙がまた溢れてくる……

「女の涙はかわいいが、安売りすると値打ちも下がるぞ」

そういうと修一郎は結に近づき、露わになった結の胸を無造作に掴んだ。

「ひゃ……っ！ あっ、い……っ、いや……！」

結の体がのけぞる。とうとう堪えていた言葉が出た。

「いつまでたつてもいやとしか言わんのやな、結。そやけどいうてもせんないぞ」

そう言うつと修一郎は続けた。

「何がそもも気に食わんのや。これしきの縄、一日縛られたとて苦しゅうもなかるうが」

「そやけど……うちは……は、恥ずかしゅうて……」

やっとの思いで答えた結に、修一郎がたたみかける。

「恥ずかしい？ 裸に剥かれた訳やなし、何の恥ずかしいことがある？ 充三もおまえをからこうたりはせんかったやろうが」

「……………」

結は一層俯いた。頬が上気してくるのがわかる。

修一郎の言う通り、縛られた体は着物で覆い隠されていたし、男はふたりとも、結を辱めるような言葉や態度はおくびにも出さなかった。どこまでも結びとりの問題だったのだ。

誰も知らなくても、自分が意識してしまふ。縛られた惨めな自分、それなのにどこかで感じてしまふ恥ずかしい自分を

掴まれたままの乳房が熱くなる。幼い乳首が尖ってきたのを感じて、結は耐えきれずに身を引いた。

「堪忍して下さい、許してください……！ お願いです、もう許して下さい……」

涙声で廊下に額をこすりつけんばかりに平身低頭する結を見下ろし、修一郎が立ち上がった。

「充三」

充三が結の傍らで膝をつく。

「連れて行ってええぞ。縄をほどいたれ」

充三は小さく頭を下げると立ち上がり、泣いている結に着物を羽織らせ抱え上げるようにしてその場を去った。それを見送り、修一郎も踵を返した。

一日中、縛られていた最初の日。それはそうして終わった。

「結……結、大丈夫か」

充三の声と軽く頬をはたかれた感触に、結は意識を取り戻した。今日も結は朝から縛られていた。その上今夜はさんざんに泣かされ、どうやら最後には気を失っていたらしい。

何も覚えていない。何をされて、自分がどうなったのかも……

「ここ……どこ……」

「おまえの寝間や。大丈夫や。もう終わった」

子供をあやすような優しい声。充三は壁にもたれ、己れの胸に凭せかけるようにして結の体を抱いていた。いつからか、結が正気づくまでそうしていてくれたらしい。

「……………」

少しずつ、霞んでいた頭の中がはつきりとしてきた。

「あ……………」

充三は腕の中の小さな体がこわばるのを感じた。

「…………うちも……死にたい……………」

消え入りそうな声だった。

「アホか…………！ 簡単に死ぬとかいうな。生きとつても死ななならん人間が、今はどれだけおると思ってるのや」

いつになく厳しい声で充三が叱責する。今が戦時であり、充三が春に徴兵検査を終えたことを思い出して、結は言葉を失った。

「…………そやかて…………うち……………」

ようやく口を開く。声が涙で潤んでいる。

「旦那様がおまえをいたぶるのは、あれは遊びや。本気やない。おまえにはつらかるうが、ほんまに耐えられんようなことはなさらんやろうが」

充三のいう通りだった。充三の縄は厳しかったが、結を苦しめたのは責めのきつさではなかった。

半年前までは何も知らない体だった。今は違う。

主と幼馴染み、ふたりの男の目に晒され痛めつけられ、羞恥に身を揉みながらも感じてしまう厭わしい体

たった半年で、そんな風に馴らされてしまったことが耐え難かった。そしてどこまで自分が変わってしまったのか、それを思うことさえ恐かった。

「お願い……うちのこと……ふしだらやとかあさましいとか、思わんという……」

「……」
今度は充三が言葉を失う番だった。

「……そんなこと、思うわけがなかるう」

ようやくそれだけを絞り出すと、充三は泣いている結を抱きしめ、息を大きく吐いた。

「そんなことを気に病んどったのか……アホ……誰がそんなことを思うか……」

「……」
「……なあ結」

充三は結の髪を撫でながら話しかけた。

「おまえはわしとこうしとる時も自分がいやなんか。自分がふしだらであさましいと思うのか……？」

「……」

修一郎は自分が満足すれば結には頓着しなかったから、結は埋み火のような情欲に、いつまでも身を苛まれるのが常だった。そんな自分が一層惨めで、余計に泣けた。

そんな時、充三は結を抱き、ゆっくりと体を融かすようにいかせてくれた。いつもひどく恥ずかしくつらかったが、それが不快で屈辱かというとなんかそんなことは決してなく、結はその後は満たされて眠ることが出来た。

それが何故なのか、今まで考えたこともなかった

「……充三のことは、うち……」

最後の言葉は言えずに、結は口ごもった。

「……結。おまえが今つらいのは、旦那様に心を許してないからと違うのか」

「……………」

そうかも知れない。結は修一郎が恐ろしかった。体が弱いという修一郎は言葉にも動きにも激しいところはなかったが、どこかしら冷え冷えとしたところがあって、結はこの男の前では萎縮してしまふのだ。

それだけでなく自分をも辱め酷い目に遭わせ、呻吟し泣き声を上げる様を見て笑うような男に、到底心を許せる訳もないのだった。

「旦那様はおまえが思てるようなおひとやない……………」

口をつぐんだままの結に、充三はあやすように語り続けた。

「そやけどおまえが心を開かな、旦那様かておまえをかわいがりよつもなかるうが」

あの男が自分をかわいがるなどということがあるのだろうか、と結は再び薄れ始めた意識の中で思った。

充三は修一郎を一途に慕っている。結にはそれが痛いほどわかった。

多分、充三の知る修一郎と自分が知る修一郎は、違う男なのだろう。そうでなければ、充三の修一郎に対する献身が理解できない。

うちにはムリや……………充三のように、旦那様には尽くせない
凭せかけた結の体から力が抜ける。

充三はその体を抱き上げると、静かに夜具に横たえた。

同じ頃。

苦しげに身じろぎし、修一郎は自室で目を覚ました。

「充三」

呼びかけてみたが返事がない。

結の寝間か……………

修一郎は再び目を閉じた。眉根を寄せ口元を結んだ、厳しい表情

だ。

かすかな物音がし、隣室に人の気配が戻った。

だが修一郎は、もう下男の名を呼びはしなかった。

「ほんまに女はビックリするほど変わるなあ。半年前はただの小娘やっただのに、えろっ色っぽうなって」

火鉢を置いて暖かくした部屋で、城崎の軽口に結の頬が真っ赤に染まった。

今日は修一郎の主治医である城崎が来ていて、結のこともついでにと診てくれたのだ。

城崎は往診を頼まれた時以外にも、時々修一郎の様子を見にこの家を訪れてくれた。修一郎は城崎がこの町の病院に赴任してきたばかりの頃の患者で、充三も含め、つきあいは深かった。

「肌の具合も別人のようや……」

感嘆するように言った城崎に、修一郎が機嫌良く答えた。

「充三の奴が、それは気合いを入れて磨いてますからね」

「はは。あの男、女衛に鞍替えすべきやな」

充三がその場にいなかったせいか、城崎も笑ってそんなことを言っただ。

この頃確かに、結は変わってきた。

以前は嫌がつて泣くばかりだったが、この頃は体もこなれ口技も上手くなり、ぞくつとするほどの表情さえ見せることがある。

結を変えたのはきっと充三だろう。俺ではない……と、修一郎は思った。

「あれはほんまに、何年つきおうても底の知れん男や」

修一郎は少し笑うとそう言った。

冬の日暮れは早い。

長居をしたわけでもないのに、充三が城崎を送って門の外へ出た頃は、空が茜色に染まり始めていた。

「ありがとうございます」

そういつて鞆を差し出した充三に、城崎が少し間を置き、言った。

「充三……修一郎君やが、あんまり良うないな……」

「……………」

「僕もまた寄らせて貰うが、気をつけて、何かあったらすぐに知らせてくれ。役に立てるかどうかはわからんが……」

戻った充三の厳しい表情に、結は思わず声をかけた。

「お医者様は帰られたのか……何か言うてなさったか？」

充三は結を見、それから言った。

「旦那様があんまり良うないそうや……お元氣そうにしとられたが、ムリをなさっていたやも知れん」

「……………」

「この頃はめつきり寒うなってきた。わしらには何でもないことが、旦那様には大事になる……おまえもよう気をつけてくれ」

「……………うん……………」

結は所在なげに頷いた。

「なんや？ しつかりせんか、結……わしもいつ赤紙が来るかわからん。そうなつたら旦那様のお側には、おまえしかおらんようになるんやぞ」

充三は冗談めかしていったが、結には充三の言葉が堪えた。

充三の気遣いや説得もありこの頃少しは修一郎にうち解けては来たけれど、まだまだ気兼ねや抵抗もあった。

充三がいなくなる……旦那様とふたりきりになる……

そんな状況に、自分は耐えられるのだろうか……

「なあ結」

結の心を読んだか、充三が笑顔を消して語りかけた。

「旦那様は元々金を出して後腐れのない遊び方をしておられたのや。双方が納得づくでな。」

そやけどそれでは、ほんまにその場限りやろ。一時憂さを晴らすだけのことや。女の気持ちも、何もわからんやろ」

そこまで言うと、充三は一旦言葉を切った。

「……わしはもつと、何か違うものを旦那様に知っていたら良かったのや。おまえは心根もまっすぐやし、気だてもええ。見た目も悪くない。おまえなら旦那様もきつと気に入る。おまえならできる

……」

「……うちを連れてきたのは、旦那様のためか……？」

小さな声で結が遮った。心なしか表情がこわばっている。

充三は優しく、そしてほんの少し翳りのある表情で笑いかけた。

「旦那様と、おまえのためにもなると思うた。……それに」

手を伸ばし、結の髪を撫でる。結の体の内側に、微かなおののきが拡がった。

「わしもおまえと居りたかつたのや……何をしても……わしには時間が、もつないからな」

結は目を伏せた。充三もそれきり黙った。

この一週間後、危惧が現実になった。

その日、修一郎は朝食にほとんど手をつけなかった。この頃は食材も手に入りにくくなっていたからたいしたものを用意出来るわけもなかったが、充三と結は元々食の細い修一郎になんとか食べて貰おうと、それなりに毎日工夫を凝らしていたのだ。

昼前だった。結は濡れ縁にへたり込んでいる修一郎を見つけ、駆け寄った。

抱き起こそうとしたが、結の細い腕ではいくら病身で華奢とはいえ、男の修一郎を支えることすら難しかった。修一郎は真つ青な顔で結を押しやるようにすると

「充三を呼べ」

と苦しげに言った。

「は、はい」

慌てて立ち上がり踵を返したが、ごぼっ、という水の上がるよう

な音に結は振り返った。

「……………！！！」

結は我知らず両手で口元をしっかりと覆っていた。

目の前の光景が信じられない 何が起こったのかも理解できなかった。

辺りは血の海だ。げぼつとまた修一郎の喉が鳴り、ポンプで汲み上げられた水のように、押さえた口から血がまた大量に吐き出された。

思わず駆け寄り修一郎を抱きしめた。粘つく血の感触と、生臭い、鉄にも似た血の匂いが鼻を打つ。

「旦那様 旦那様、しつかりして！ 充三！ 充三！！！」

何を叫んでいるのかもわからなかった。ただ悲鳴のような金切り声を上げていると、充三が血相を変えて走ってきた。

「早う床を！ それから先生を呼べ！」

充三は結を押しのと、厳しい声で叫ぶように言った。

「母屋にも」

そう言った時、ぐったりしていた修一郎が充三の腕を掴んだ。

「言わんでええ 母屋には」

「旦那様……………！」

「どうせ呼んでも……………誰も来んわ……………」

充三が振り返った。結は呆然とその場につ立ったままだ。

「何をしとる！ 早う行かんか！」

血にまみれた、今までに見たこともない形相の充三に一喝され、結は弾かれたように駆けだした

「どうもありがとうございました……」

門の前で、今日は結が城崎に頭を下げていた。

城崎も疲れた表情をしている。

「明日また来る……また血を吐くかも知れんから、気をつけてな。充三もしばらくは寝かせといてやれ」

城崎はそう言つと、独り言のように呟いた。

「あれも不憫や……子供の時分から、こんなことがある度に血を抜かれて……」

「……………」

「おまえもびつくりしたな。初めてやろう、こんなことは……おまえが来てからは、修一郎さんも元気にしとられたのにな」

うなだれ涙ぐんだ結の肩を労うようにぼんぼんと叩くと、城崎は町へと帰って行った。

修一郎の部屋の前に戻ると、ちょうど充三が障子を開けて出てきたところだった。

「充三……もう少し休ませておくと先生が」

「病気やあるまいし、平気や」

そういう充三の顔は、しかしひどく青ざめて見えた。

「旦那様は……」

「眠ってなさる。ここで話しては邪魔になる……行こう」
歩きながら、充三が訊ねた。

「先生は、他に何か言つてなさつたか」

「明日また来て下さるそうや。また血を吐くかも知れんから、気をつけるよ」

そう言つてから、結は少しの逡巡の後、付け加えた。

「先生は……おまえも、気の毒やと……」

充三は立ち止まり、ちらりと結の顔を見た。

「わしは気の毒でも何でもない」

そう言つてまた歩き始めた充三の背中に、結は気になっていたことを言つてみた。

「母屋にはほんまに知らせんでええのやろか……？　いうても家族や。心配もしてなさるやろつに」

「母屋は」

と、充三が結を遮るように答えた。

「もう弟様が切り盛りしてなさる。お子様もおるしな。元々旦那様のことは厄介者扱いや……お体も弱いし、変わり者やといつて……」

「……………」

「旦那様が知らせるなというのや。ほっとけ」

ふたりは台所にいた。上がり框かまちに腰を下ろした充三に、結は白湯を汲んで手渡した。

充三はそれを飲み干すと、湯飲みを掌で押し包むようにしながら言つた。

「子供の時分に母屋に売られたわしを、旦那様はなんでかようかわいがつてくださつた……」

「……………充三」

「わしが今人並みでおれるのも、みんな旦那様のおかげや。読み書きや算盤そろばんも、みんな旦那様が教えてくださったのや」

「……………」

結は何度かやりとりした、充三の手紙の文面を思い出した。

最初のうちのたどたどしい片仮名ばかりの手紙はやがて、結のそれなど及びもつかないようなきちんとした、手も綺麗なものに変わつていた……

「わしには恩人や……わしに出来ることなら、何でもする……」

湯飲みを持った手を額に押し当てると、充三は体を折り曲げるようにして顔を伏せた。

「何でもするの……何も出来んわ……」
声が微かに震えていた。結はかける言葉を失った。

夜。

月明かりが障子を照らしていた。

額に置いた手拭いを新しいものに換えると、修一郎が身じろぎした。

「……………」

ほの明るい部屋の中、修一郎は己れを見つめる者に気づいた。

「なんや……どないした…… 充三は……？」

「充三は今は寝間に…… うちがお側やすにおるからといって、寝やすませました」

「それはご苦勞なことやな」

修一郎は少し笑った。

「おまえももうええぞ……行って寝やすめ」

「いえ、うちは……もう少しここに居おらせてください」

「残念やったな……俺が死んだら、おまえも充三も晴れて自由の身やったのにな」

嫌みではなく、軽口のように修一郎はそう言って笑ったが、結は思いの外激しく否定した。

「そんなこと、言わんでください……！ うちも充三も、そんなこと思っ
てません……！」

修一郎は涙ぐむ結を見た。

手を伸ばし、結の濡れた頬に触れる。それから襟元に手を入れ、打合せを少しくつろげると、素肌にかけられた細い縄が見えた。

「……解いて貰わんかったんか……」

「充三は旦那様のこと頭がいつぱいで、うちのことなんて忘れてます」

結は笑って言ったが、実のところ結自身も気づいたのは充三を寝かせた後だった。あんなにも違和感と体の疼きに苦しめられていた

のが嘘のようだ。最初に充三に言われた通り、“気にしなければ気にならない”ものなのだ、とも思った。

「はは……しょうがない奴っちゃ」

修一郎も笑った。そして自分の文机に視線をやり、抽斗に小刀が入つとるから、それで切つたらええ」と言った。

今日の騒ぎではたばたと動き回ったせいか、結の肌はところどころが擦れてミミズ腫れになっていた。

修一郎がその帯状の赤に指を這わせる。ぴくんと結の頤おとがが上がった。

「痛いか」

「……いえ」

全身がそそけ立ったのは、冷気のせいではない。

痛みではない、爪先で肌をなぞるような感覚が結の体内と外を走った。

頬が上気するのがわかる。

「こつちに」

と、修一郎が床へと結を誘こびった。

遠慮がちに布団にもぐり込むと、修一郎が身を寄せてきた。体が熱い。熱があるのだ。

「おまえの匂いがする……」

「あ……す、すみません……」

結はうるたえた声で詫びた。修一郎は体臭の類を嫌がったから、結は洗滌せんてきには神経質なほど気を遣っていた。だが今日は城崎を呼んだ後、彼がやってくるまでの束の間に、浴びた血を洗い流すのが精一杯だったのだ。

「ええのや……ええ匂いや」

修一郎は少し笑ったようだった。結の胸に顔を埋めるようにすると、そう言った。

「こつしてると、大分にラクや」

「……………」
いつも修一郎を恐ろしいと思ってきた。充三のようには、修一郎を慕えないとずっと思っていたが、今、己れの胸の中の修一郎は儚く弱く消え入りそうで、何かがつんと結の心にかみ上げてきた。

このひとを支えてあげたい……………このひとを理解したい

突然芽生えた、それは自分でも理解しがたい感情だった。

旦那様はおまえが思てるようなおひとやない

おまえが心を開かな、旦那様かておまえをかわいがりようもなかるうが

いつかの充三の言葉が胸に蘇る。

「旦那様……………」

結は泣いているかのような声で小さく呟くと、我知らず修一郎の唇に自分のそれを押し当てた。

誰とも、充三とすら交わしたことの無い初めてのくちづけ

修一郎は結の唇を拒まなかった。手を上げ、結の髪に差し入れるようにして、結の頭を引き寄せた。

充三……………ごめんな……………

一瞬の光芒を描き、充三の横顔が結の心をかすめると消えていった……………

08 / 往く年と来る年と（前書き）

ご無沙汰しています。

またぼちぼち始めたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

08 / 往く年と来る年と

充三が目を覚ましたのは、明け方の四時頃だった。隣室の障子を開け閉てする気配に目が覚めたのだ。思いの外深く寝入ってしまったことを激しく後悔しながら、充三も寢床を抜け出した。

「すまん……」

土間で小さく声をかけると、結が振り返った。手拭いの入った洗面器を手に行っている。

「ちよつとは休めたか？」

そう言う結の笑顔が何かいつもとは違う気がして、充三は微かな戸惑いを覚えた。

「気持ちは元気でも、体はまだ本調子やないんやろ……もうちよつと寝とつてええよ」

手拭いを絞り、洗面器の水を取り替えながら結は続けた。

「旦那様も今は眠ってなさる。昨夜は苦しそうやったけど、今は少しはラクそうや」

「いや、もう平気や」

そういつと充三は結の手から洗面器を取った。

「おまえこそちよつとでも寝てこい。昨日から寝とらんやろ？」

旦那様が気がつかれたら起こすから」

結が顔を上げ、充三を見た。

その表情もいつもとはどこか違う……

「……ほんなら」

と、結が口を開いた。

「少し横にならせてもらおかな……何かあったらすぐに起こしてな。遠慮せんでな」

「ああ、そうする」

笑ってそういい、充三は促すように結の肩の辺りを押しやった。

結が立ち去るのを見送ってから、充三も踵を返した。

「充三」

部屋に入り、障子を閉めようとしたところで声をかけられ、充三は振り返った。

「すみません……起こしてしまいましたか」

近寄り、再び声をかける。

「具合はどうですか？ どこか苦しゅうないですか……」

「充三 おまえの、結を貰うぞ」

修一郎は充三の問いには答えず、目を閉じたままそう言った。

「……………」

ほんのしばらくの沈黙。

「あれはわしのものやありません…… この門をくぐった時から

……最初から旦那様のものや……」

充三は囁くようにそう答えたが、再び寝入ったか、修一郎の返事はなかった。

幸い修一郎は重篤な状態には陥らず、ほどなく床から起き上がるようになった。

師走の声も聞こうかというある日、修一郎は寝間に結を呼んだ。

正月はどうするのだと訊ねられ、結は答えに詰まった。修一郎は、藪入りしたいならさせてやる、と言った。

つい先日まで、帰りたいとそれだけを願っていた。充三がどれだけ心を砕いてくれても、ここでの生活はただつらいだけだったが、今は違う。濡れ縁を染めた鮮血の色、そしてその夜初めて見た弱く儂い修一郎の表情が、結の胸に焼き付いていた。

「あの……………」

と、結はためらいがちに口を開いた。

「うちは……あの、旦那様さえ良ければ、ここで一緒に元旦を迎え

とうございます……」

「好きにしたらええ」

修一郎は笑った。それから充三に

「いつもおまえとふたりきりで辛気くさい年の初めやったが、来年はちよつとは正月らしい正月になりそうやな」と言った。

「結、おまえ仕立ては出来るのか？」

続けて修一郎が訊ねた。唐突な問いに結は面食らった。

「……家の者の繕いや仕立て直しくらいは見よう見まねでしてましたが……ちゃんと習うたことはありません……」

「充三」

再び傍らの充三に声をかける。

「町で誰か、腕のええ仕立て屋を見つけて、結を仕込んで貰えるよう頼んでやれ。」

ささ屋やつたらええ針子も知つとるやろ。口を利いて貰え」

「……」

ささ屋というのは母屋に出入りしている、町では老舗の呉服屋である。当の結は話の成りゆきが今ひとつ掴めず呆けた表情をしていたが、充三はすぐに呑み込み

「はい」と答えた。

「結……正月はほんまに帰らんでええのか？」

修一郎の許を辞した後、充三が結に話しかけてきた。

「うん……旦那様のことも心配やし」

そう言つと結は一旦口をつぐんだが、また続けた。

「帰つても食い扶持が増えるだけで、実家も大変やろうしな……何か、ちよつとしたものと行き帰りの汽車賃でも送つた方が、親かて助かるやろ……」

「……結。おまえ……」

この数日、気にかかってどうしようもなかった。明け方、まるで生まれ変わったかのような結。そして修一郎の言葉

あの夜、何かあったのか……？

だが充三はその言葉を呑み込んだ。

「何？」

結に訊ねられ、充三は笑顔を作った。

「田川の小父さんには悪いが、おまえが居ってくれてわしは嬉しい

……」

「……………」

充三の率直な言葉に、結の頬が熱くなる。

「旦那様も嬉しそうにしとられた。ほんまに来年は、ええ正月になりそうや」

充三は続けてそんなことを言った。その声は穏やかでその笑顔も優しかったが、なぜか結の心は詰まり、切なさがこみ上げた。

充三は早々にささ屋の口利きで仕立ての師匠を見つけて来た。

初めて師匠を訪ねる日、修一郎は結を呼ぶと風呂敷包みを手渡して言った。

「俺の着物や。もう着ることもないから、充三の丈に合わせて仕立て直したれ。正月に間に合うようにな」

勝手口では充三が、やはり包みを手に結を待っていた。場所を教えるためもあり、最初くらいは結について行ってやれとの修一郎の命である。

充三は元々町中にある山岡家本家の奉公人であり、修一郎に従って離れへ移った後も所用でちよくちよく町へ出ていたが結は違ったから、充三が同行したのはそんなところにも理由があった。

「どうぞよろしゅうお願い申し上げます」

小さな長屋の玄関でそう言って充三は頭を下げ、持参の手土産を差し出した。

「これは丁寧なご挨拶を……どうぞお上がって下さいな」

そう答えたこの家の主は、年の頃は四十かそこら、この辺りでは

ひっぱりと呼ばれる上衣をスフの着物の上に引っかけた、くつきりした眉を持つ小柄な女である。

「いえ、わしはこれで……また適当な時間に、これを迎えに寄せさせていただきます」

「ええ男衆おとこじやなあ。体つきもええし、男前おとこじや」

充三が去った後、この家の主 八重は笑ってそんなことを言った。どうやら八重は、さばけた性質たちのようである。

「結さんのええひとか？」

「いえ」

と結は慌てて打ち消した。

「ただの幼馴染みです。……あの、同じお屋敷に奉公しておるものですから……」

「山岡さんとこの離れやてな。お女中さんに習い事とは、あそこの若旦那おもしろさんも面白いお人やなあ」

言葉通りに面白そうにそう言っつて、八重は何かに気づいたように顔を上げた。

「いややわ、気を悪うせんといてな？ うちときたら他人様の事情

に立ち入ったりして……」

「いえ……」

いささか鼻白みながらも、結も笑って言った。

「ほんまに勿体ないことやと思つてます……一生懸命覚えますのでどうぞよろしゅうお願いいたします」

「こちらこそ、よろしゅうな」

八重はほつとしたように、人懐っこい笑顔を見せた。

結が持参した着物を見た八重は

「これは御召おめしやな……ええお品や」

と、感嘆したように言った。

「すみません、うち……反物のこととかも、よう知らんです……」

恥ずかしそうに結がそう答えると、八重は

「御召というのはな、昔殿様が好んで着たからそうい名前がついとるのやで。男物では最高や」と言い、

「反物のこともおいおい覚えていけばええ。文様や染めによっても値段や用途も変わってくるしな」と続けた。

改めて着物をよく見る。しっかりと縮緬で艶のある御納戸色、遠目には無地にも見える万筋の、確かに高級な品であった。

「それでこれをどないするの？ 幅出しでもしたいのか？ ほとんど傷んでないし、これやったら折り痕もついてないやろうけど……練習には勿体ないなあ……」

「はい。……あ、いえ」

結は口ごもった。

「……あの、正月用にさっきの男に仕立て直してやれと旦那さまが

……」

「……」

八重はへえ、という表情をした。

下男に御召か、太っ腹やな……とでも言つかと結は思ったが、八重は今度はただ

「寸法はわかっとするの？」と訊ねただけだった。

^{かぶり}頭を振る結に、八重は

「あとでまた来ると言っつたから、早速練習にその時測らせて貰いましょ」と笑いかけた。

この日は八重が仕立てについて結の知っていることを訊ねたり、実際に運針を見てくれたりして終わった。

「結さんなかなか筋がよろしいですわ。手も綺麗やし、基本的なこととはわかってなさるから、すぐに袷でも羽織でもきちんとしたものが縫えるようになりますよ」

迎えに来た充三に八重はそんなことを言い、

「それで申し訳ないんですけど、もうちょっとお時間いただけませんやろか？ 練習にお前様の寸法を測らせて貰いたいんですけど」と続けた。

充三はほんの少し怪訝な表情をしたが、すぐに「わしの寸法でよろしければ」と笑顔で答えた。鯨尺を充三の体に押し当て、寸法を測っては帳面に書き写す。何か面映ゆい気持ちであった。

「練習にわしの寝間着でも縫うてくれるのか？」

帰路、充三はそんなことを言つて笑つた。

「そつやな、今は反物も買えんから、古い寝間着があつたら頂戴。ほどこいて縫い直したるから」

結も冗談めかしてそう答えたが、充三は存外真面目に

「古着で良かったらなんぼかはあるわ。相当にくたびれとるがみんなやるから、着られそつやつたら仕立て直して弟にでも送つたれ」と言つた。

「……………」

おまえの着る物がなくなるやろが…………と結は思ったが、それには出さなかつた。

「充三………… いつも、ありがとう……………」

充三は答えず、ただ少し笑つてみせた。ふたりは影が伸び始めた往來を黙つて歩いた。

09 / 往く年と来る年と2

結は歳末の煩雑な家事の合間に、八重の長屋に熱心に通った。八重には夫がいたが、このひとは満州事変の際、新京で亡くなったという。

「大勝やったというのに、貧乏くじや。うちのひとはどんくさいわ」その日、絹糸をぴん！と爪で弾きながら八重が言った。

八重が今仕立てているのは一越ひとこしに艶やかな京友禅を染め付けた袷である。臙脂の地に雪輪と桜の文様を散らした、品が良く華やかな着物であった。

「そやけどまあ、お国のための名誉の戦死や。貧乏くじとかいうたらバチが当たるわな」

仕立物に目を落とした八重の表情からは何も読み取れなかったが、結は八重の亭主に充三を重ね合わせ、ひどく胸が痛くなった。

もし充三が外地で無残に果てたら

そう思うだけで、涙がにじみそうになる。その様子に気づいた八重が気遣うように声をかけた。

「大丈夫やて、結さん。こんな戦争、すぐに日本が勝ってお終いや」
「はい…… すみません……」

そうは言ったものの不安は募った。結は大正十四年の生まれである。昭和と共に成長し、この時代が常に戦と共に歩んできたことを肌で知っていた。

戦が終わることなどあるのだろうか。ひとつの戦が終わっても、次の戦が始まるだけではないか。またどんなに有利な戦であったとしても、斃たおれる兵士は必ずいるに違いない。例えば八重の亭主のよう…… その不運なひとりに充三がならないとなぜ言えよう

帰宅して後もその思いが胸から離れず、結はすっかり無口になっていた。

「結、どないした。そんな心許ない表情かおをして

「

夕餉の給仕をする結に、修一郎が言った。

「え」

「そんな表情を見ると、久々に苛めてやりとうなるやろつが」

顔を上げた結に修一郎はそう続けると、答える暇いとけも与えず抱き寄せて身八つ口から手を入れた。

「あ……っ！」

乳房を掴まれ、声が出た。結の膝が膳に当たり、器ががちゃん、と音を立てた。

「食事はもうええ。膳を片づけろ」

気遣わしげな素振りを見せた充三に、修一郎は機嫌良くそう言った。

「結さん手えをどうかしたの？」

次に八重の長屋を訪ねた時、両手首の包帯を目ざとく見咎められて、結は取り繕うように言った。

「すみません、何でもないんです…… ちょっと、うっかりしとって火傷してもうて……」

「氣いつけや、手が使えんと不便やる。それでのうてもこの年末に、ケガでもしたらつまらんで」

「はい」

真顔で心配してくれる八重に申し訳なく思いながら、結は曖昧に笑って答えた。

火傷というのは方便だった。

前日縛られた折りに手首をどう捻ったものか、縄の痕がひどい痣になってしまったのだ。充三はしきりに気にして何度も謝ったが、修一郎はむしろその痣が気に入ったようだった。

「ええやないか、そのまま。師匠にも見せたれ」

結の手首の痣を隠すために充三が包帯を巻いている後ろから、そんなことを言ったりした。

「とんでもありません！」

めずらしく語気を強め、即座に否定した充三に、修一郎は

「冗談の通じん奴っちゃ」と重ねて言い、おかしそうに笑った……

「……………」

運針の手を動かしながら今朝の修一郎を思い出すと、なぜか不思議な気持ちになった。

修一郎の笑顔はこれまでも見たことがあった。冗談めかしたことを口にしたのも初めてではなかったが、今朝の修一郎はこれまでとは違って感じられたのだ。

血の通った温かさだ……と、結は思い当たった。

修一郎は温かさを感じさせない男だった。冷酷だ、という意味ではない。ただ人の肌や血の温みというものを、結は修一郎に感じたことがなかった。

修一郎の血も熱いのだと知ったのは、この男の血を浴びた時だった。

あの日から何かが変わった。

多分、変わったのは修一郎ではなく自分だろう。自分の修一郎に対する心持ちが変わったから、これまで見えなかった物が見え、感じなかったことも感じるようになったのだと思った。

この日、帰り際に八重はお裾分けだと言って、風変わりな匂いにする小さな包みを結にくれた。帰って充三に見せると、それは屠蘇散だと言う。

「屠蘇？ 屠蘇ってお酒のことと違うのか？」

「そうや。これを酒に溶かして飲むのや」

「……………うちでは正月のお酒のことをお屠蘇というだけ……」

「そうか」

と、充三は笑った。

「元旦には飲ませたる……………まあ楽しみにしとけ」

年の瀬もいよいよ押し詰まった。門松を門扉に立て注連縄しづなを飾り、小さな鏡餅を三宝に載せて床の間に供えると、一気に迎春の気分が

盛り上がってきた。この頃は戦時とはいえ、まだ歳末の空気には新たな年を迎える活気と華やきがあった。

「結、ちよつと来い」

大晦日の午後、煮しめの鍋につききりの結に充三が声をかけた。呼ばれたのは修一郎の居間である。

「何かご用でしょうか」

割烹着をひっかけたまま膝をついた結の眼前、居間に座った修一郎の前に、いくつかの置紙たとうしがあった。

「……………」

「開けてみい」

修一郎が機嫌の良い声で言った。

心臓が激しく動悸を打っていた。結は前掛けで何度も手を拭くと、おそるおそる置紙こよりの紙縲こよりを解いた。

畳まれていたのは雪輪に桜文様が絵羽になった一越の友禅 八重が丁寧に仕立てていた、あの着物だ。袖丈は2尺、若い女性にふさわしい華やかさであった。

「……………」

呆然と見入っている結に、

「他も見てみい」と修一郎が促した。

二枚目は襦袢だった。狸々緋の綸子に紅絹の裏地をつけ、唐子を絵羽に捺染した、これも奢ったものである。

「……………」

震える声でひとりごちるように呟いた結に、修一郎が

「気に入ったか？帯もあるぞ」と笑って言った。

帯は全通の丸帯で、生成の地色は優しく控えめながら、亀甲華紋がいかにもめでたく新春にふさわしい。いずれも結がこれまでに、目にしたこともないような品ばかりであった。

「これは……………」

もう一度、結が繰り返した。

「おまえの晴れ着や。明日、着たらええ」

「……………」
結は相変わらず呆然と広げた畳紙の華やかな品々に見入っていたが、ようやく

「……………うちにはあの……………、勿体なすぎます……………」と消え入りそうな声で言った。

「アホか。せつかく仕立てた着物、袖も通さんと置いとく方がよっぽど勿体なかるうが」

修一郎はそう答えると、

「充三、明日は結の着付けを手伝うたれ。丸帯なんぞ結んだこともなかるうからな」と言った。

はい、というのを聞く間もなく、続けて

「おまえにも渡すものがある」と言つと、傍らの包みを充三に押しやった。

包みを解き、今度は充三が驚く番だった。

充三はこの着物 御納戸色の御召に見覚えがあった。数年前、母屋で迎えた最後の正月に修一郎が着ていたものだ。この頃には修一郎もまだ時々は着物を着ていたが、特に正月の着物姿は印象深く心に残っていた。

「これは、旦那様の」

「おまえにやる」

短くあっさりと修一郎が言った。

「旦那様」

「結にだけ晴れ着を仕立ててやって、おまえはボロで年越しさせる訳にもいかんからな。俺のお古やがお前は男や、それで我慢しとけ」
充三は顔を上げ何かを言いかけたが、また目を伏せるとやはり小さな声で言った。

「……………勿体のうございます……………」

「ふたりとも何や」

少しばかりうんざりした表情を作ると、修一郎が充三を遮った。

「こついつ時はウソでも嬉しそうにするものやろつが。ほんまに甲斐のない奴らや」

だがふたりは答えられず、溢れそうになる思いを胸にただ一層頭を垂れるだけであった。

10 / 往く年と来る年と3

新しい年が明けた。皇紀2603年、すなわち昭和18年の元旦である。

充三は日の出の前に結の寝部屋を訪ねた。着付けを手伝うため、丹前をひっかけただけの寝間着姿である。結はすでに着物を着付けていたが、さすがに丸帯は難物のようで、途方に暮れた表情をしていた。

小さな電球の黄色い光に照らし出された結の晴れ着姿に、充三は目を細め眩しそうな表情を見せた。

「やっぱり、よう似合う…… 思った通りや」

そう言いながら帯を取ると手先を肩に上げ結の胴に巻きつけて、「踏ん張れよ」と声をかける。

「っ……！」

男の力で帯を締め上げられ、結は思わず踏鞴たたらを踏みそうになるのを堪えた。

充三は娘らしい文庫を結んでくれた。そして懐から紅白の水引を取り出すと、器用に梅結びを作った。

「せっかく上等な着物を着とるのや」

そう言って結の束髪からピンを何本か抜き取り、その頭に先の梅花を差し込むと、再び結の髪に差し入れた。

髪に散った小さな紅白の梅の花……

それだけで顔立ちがぐつと華やかに見える。

「ありがと…… 充三」

結は心から礼を言った。

「着物にはとうてい釣り合わんがな。何の飾り気もないよりはマシやろ」

充三は笑うと

「雑煮を炊く時に粗相するなよ」と言い、着替えに戻って行った。

日の出は充三と結、それから修一郎も起こして一緒に拝んだ。

充三と結のふたりはきちんと晴れ着に着替えており、修一郎は「馬子にも衣装やな」などと軽口を叩いたりした。

修一郎はあとのふたりと違い初日に向かつて手を合わせたりはしなかったが、やはり感じるものはあるのだろう。燃えるような日輪を見つめるのは、同じ敬虔な眼差しだった。

その後充三は修一郎の着替えを手伝いに寝間へ、結は雑煮の支度に台所へと戻った。

雑煮を炊き、居間の膳に煮しめの重箱を並べていると修一郎がやって来た。着物は先染めの無地、草木染めの柔らかく穏やかな色目だが、修一郎の知的な雰囲気によく似合っている。

「何をぼんやり見とるのや」

そう言われて、結は慌てて視線を膳に戻した。

いつも洋装の修一郎だったが、着物姿も意外なほどに板についていた。やはり自分たちとは育ちが違う……と思わせる、すっきりとした佇まいだ。

充三が修一郎のもの他にも腕を並べ始め、結は我に戻った。

「ええのや、今日は正月やからな」

うるたえる結に充三が笑いかけた。修一郎も

「おまえはもうそこに座つとれ。あとは充三に任せといたらええ」と言った。

膳が整い、充三も座ると、修一郎が改まって

「去年はよう世話になった。今年もよろしゅう頼む」と頭を下げた。

「とんでもないことです。わしらこそ……ようして貰って……本年もどうぞよろしゅうお願い申し上げます」

恐縮してそう言い頭を下げる充三に倣い、結も慌てて頭を下げた。

「さあ、結」

修一郎から杯を勧められ、結は困ったように

「いえ、そんな」と手を振ったが、

「そういう決まりや。ええから早う杯を取れ」と言われ、おそるおそる杯台から杯を取った。

雪のように白い、京焼の華奢な薄手の杯である。水引をかけた銚子からその杯に注がれたのは、美しい黄金色の酒だった。

件の香りが座敷一面に拡がった。さあ、と促され結は杯に口をつけたが、次の瞬間うつ、と息を呑むようにすると面妖な表情になった。

修一郎も充三も笑っている。ふたりは屠蘇を美味そうに飲んだ。

「屠蘇は気に入らんかったか」と充三に言われ

「……何か、あの……薬みたいな……」と答えると、その表情を見て修一郎がまた笑った。

「まあ薬で間違いないわ。薬酒やかならな」

それから箸を取って言った。

「さあいただこう。せつかくの餅が固うなる」

座敷は明るく暖かく、主人も使用人もなく杯を交わし同じ重箱をつつきあった。

雑煮の餅のなめらかさと甘さを陶然と味わいながら、結は郷里の家族を思っていた。年末に送金した折り、充三のはからいでで少しばかりの餅も送ることが出来た。

去年は正月どころではなかった。今年はみんなも、餅を食べているだろうか……

実家の侘びしく貧しい膳を思うと申し訳なさに身が縮む。しかし一方、今上等の綺麗な着物を纏い明るい座敷で正月の膳を囲んでいることに、後ろめたくも幸せを感じてしまふのだ。

「結」

と、充三が目を伏せたまま、さりげなく小さく声をかけてきた。

「……………」

結は我に返ると、湿った思いを胸から追い出した。

雑煮の椀を洗い終えた頃、充三が初詣に行こうと言ってきた。聞

けば毎年、元旦には近くの神社に詣でているという。

結は修一郎が神仏の類を拜んでいるのを見たことがなかった。離れには仏壇も神棚もない。今朝のご来光にも手を合わせようとはしなかったし、そういった信心というものを一切持たない人間なのだと思っていた。修一郎は常から極めて合理的なものの考え方をする男だった。

その修一郎が……と、少し奇異に感じたが、どうやら普段滅多に外へ出ない修一郎を、正月くらいは連れ出したい充三の思惑もあるようだった。

急いで髪を撫でつけ、襟元を直す。玄関ではすでに修一郎と充三が結を待っていた。

通りで改めて見るふたりの着物姿は、元旦の清々しい空気に良く映えていた。修一郎の手の杖がほんの少し痛々しかったが、それもまたしつくりと馴染んで見える。

羽織姿もぴたりと決まり、凛々しく美しい。修一郎はいうに及ばず、充三もまた下男にはとうてい見えない堂々とした姿であった。

「結さん、やっぱり結さんやないの……!?!」

鳥居の前で唐突に声をかけられ、結は振り向いた。

そこにいたのはやはり晴れ着姿の八重である。一瞬、どうしよう……、と思った。

自分が丁寧に縫い上げた上等の着物を、女中風情が着ているのを見たら何と思うか、と憚ったのである。果たして八重は

「その着物……」

と、いぶかるような声で続けた。

「新年おめでとうございます。結のお師匠さんですか。山岡修一郎です。いつもこれがお世話になってます」

うるたえる結の代わりに、修一郎が言った。

八重はあっ、と小さな声を上げ、ぴよこんと頭を下げた。

「八重と申します。気づきませんで、申し訳ありません。明け

ましておめでとございます……こちらこそよろしゅうお願い申し上げます」

それから顔を上げ、結に向かつて

「ほんまにその着物、よう似合にあうてますわ。帯ともよう合にあうて……
どこのお嬢さんかと思いましたが」

などと言った。

「すみません、うちなんぞが着させて貰もらうて……」

そう結がひどく恐縮するのを

「何を言つてますのや。せつかく旦那様が結さんにと誂たづえてくれはつたのを、ムダにするような事言つたらあきません」とも言った。

八重が一礼し、手を振って遠ざかるのを見送った修一郎が言った。

「あれが結の師匠か。少々けたたましいが、ええひとやないか」

「はい」

結も笑顔で応えた。修一郎が八重を気に入ったらしいことが、なぜか嬉しかった。

午後には離れに写真屋だという男が訪ねてきた。

写真屋といつても店を構えている訳でもないらしい。カメラの入った鞆たぶひとつを抱えての訪問である。

「ご家族ですか？」と訊ねるのに、修一郎は笑って

「そうや」と答えた。

「美男美女のご兄妹きょうだいでよろしいですなあ。お仲も睦むつまじゅうて……
晴れ着もほんまによう似合にあうてます」

と、男も機嫌良く、そんな世辞を言ったりした。

山岡といえは町中では相当に名の知れた家かと結は思っていたから、この男の反応には少しばかり驚いたが、修一郎も充三も知らん顔をしている。

庭と座敷で写真を撮とった。自分はこの近くの出身だ、元々神戸で写真屋をやっていたが、去年の空襲で店と家を焼かれてしまい、立ち行かなくなってしまうため引き上げてきた、いずれは町中にま

た店を持ちたいと思う……といったことを撮影の合間に男が語るのを聞き、ようやく結にも得心がいった。

町には古くから商っている写真館もある。そこではなく新参のこの男を呼んだのは、世間の耳目を憚ったためだろう。

晴れ着を着て屠蘇と節料理せちで正月を祝い、皆で初詣に出かけ写真を撮る

修一郎も充三も穏やかな表情で、終始笑顔を浮かべていた。空は抜けるように青く何の翳かげも不安もない……

結にはまるで、夢を見ているかのような一日であった。

11 / 往く年と来る年と4

数日後、写真屋が正月に撮った写真を持って来た。

すっかりした表紙付きの台紙に貼り込まれ、表紙と写真の間には薄葉紙もついた立派なもので、写真には「永澤寫真館」のエンボススタンプが押してある。写真の中の三人は晴れ着姿が睦まじく幸せそうで、本当に兄妹のように見えた。だが写真屋 永沢はこれまでにこの家の者についてどこかで聞き込んだらしく、愛想の良さは変わらなかったが、三人について二度と家族とも兄妹とも口にすることはなかった。永沢は同じ写真を小さな印画紙に焼き付けたものも持参していて、修一郎はそれを充三に与えた。

松の内が明け、離れも世間も常の暮らしに戻ったが、離れでは去年と違ったことがひとつあった。元旦を過ぎてても、食事の膳をそのまま三人で囲んでいたのだ。充三と結はひどく恐縮して何度も手を振ったが、修一郎は

「家族なら食事も一緒にとるのが道理やろう」とのみ言い、取りあわなかった。

年が改まってから初めて八重の長屋を訪ねたのは一月も半ばを過ぎてからだだったが、この時は少しばかり覚悟がいった。案の定八重はものをわかった風に振る舞いながらも、隠しきれない好奇に満ちたまなざしを結に向けてきた。

「ただの幼なじみやとは聞いてましたけど、結さんはてっきりあの充三さんとええ仲やと思ってきましたけどなあ。うちとしたことが見誤りましたわ」

決して悪意のある言い方ではなく、その口調はむしろ好意的ですらあったが、結にはどうにも気詰まりな話題であった。

「いえ、旦那様とはそういうことやないのです。あの……お着物の

「ことも旦那様の気まぐれで、お情けを頂戴しただけで……」

しどろもどろでそう答えると、八重は笑って

「まあなあ、あの若旦那さんはちょっと変わったお人らしいもんなあ」と言った。

そして自分が口をすべらしたことに気づかず

「そやけどなんぼ変わり者でも、ただのお女中に習い事させたり晴れ着を誂えたつたりはしませんわ。結さん相当気に入られてますで」と続け、したり顔で

「心配しなさんな、うちかてこの通りの寡婦やちめやし、色々口さがないことも言われてきました。うちは結さんの味方や、男女のことに身分のなんだの関係ありませんわ」などと言った。

「旦那様は、あの……世間では変わり者と思われとるのですか……？」

結にそう訊ねられ、八重もようやく自分の失言に気づいたらしいはっ、とばつの悪そうな表情をしたが、逆に結に聞き返してきた。

「……結さんは、その……山岡さんとは、何も聞かんと来たの？」

「うちはあの……、充三が先に奉公してりましたから……ええ旦那様やからと……」

こちらに参ったのは去年の五月くらいやし、そんなんで直接離れに伺ったので……ご本家のことやこの辺りのことも、何も知らないので……」

最後の言葉はつぶやくように消えた。最初から少し奇異には感じていた。修一郎が家督を弟に譲りひとり離れに引きこもったからといって、山岡家の一員であることに変わりはない。ましてや病弱な体だ。それなのに母屋の者は、使用人も含めて全く離れに姿を見せなかった。何も知らない、と言ったのは大げさでも何でもなく、結は山岡の家の者は誰ひとり、顔も、名前すら知らなかった。だが去年は修一郎などどうでも良かったから、特に気にかかりもしなかったのだ。

修一郎は倒れた時、「母屋には知らせるな」と言った。呼んでも誰も来ぬと　そして充三も、母屋は修一郎を厄介者扱いだ、とあの時はつきりと言ったのだ……

「そつだ、あの時だ……何か初めて、胸を刺したのは

「そやから……何かご存じのことがあったら、……どうか教えて下さい……」

結は小さな声でそう付け加えた。八重は困ったような表情で聞いていたが、しばらくしてから口を開いた。

「これは世間が言うことやで、誤解せんといてな？」

「そう前置きし、語るには

「一帯の大地主、山岡家の長男修一郎は病で家督を継げぬというが、家まで出るのは尋常ではない、病弱だというなら尚さらのこと、本家で静養するのが道理ではないか、それを追い出したのはひどく風変わりな男で、どうやら本家でも持て余しているかららしい……」

と、噂好きの雀どもが裏通りでこっそりさえずっていたということであった。

「二十歳はたちになっても兵隊にもなれんのは、手足がないからやとか頭が弱いとかが……若い娘の生き血を吸うとかなあ……　山岡さんともご長男のことはずっと隠すようにしとったから……　きつと人前には出せん、よつぼどの偏屈へんこくか片輪者に違いないと　」

と、さすがに言いにくそうに八重は続けた。

「そやけど会あつてみたら男前やし優しそやし、頭もよう切れそやなおひとやないか……　世間の噂というのは、ほんまにええ加減やで」

「……………」

八重が憤慨するように語り終えても、結は言葉を見つけられずにいた。聞きたがったのは自分だが、そうまで世間で好き放題に言われているとは思っていなかったのだ。

また八重の口ぶりから、八重自身も修一郎について、仮にも長男が本家を出るにはそれなりの理由があるう……と考えているらしい

ことが伺われて傷ついたのには、自分でも驚いたほどだった。

12 / 往く年と来る年と5

「……旦那様は……、そういうおひとやありません……」
と、しばらく経ってからどうにかそのみを小さく言った。

「わかつてますて。ごめんな……しょうもないことを聞かせてもて……自分の奉公先のことを何も知らんのも気の毒かと思つて喋つてもたけど……やっぱり言うのやなかつた……」

八重に申し訳なさそうにそう言われ、結もようやく我に返り

「いえ……うちの方こそすみません……言いにくいこと言わせてしもうて……」とまともな返答をした。それから

「すみません、あの……」と口ごもり、

「お正月に住吉さんの前で会つたことは、他のひとには言わんでください。旦那様のことは、もしどなたかに何か言われても知らん顔しとつてください。お願いします……」と頭を下げた。

結の思いの外思い詰めた表情に八重は戸惑つた様子だったが、自身も表情を引き締めると

「大丈夫です。何にも言うたりしません。さつきも言つたやろ、うちが結さんの味方や」と請け合つた。

八重は確かに人柄は信用がおけた。ただその口の軽さがどうにも心許なかつたが、結は

「すみません、よろしゅうお願いいたします」とのみ繰り返し、再び頭を下げた。

「なんや、どないした。八重さんに正月のこと、からかわれでもしたんか」

帰宅した結のつかぬ表情に、充三が笑つて声をかけた。

「充三……」

結は一旦は顔を上げ何かを言いかけたが、またうつむいてしまつた。

「……なんぞしようもないことでも言われたか？」

充三の口調は優しくかった。結は慌てて首を振った。その後何かも言いたげにしていたが、とうとう

「なあ充三…… 旦那様は、なんで母屋を出られたの？」と訊ねた。

充三はほんの少し虚をつかれたような表情をしたが、しばらくの後「おまえには話したことなかったか……」と言い、

「その話は後でな」と続けた。

「旦那様の前で辛気くさい顔をして、よけいな心配をかけんようにな。おまえはすぐ表情かおに出るからな」

充三がそう言うのには理由もあり、数日前からどうも修一郎の加減が良くないのだった。

たいしたことはないというので城崎も呼ばず結も予定通りに出かけたが、この日も修一郎は早めに床に就いた。

夜、結の寝間を訪ねた充三は、ぽつぽつと母屋と修一郎のことを結に語って聞かせた。

自分が奉公した頃にはもう、修一郎と使用人を含む母屋の人間の間には奇妙なわだかまりがあったこと。

修一郎には四歳年下の弟があり、早いうちにこの弟が母屋を継ぐことが決まったこと。

長ずるにつれ、家内で孤立していったこと……

「旦那様はあの通りで昔から今風な考えのお方やし、ものもよう知ってなさるし……元々大きな古い家柄には似合わんおひとやったんやろ……」

充三はそう言いつつたん口をつぐんだが、しばらくしてから少し苦しげに付け加えた。

「……それにあの病や みなお気の毒には思ってたやろうが 気味悪そうに遠巻きにしとって……」

「……………」

結にはその、遠巻きにしていたという者の気持ちもわかった。自分自身が修一郎の突然の吐血に腰が抜けそうになっただし、あの血の

色を恐ろしいと思ったからだ。

「……………充三は……………気味悪うはなかったのか……………？」

充三はちらりと結を見た。それからうつむき、

「わしは旦那様には、ようかわいがって貰^{もろ}うたからな」と言った。

「充三は……………」

と、結は再び問いかけた。しばらくためらった後また口を開き、

「……………充三も、……………何か世間に言われとったのか……………？」と口ごもるように訊ねた。

「……………」

部屋の灯りは薄暗かったが、掻き立てた手焙りの炭の赤に充三が少し口元を歪めたのが見えた。

「八重さんにも困ったもんや」

「八重さんのこと、悪う言わんといて」

即座に結が遮った。

「うちが無理やり聞いたのや。八重さんは言いにくそうにしとったのに」

「そうか」

充三は立ち上がった。

「わしが悪かったな。おまえにも早いうちに、ちゃんと言うっておけば良かった」

それから^{いたわ}労るように肩に軽く触れて言った。

「もう寝え。世間のことは知らんぷりしとつたらええ。言うても山岡の離れや、正面切ってしようもないことを言うてくるヤツはおらんわ。おまえは何も心配せんでええ」

そう言うつと板戸を開け、

「旦那様のことは、わしらがわかっつたらええのや……………」と付け加え、振り向かずに出ていった。

「……………」

わしが悪かった、と充三は言った。だが結は、悪かったのは自分だと思った。

修一郎について、充三は何度も語ろうとしていたと思う。だが自分が聞く耳を持たなかったのだ。

もう少し早く、素直な気持ちで充三の言葉に耳を傾けていれば良かった……

そうすればもっと早く、わかってあげられたかも知れないのに。

修一郎の孤独も……充三の胸の内も

まだ幼いうちに家を出され、見知らぬ土地でたったひとり働いていた充三には、修一郎の気持ちがいほどわかったに違いない。また修一郎も、そんな充三だったから心を許したのだろう。結にはようやく、ふたりの不思議な絆がわかった気がした。

自分はとうていかわらない……

それでも、と結は思った。

ほんの少しでもいい。ふたりの支えになりたい。

それがこの年の初めに立てた、結の誓いであり願いであった。

……っ……あ……

襖の向こう、修一郎の寝室から、くぐもった、押し殺したような声が聞こえてくる。

充三は夜具に横たわったまま眉根を寄せた。聞く気もない……聞きたくもない声がまた、引き寄せた布団の中に小さく忍び入ってきた。

ああ……っ、と、小さな悲鳴のような声が上がった。

「……………」

充三は奥歯を噛みしめ体を固くしていたが、ついに起きあがると隣室のふたりに気取られぬよう、そつと寝間を抜け出した。

冬の夜空は凍てついて美しく、星は降るように煌めいている。

しかし充三は空の星など見ていなかった。寝間着の上に丹前一枚のみを羽織った体は、切れるような夜の冷気に晒されて瞬く間に凍えてきたが、それも充三にはどうでもよかった。

暮れの辺りから修一郎は結を責めるのに自分の寝間を使い、ことが済んだ後もそのまま留め置くようになった。以前は自分が満足すれば、結を放って自室へ戻るのが常だった。放り出された結を慰め満たしてやるのは、充三の役目だったのだ。

だが今は違う

先刻のあの声、どうしようもなく漏れだしてしまう、焦らされむずかるような結のあの声を、これまでに何度聞いたことだろう。

結のあの声は確かに自分のものだった。だがそれももう、充三の腕の中からすり抜けた。

結と修一郎が心と体を本当に通わせてひとつになる 望んだ通りになっただはすなのに、結への執着から逃れられない自分のこの滑

稽さはどうだ……

結の痴態がまざまざと脳裡に蘇り、再び体の芯が脈打った。充三は思わず両手で顔を覆った。

うちのこと、あさましいと思わんというて

いつか結はそう言った。

そんなことを思うわけがない、と答えたのは紛うことのない本心だ。その思いは今も変わってはいない。

だがあの時の自分を思うと、苦い後悔が胸を刺すのだ。

自分は何もわかってなかった。泣いていた結の気持ち、今はわかる……

心が、意志がどうであれ、体は全くお構いなしだ。体は心に頼着しない。是も非もなくただ貪欲で、素直だ

結の小さな獣のような声に火をつけられた自分の体が、充三にはただ哀れで惨めだった。

「もつと声を上げる。隣の充三にも聞かせたれ」

腕の中の結の体がおののいた。修一郎は先刻充三が寢床を抜け出したことを知っていたが、結は気づいていない。

「充三の奴、おまえがきつい目に遭わされとるのやないかと布団の中で気を揉んどるのに違いないわ」

「やめて下さい、堪忍して下さい……お願い……充三のことは」

言わないで……という言葉は涙に消えた。しかしその体は涙とは裏腹に、一層熱を帯びてきた。

「それともどこか、違うところを揉んどるかもな……」

修一郎が追い打ちをかけるように言った。結は修一郎から逃れようとするかのように身をよじったが、柔らかな部分をまさぐられ、また声を上げた。

熱い肌、上気した頬。そこに伝わる涙のあとも切なげに歪んだ表

情もかわいと思う。きつく責められて泣きじゃくる結もかわいが、それを見るのとはまた違う感情が湧く。

修一郎はふと、今この場に充三を呼び、腕の中の結を見せつけた衝動に駆られた。

結に縄をかけ、これを責めるのは充三の仕事だった。結のどんな狂態を見てもほとんど表情を変えなかったが、今の結を見てもあの感情を押し殺した、仮面のような表情を崩さずにいられるのだろうか……

俺は充三の泣き顔が見たいのか……と、情念の火が小さく灯るのを感じながら修一郎は思った。

充三とのつきあいはもう十年にもなる。最初は数ある使用人のうちのひとりでしかなかった。特別に目をかけた覚えもない……ただ、自分よりも幼い子供が半人前の仕事しか出来ないことを理由に馬鹿だのろまだと大人達から罵られ、小突きまわされているのを見るのが不快だったただけだ。

充三を庇い、他の使用人に釘を刺した。いじめは表向きはなくなったが、裏に回れば陰湿な報復が続いていたことを修一郎は知っていた。しかし修一郎は、それについては救いの手を差しのべることをしなかった。充三が己れの窮状を、修一郎に訴えようとしなかったからだ。充三は当時から感情をあまり面おもてに表すことのない、無口な子供だった。

あの時も俺は……充三の泣き顔が見たかったのか
子供の頃の話だ。明確な思惑があつてしたことではなかった。今まで忘れていたくらいだ。修一郎にとっては些末な出来事のひとつに過ぎなかった。だが今唐突に蘇ったそれは、修一郎の胸中の思いに確かな根拠を与えたように感じられた。

自分が充三を庇い他の使用人を頭ごなしに叱れば、どんな反発があるかなどわかりきっていた。俺は待つていたのだ。充三が哀れっぽく泣きながら、俺にすがり助けを求めて来るのを……

だがあの頃充三に対して抱いていた気持ちは、自分よりも弱い者

への憐れみと、それとは裏腹の残酷な快樂に過ぎなかったはずだ。

充三に対する捻れた思いを自覚したのはいつだったろうか。

充三がいなくては生きられないと悟った少年の頃か、それとも母屋を出、ふたりで暮らし始めた頃か……

自分を慕い、心から尽くしてくれる充三が愛おしい。守ってやりたいとも思う。だがその思いが強ければ強いほど、手ひどく傷つけたくもなるのだ。

最初、充三から幼馴染みを雇って貰えないかと頼まれた時、微かな棘を胸に感じた。修一郎には女中など全く必要なかった。身辺はすべて充三で間に合っていた。結を雇ったのは、それが充三の頼みだったからに他ならない。

普段自分に対し何かを求めるといふことのない充三の、たつての頼みに心が動いたのだ。

この男が心にかけている、結という娘を見てみたいと思った。

なるほど結は良い娘だった。充三が大切にしているのも頷ける……しかし充三とは違い自分に心を許さない結に、修一郎はたいして興味を惹かれなかった。常に身近にあり、いつでも好きに責めることができるというだけで、修一郎にとっては結はそれ以前に買った女と大差なかったのだ。修一郎が見ていたのはあくまでも充三だった。

結自身に心が動いたのは血を吐いた夜だ。

あの夜、自分を見つめて涙をこぼし、自ら唇を押し当ててきた結……その涙とくちづけの意味を知りたいと思った。結が修一郎の心に触れたいと願った夜、修一郎もまた結の心を知りたいと初めて思ったのである。

充三ではなく、結の心を　だが次の朝、充三に気遣われて口について出た言葉は、やはりこの男の心を試すものだった……

俺は生まれついで、この性うしろか……

結がまた小さな声を上げた。熱い腕が絡みついてくる。微かな苦

みを胸に感じながら、修一郎は腕の中の蕩けた体を抱きしめた。

四月になり、雪融けにぬかるんだ道を郵便夫がやって来た。

郵便物が速達であったため、それは応対に出た結に直接手渡された。

「……………」

宛名を見、裏返して差出人の名を見た。心臓が激しく動悸を打ち、封書を持った手が瘡おこりにかかったように震え始めた。

封書の宛名は五百蔵充三いおろい、差出人は五百蔵巖男　　充三の伯父であつた。

「じゅ、充三……………」

庭に作った畑に鋤すきを入れていた充三が、怪訝な表情で振り返つた。

「なんや結、へんな声を出して　」

言葉は途中で消え、片頬に浮かべた笑みも消えた。充三は鋤をその場に置くと、色を失つた結のそばへとやって来た。

「どないした？　何かあつたのか」

「……………これ……………」

ようやく押し出したような声。震える結の手から封書を受け取る。充三の表情も厳しくなった。

黙つたまま封を切る。入っていたのは便箋一枚に書かれた伯父からの短い手紙、そして幾重にか折り畳まれた赤い薄い紙　　俗に言う赤紙であつた。

「充三……………！」

結はすでに涙声だ。充三は

「旦那様に言つて来る」とのみ言つと、その場を立ち去つた。

「……………」

ひとり残された結は心許なく鋤を拾い上げた。年が明けてから充三は、細々した家内のことや力のいる仕事を暇をみては少しづつ片

づけていた。今畑を耕していたのも、いつ来るかわからない召集に備えてのことだとというのは結にもわかっていた。

しかしどれだけ覚悟をしても、やって来た召集はやはり突然にしか思えなかった。

充三がいなくなる 戦地に行ってしまう……

去年からこの日が来ることはわかっていたはずなのに、結の心は嵐に翻弄される木の葉のように乱れていた。

居間では充三が修一郎の前に伯父からの封書と赤紙を置き、暇を告げていた。

「入営はいつや」

修一郎は赤紙を一瞥もせず、充三に訊ねた。

「四月六日です。伯父が早めに戻ってこいと……村で壮行会をしてくれるそうです」

「そうか」

とのみ、修一郎は応えた。

「村へは二日前に戻ります。朝が早いので、入営には前日に出ないかんから……」

充三は目を伏せたままそう言い、

「伯父の気遣いは有難いが、どうせ帰っても……会いたいひとがある訳やなし、行くところもありますから……一日あれば十分やろ」と、続けてそう言った。

修一郎が顔を上げ、立ち上がると障子を開けた。そこには不安そうな結の姿があった。

「あ……っ」

「結、聞こえたか。充三は明々後日に発つ。今夜は何か、美味しいものでも拵えたれ」

「……あ」

結はうるたえた声でこちるように言った。

「そしたら……あの……は、配給の小豆がまだ残つとるから……お

「…………お赤飯でも…………」

「赤飯？」

修一郎の眉が上がった。

「なんでや」

「……………」

その声に充三は修一郎の背中を見、それから気遣わしげにその向こうの結を見た。結は修一郎の固い声に怯えたような表情をしていた。

「あの…………、あ…………お…………おめでたい事やから…………」

「何がめでたいか！」

結を遮り、修一郎が一喝した。結が初めて聞く、修一郎の怒号だった。

「ひとを殺しに行くのやぞ…………！これも殺されるかも知れんのや！そのどどこがめでたいのや！」

結の目から涙が溢れた。充三が素早く立ち上がった。

「泣くな！鬱陶しい！」

充三が泣いている結の肩を抱きかかえ、引きずるようにして連れ去った。修一郎は苦しげに歪んだ表情のまま、それを見送った。

「ええ加減にせんか」

台所の隅で充三が、しゃくり上げる結に持て余したような声で言った。

「うち…………うちは…………本気で言つたんと、違つ…………」

「わかつとる。そんなこと、旦那様にかてわかつとるわ」

充三はもう一度結の肩をしっかりと抱くようにすると、子供を諭すように

「泣きやんだらしつかり顔を洗つて来い。ええな。旦那様にちゃんとお詫びするのやぞ」

「と言い、居間へと戻って行った。

「……………」

ぐすつ……、と、結はまた涙を噉り上げた。

郷里でも何度か出征兵士を見送ったことがある。中でも印象深く覚えているのは、叔父が応召した時だ。

結は十二才だった。祝い膳が出、大人達は酒も飲んでいたと思う。結達子供もおおぼれに与つて、普段は口に入らないようなご馳走を食べた。大人達は口々に「おめでとう」とか「これでおまえも一人前の男や」「お国のためにしっかり頑張つて来なさい」などと言っていた。翌朝、皆の万歳三唱とさざめく旗に送られて村を出る叔父は背広姿に襷をかけ、子供心にも晴れがましく見えた。兵隊になるのは義務であると同時に名誉なこと。当たり前のようにそう感じていた。

叔父を送ったその夜、夜半に目覚めると母が泣いていた。

父はひどく不機嫌そうだった。「泣くな、子どもが起きるやろうが」とでも言っていたかも知れない。

「あの子はまだ二十やのに……嫁もまだ貰うてないのに」
ちっ、と父が舌打ちした。

「兵隊なんぞ早う勤めてくる方がええのや。二年もすれば戻る、したらもう立派な一人前やないか」

「そやかて……もし……」

その後は聞き取れなかった。続く言葉を憚つて呑み込んだのかも知れない。結は昨夜、そして今朝の母を思い出していた。

母は終始笑顔で嬉しそうにしていたではないか。どうして今泣いているのか……

この叔父は、ついに戦地から戻らなかった

そこまで思い出すと、またじわりと視界がぼやけた。

戦とは大切なもの、大切な人を守ることはないのか。兵士は国のため、大君のために戦うのではないのか。

そのための犠牲なら、それは誇りであり誉れだろう。だから皆で祝わねば。

例え死ぬかも知れぬとわかっていても　それを憂うのは女々し

く、いけないことなのか

幼い心に芽生えた漠とした疑問は、それからもずっと結の胸のどこかにあった。そこに修一郎の言葉が突き刺さった。

戦が誰かの大切なひとを殺し、自分の大切なひとを殺されることだとしたら……

それでも、死地に赴くひとを祝わねばならないのか

結は立ち上がると洗い桶に水を張った。

その中に手を突っ込み、掬い上げると、何度も顔を洗った。

だが、涙は後からあとから湧いて出た。

「すみませんでした……」

居間に戻った充三が詫びた。

「なんでおまえが詫びるのや」

充三を見ずに修一郎が応える。

「……旦那様」

それには答えず、充三が言った。

「さつき結に言ったようなことは……二度と口にしてくださるな」

修一郎が顔を上げ、充三を見た。それからまた顔を伏せると

「わかつとる。俺かて官憲は恐いからな」と自嘲するように言った。

「特高にはたかれでもした日には、俺なんぞひとたまりもないわ」

だがそう言いながら、修一郎は続けた。

「危のうなったら逃げろ。逃げ切れんと思つたら投降せえ。恥知ら

ずでも非国民でも何でもええ……何をしても、生きて帰れ」

「……」

はい……、と、充三も目を伏せたまま答えた。

三日後、充三は離れを発った。

速達を受け取ったその翌日、充三は町で髪を刈ってきていた。さっぱりとした短髪に帽子を被り見慣れぬ国民服姿の充三は、結にはまるで別人に見えた。

朝、出立前に修一郎は結を呼ぶと、茶封筒を手渡して言った。

「充三を見送つたれ。旅費には十分足りるやる。他にも何か入り用なら、そこからいるだけ遣うたらええ」

「……はい…… ありがとうございます……」

封筒の中には五円札が十枚入っていた。小さな声でそう答えると、修一郎は少し笑った。

先日、怒鳴られてからどうにも気まずく、結は言葉をかけられないどころか修一郎の顔すらまともに見られないでいた。一方修一郎も、元々饒舌な質^{たち}ではない上に充三の入言が堪えたらしく、この三日、ほとんど口を開かなかった。また充三はとうとうこの間は何かと気忙しく、常のようにはふたりを気遣えなかったのである。

「充三が待つとるやるう……行こう」

「では行つて参ります」

玄関でそう挨拶した充三に修一郎が言った。

「必ず戻れよ。おまえがおらんと俺が困る」

口元は笑っていたが目は笑っていない。哀切のこもった眼差しであつた。

「わかつてます。必ず戻ります」

充三も笑顔を作るとそう言い、修一郎の手を取った。

「旦那様もお元気で……！ 必ずご無事でおつて下され」

それから一礼すると引き戸を開けた。

結は充三と共に離れを出、修一郎はひとりそれを見送った。

バスが終点に近づいた頃、結は手提げから茶封筒を取り出した。

「これ…… 旦那様が、旅費にせえと…… 他にもいるもんがあったら買えというて」

充三はわずかに怪訝な表情をした。そして笑うと

「いや、いらん。もう旅費も餞別も貰うた」と言い、封筒を結の手に押し戻した。

「どうせ金は軍隊ではいらん。餞別も余った分は私物と一緒に送るから、旦那様にお返ししてくれ」

やがてバスは終点 省線の駅の前に着いた。

そこには城崎と八重が充三を見送りに来てくれていた。どうやら散髪に町に出た際、充三が挨拶に向いたものらしい。

「この度はご出征おめでとう存じます」

などと八重が言い、充三も

「ありがとうございます。お国のために頑張って参ります」としっかりと答えた。

「このこと」

と、結を示して

「よろしゅうお願いいたします。どうか力になってやって下され」と頭を下げると、八重も

「結さんのことは何も心配いりません、うちにまかせてください」と請け合った。

充三は次に城崎に頭を下げ、

「行って参ります、先生。旦那様のこと、くれぐれもお頼申します」と言った。

「わかつてる。おまえも元気だな。この人のように太鼓判を押してはやれんが出来るだけのことはするから、修一郎君のことは心配せずにしつかり務めて来なさい」

城崎はそう答え、続けて

「修一郎君、今朝の具合はどうや」と訊ねた。

「腫れも大分引いてお元気です。ほんまは見送りにも来てくれると言われたんですが、わしがお断りしました」

「……………」

結は一週間ほど前、城崎が訪ねてくれたのを思い出した。城崎の訪問は日常的といっても良かったから、結はこの頃はあまり気にかけることもなくなっていたのだ。

「旦那様……具合が悪かったのか……？」

うるたえた声で小さく訊ねると、充三も小さな声で答えた。

「ちよつと腫れただけや。どうちゆうことはない。おまえには黙つとけと言いなさつた」

おまえはすぐに取り乱して泣くからな……、と充三が付け加え、結は頬を赤らめて俯いた。

「充三さん、これ」

八重が気を利かせたか、明るい声で差し出したのは守り袋であった。

「ここらのお社は全部入ってます。結さんは忙しいやろうと思つて……差し出がましいかとも思つたけど集めてきました。どうぞ持つて行つて」

「ありがとうございます……！ いただいて参ります」

充三はそれを両手で受け取り、心から礼を言った。八重の心遣いが身に沁みた。結も頭を下げ、涙ぐまんばかりになつて

「八重さんありがとうございます……！ ……うち、ほんまに何にも至らんで……」と言つた。

充三のためにお守りを貰いに行きたい……、と考えかつた訳ではない。だが結は修一郎がそういった信心を持たないことを知っていたし、その前の一件で話しづらかつたこともあり、外に出たいと言えなかつたのだ。また充三にも、そんな結の気持ちはよくわかつていた。

「ええのや、こんなことはな、みんなでやればええのや」

八重は温かい声でそう言ってくれた。

地域で出征する者があれば隣保や職場で盛大に送ったりするものだが、修一郎をはじめ離れの者は世間とは最低限のつきあいしかなかったから、他に見送りの人もなく、いよいよ発車の時間になった。「今日はお見送りありがとうございます。お世話になりました。どうぞお元気でいてください……それでは行って参ります」

デッキに立ち、充三が頭を下げる。

「充三……！ これ」

結が手提げから包みを取り出し、充三の手に押しつけた。

「汽車の中で食べて」

「……………」

充三は包みを受け取り、笑顔を消すと拳手の敬礼をした。

その姿はきりりと凜々しかった。だが結の目には幼い日に見た叔父の姿が重なり、涙が溢れそうになった。

「五百蔵^{いほろい}充三君、万歳！」

城崎が両手を挙げ、叫んだ。

ホームにいた何人かが気づき、同じく万歳の声を立て列車を送ってくれた。

充三はしばらくデッキに立ったまま流れていく風景を見るともなく見ていたが、やがて車内へと入り腰を下ろし、発車の間際、結が手渡してくれた包みを解いた。

それは竹の皮に包まれた牡丹餅^{ぼたんもち}だった。

「……………」

小豆はその赤が邪気を払うといわれ、災いから身を守るとされている。

充三はひとつつままで口に入れた。柔らかな、それでいてしつかりとした米と餡の歯触り。サッカリンなどではない、砂糖と小豆の上品な甘さが臍に沁み渡った。

町では結が、充三を見送った後バスにも乗らず、歩いて帰宅の途についていた。

バスは一時間に一本しかなかったが、歩いていたのはそれが理由ではない。ただ気が抜けたようになってしまい、何も考えられなかったただけだ。

「なんや……見送りに行かなんだのか？」

戻った結を見咎め、修一郎が言った。

「いえ……あの、今戻ったところです。あの……これ……」
と、結は腑抜けた表情のまま手提げをまさぐり、茶封筒を取り出した。

「充三が、もう旅費はいただいたからこれはお返しするようにと

」

しかし修一郎はそれを受け取らず、壁の掛け時計を見た。時刻は十時過ぎを指している。

「今から戻れば昼の汽車には間に合うやろ。結、それを持って充三を送りに行つたれ」

「……え」

朝と同じ言葉を繰り返され、ようやく修一郎の言葉の意味が呑み込めた。しかし結は、しばらく答えられずにいた。

「……そやけど……あの、旦那様……おひとりにして……」

「おまえが一日おらんくらい、何でもないわ」

修一郎はほんの少し顔を歪めてそう言い

「早う行け……！ さっさと行かんと間に合はんぞ」と結を急せぎ立てた。

先刻の充三と城崎の会話がちらりと胸をかすめたが、同時に充三の「どうちゆうことはない」という言葉も思い出した。

もし修一郎が少しでも注意の必要な状態なら、あの充三があんなことをいう訳がない……結は素早く自分にそう言い聞かせた。もう

心は郷里へ 充三の許へと走り出していた。

「すみません、旦那様 ありがとうございます……！」
急ぎ込んで一礼すると踵を返し、結は駆けだした。

充三と結、ふたりの郷里は山あいの小さな村である。

省線で四時間、そこから私鉄に乗り換え更に一時間、充三は郷里へと降り立った。ここからは徒歩である。山に囲まれた駅からころどころに雪の残る道を三十分ほど歩くと、やがて麓の谷間にへばりついたような村落が見えて来る。

「充^みつちゃん……！」

小さな農家の、ちょうど庭先に出てきたもんぺ姿の女が声を上げた。

「ご無沙汰してます、ただ今戻りました。節^{せつ}伯母さん、お元気でしたか……」

充三が挨拶を終えないうちに、女は母屋に向かって叫んだ。

「あんた！……あんた！ 充^みつちゃんが帰って来たよ！」

その声に、五十がらみの男が顔を出した。充三の伯父、巖男である。

「充三……！」

「伯父さん、ただ今戻りました。お世話になります」

そう言つて充三は頭を下げた。

「おまえは早う帰って来いと手紙に書いたのに、こんなぎりぎりで帰つてほんと…… 遠慮なんぞするなと言つたのに」

「すみません、お氣遣い嬉しかったです。そやけどわしも奉公の身やから……」

充三がそう言つと、巖男も複雑な表情になった。

「まあなあ。そら、好きなようにはでけんわな……」

巖男には充三に対する奇妙な負い目があった。先年、充三の親は借金を踏み倒して逐電した際、行きがけの駄賃とばかりに巖男をはじめとする親族からも金を掠めていった。

その借金を、充三が耳を揃えて返済した。巖男達は虎の子が戻つ

たことに安堵はしたが、まだ若い奉公人にそんな大金のある訳もないことは皆わかっており、可哀想にこれで充三は一生山岡家の飼いきりに違いない、独立はおるか嫁も当然貰えまい……などと嘯きあったのである。

「立ち話なんかしとらんで、早う入り。この人のやけど、着替えもしたらええ」

節の声にふたりは振り返った。

「おお、そつや。疲れたやろう、まずは休め」

「いえ」

と充三が笑顔で手を振った。

「着替える前に、ご近所にご挨拶に行つてきます」

早う戻つておいで、という節の声に送られて、充三は伯父の庭を後にした。

村長や村の主だった人々への挨拶を終えて巖男の家へ戻り、ようやく一息入れているうちに日が暮れた。

此度の入営は村からは充三を含めて三人、そのうちのひとりが比較的大きな家の次男であつたため、壮行会はこの家で催された。この席には除隊し村に帰還していた者も来ており、充三達に軍隊生活の心得などを話してくれた。

夜も更けた頃、巖男が言った。

「わしは先に帰るからな。おまえも疲れとるやろう、適当に切り上げて帰つてこい」

正直なところ充三も、そろそろ暇乞いをしたいと考えていた所だつた。自分たちのために壮行会を催してくれたことは有難かつたし、予備役よびえきの男の話も大層参考になつた。村人も親切にしてくれたが、早くに村を出た充三にはどこか余所者のような疎外感があり、また親の不始末もあつてどうにも落ち着かないのだった。

それで充三も適当に人が切れたところを見計らい、人々に礼を述べてその場を辞した。

四月とはいえ春は名ばかり、この日も夜はしんと冷えていた。月影は皓々（こうこう）と冴え、夜道を明るく照らしている。

月影にふと見知った姿を見た気がし、充三は立ち止まった。小さな体。見覚えのあるいでたち

「……………結か……………？」

充三の訝るいぶかような言葉と同時に、影が顔を上げた。

「充三……………！」

駆け寄ってきた結を充三は一瞬ためらいながらも押し戻すようにし、常にない声で言った。

「おまえ……………！　なんでここにおるのや！？　旦那様は……………」

「ええのや、充三……………！　旦那様が、おまえを送ってこいと言いなさった……………」

充三を見上げたその瞳はすでに涙で潤んでいる。

結は自分を押し戻した充三の腕をもともせず、再び体を押しつけて言った。

「そやからええの　今夜は、ええの……………！」

「……………」

腕の中の、確かな重みと温み。もう我慢出来なかった。

充三は結の体を抱きしめた。

「なんや充三、そんなとこに突っ立ってどないした……………」

巖男の声が途中で消えた。

戸口を叩く音がし、充三が戻ったのだらうと放っておいたのだがいつまで経っても入って来る気配がない。不審に思っ戸を開けると、果たしてそこに立っていたのは充三であった。

「……………」

巖男は眉を顰め、充三の後ろを透かすように見た。思いつめたような表情で戸口に立ったままの充三の傍らに、若い女らしい影があ

った。

「おまえ……！ 田川のこの、お結やないか……？」

「すみません、小父さん……」

影が消え入りそうな声で答えた。俯いているせいでほとんど聞き取れない。

ふたりの手が固く結ばれているのを見て取り、巖男の表情はひどく面妖なものになった。

「なんでここにおるのや……こんな時間に…… おまえ、家には顔を見せたのか……？」

「家うちには、帰りとうない…… どうせ明日は朝一番に戻らなあかんし……」

「ちょっとだけでも、うち……」

俯いたまま小さな声で、それでも結は今度ははつきりと言った。

「今夜は充三と、居りたい……！」

「……あんた？ 何してるの」

奥から聞こえた節の音が終わるか終わらないうちに巖男が声を上げた。

「節！出かけるぞ！ 正治せいぢんとくに用事があったのを忘れとった」

正治というのは巖男の弟である。充三にとっては叔父に当たり、先の壮行会にも列席していた男だ。

「ええっ？ あんた、こんな時間に何を」

咎めるような口ぶりで土間に姿を現した節はそこに充三と結の姿を見、先の巖男と同じ表情になった。すなわち唾然としながらも、困惑と憐憫が眉の辺りに見える表情である。

「ええから早う支度せえ……！ お前も来んのや」

巖男の声に気圧されたかそれとも事情を察したか、今ひとつ納得のいかない表情ながらも節はまた奥へと引つ込んだ。

「申し訳ありません……伯父さん」

心から詫びながら、充三と結は深く頭を下げた。

「わしらは明日の朝には戻る。布団も敷いてあるし風呂もたててあるからゆつくりしたらええ。どうせ軍隊に入ったら、のんびり風呂なんぞ浸かれんからな。結もよう冷えとるやろ、ちゃんと温めたれ」
節が自分と夫の上着、そして小さな手提げを持って再び戸口に現れた。

元々節は、親からは軽んじられることの多かった充三を、幼い頃から可愛がってくれた女であった。ちらりと結を見たが何も言わず、巖男の後ろについて夜道に消えていった。

「……………」
 ふたりの後ろ姿を見送り、充三はつないだ結の手を引いて巖男の家の敷居を跨いだ。

小さな家だが竈かまども見える。土間の他には筵敷きの一間しかない結の家とは大違いだ。

囲炉裏の火にはすでに灰が被せてあったが、充三に寝間として供された仏間には赤々と炭を熾いこした火鉢が置いてあった。布団の枕元には男物の寝間着の他に、節のものであろう女物のそれも並んでいる。

「……………ええおひとやな……………」

思わずつぶやくように結が言くと、ほんの少しの沈黙の後、充三も言った。

「ほんまにな……………こんなろくでなしの倅に、ほんまに良うしてくれ……………」

「……………」

その言葉の裏にある充三の心を思うと、結の心も痛んだ。

「そんなこと……………借金かて、おまえが綺麗にしたんやないか」

「わしやない。旦那様や」

結を見ず、充三は今度は即座に答えた。

「わしの親が借金踏み倒して逃げたのはおまえも知つとろうが……………」

その時、巖男伯父さんや他の縁者からも、なけなしの金を巻き上げて行きよつたのも知つとるか？」

「え……………」

初めて聞く話である。ひとつの家族が借金に追われ突然村から姿を消したというのは大事件で、結も理由はもちろん知っていたが、そこまでだった。嗜好きのおとな達も子供の前では口をつぐんだということか、それともまだ子供だったから、そうした事情には関心

がなかったのか…… 当時結は十三かそこらだった。ひとり放り出された充三のこのみを、ただ心配していた。

「……充三」

「利子だけでも返さな金貸しに殺されると泣きついてな……返す気なんぞ元々ないくせに」

苦しげに表情を歪め、充三は続けた。

「話を聞かされた時、倒れるかと思つたわ……金貸しの借金だけでも大事おおごとやのに、親戚からまで……そんな大金、どこにあるんや」

「……充三、もうええ。もうええから……」

遮るように結が言った。普段あまり感情を面おもてに出すこともなく、自分を語ることもない充三が今夜は胸の内を明かすのは、やはり最後の夜だという思いがあるからかも知れない。だが結はそれを認めたくはなかったのだ。

「旦那様の金や。あの頃、旦那様は母屋を出たばかりで……足らん分は母屋から借りて下さった。金貸しとは縁を切れ、縁者には筋を通せと言つてな」

そこまですると、充三は目を伏せ、一旦口をつぐんだ。

「……わしのために、旦那様に頭を下げて……あの旦那様が……」
そう言つと顔を上げ、充三が結をまっすぐに見た。

「結、わしは必ず戻る。そやからそれまで、旦那様を頼む」

「……」

結が答えられずにいると充三は表情を緩め優しい眼差しで、両手で結の頬を包み込むようにした。

「しょうもない話はこれで終いや。先に風呂を貰つて来い……こなに冷えて……」

「……あ、ううん……」

我に返つて結が言った。

「うちはええ。せつかくおまえのためにたててくれたのやる。うちが先に貰つたらバチが当たる……」

「そうか」

と充三は笑い、寝間着を手にとった。

「そんなら先に使わせて貰うか。せっかくの気持ちや、これも借りよう」

そう言つて一旦は部屋を出かけたが、そうや、と結を振り返り

「おまえ腹は空いてないか？ 昼から何も食つてないのと違つのか」と訊ねた。

言われて初めて気づいた。昼どころか朝、充三を送る前に三人で食事をしたきりだ。それでも空腹を感じなかったのは、心が張りつめていたせいだろうか……

「うづん…… うち、お腹は別に空いてないから……」

充三は手荷物の中から、今朝結が手渡してくれた包みを取りだした。

「ほら。まだひとつふたつは残つとるから食べ」

「……………」

結はほんの少し気落ちしたような表情になった。

「白湯ゆづでも汲んで来たらう」

そう言つて部屋を出ようとする充三の背中に、

「……あんまり美味しゅうなかつたか……？」と問いかける。

充三が振り返り、笑つた。

「いや、美味かつた。あんまり美味うて勿体のうて、全部は食べんかつたのや」

結もようやく明るい笑顔を見せた。それが本当でも充三の気遣いでも、その言葉が嬉しかつた。

牡丹餅を食べ終え土間に立った結は湯飲みを洗つと外へ出、風呂場の充三に声をかけた。

「充三、お湯加減はどうや？ 少し沸かすか？」

「いや、ええ。寒かろう、内なかで休んどれ」

充三の声が答えた。だが結は母屋には戻らず、焚き口の側に腰を下ろした。

離れに奉公に上がった日、まず湯を浴びると言われて結は驚いたものだった。結の家には風呂などなかった。結にとっては、また他の村人にとっても、風呂は贅沢なものだったのだ。この辺りでは貰い湯も当たり前だった。

「……………」
最初の日のことを思い出すと、今でも胸が痛む。

充三と、主になる人とはいえ初めて会ったばかりの男達の前で裸に剥かれ、恥ずかしい部分まで無遠慮に覗き込まれた。そのあと充三が体を洗ってくれたが、それも結には辛かった。泣きじゃくり当たり散らす自分を、あの時充三はどんな気持ちで受け止めていたのか……………」

結は小さく頭を振り、苦い思い出を振り払った。

「……………充三」

再び問いかける。

「……………なあ、正直に教えて。うちと旦那様と、……………どっちが大事や……………」

今度は返事がない。結は小さく笑うとため息をひとつ漏らした。充三に答えられる訳がない。バカなことを口にしてしまった……………ざざ、と湯を流す音がし、ややあつて充三が姿を現した。

「ええ湯加減や、おまえも入れ」

「……………」

うん……………、と笑って答え、結は立ち上がった。

「なあ結……………」

湯に浸かり凍えた体を温めていると、外から充三の声がした。

「うん？ 何？」

「……………わしにはおまえも旦那様も、同じだけ大事や……………」

「……………」

溢れてきた思いを言葉に出来ずにいると、再び充三が言った。

「それではあかんか……………」

「うっん」

結は急いで答えた。

「充分や……ありがと、充三……」

言っているそばから涙がこみ上げ、声が震えた。

充三はかつて修一郎を恩人だと言った。だが充三にとって修一郎は、ただ恩人という言葉のみで表せる存在ではないことは、結にはよくわかっていた。

多分充三は、修一郎のために生きているのだ……

そうであれば、その修一郎と同じだけ大事だ、という充三の言葉には、どれだけの重みがあることか。

自分自身も、もう充三ひとりを思っては生きられないのだ。修一郎は結にとつても、今は大切な人だった。

満足しなければ……と、結は思った。何よりも心を試すようなくだらない問いに、真摯に答えてくれた充三が愛しかった。

湯を貰い仏間に戻ると、明かりを落とす中、充三が火鉢で手を焙りながら見るともなく炭火を見ていた。

その横顔は頬が赤く照り映え、瞳に映った熾あきの色と相まって美しい。若い男のみが持つ青臭い色香が、綺麗に剃り上げられた襟足の辺りに漂っていた。

「……………」
よく知っているはずの充三が、まるで初めて見る男のように思える……………」

体の内側を切なさが満たした。それが何なのかわからず、結は戸惑った。

「なんや結。そんなとこにつつ立つとらんと早う来い」

結に気づき、充三が笑って手招きした。結も少し笑うと襖を閉め、素直に充三に身を預けた。

「結……………」
吐息のような声で名を呼びながら、充三は結を抱きしめた。結の髪髪の甘い匂いを胸に吸い込むと、なぜか心に懐かしい幼い日々が蘇った。

結の口からも切ない呼吸こきが漏れる……………」

その呼吸を呑み込むように充三が唇を重ねてきた。

充三の唇は少し荒れていた。かさかさとした乾いたその感触も、結の心を締めつけた。

ゆっくりと充三の舌が歯列を割って入ってくる。それは熱く柔らかく、結の体の中には以前に指を舐められた時の感覚がまざまざと蘇った。

「……………」
自らも舌を絡ませ、口中に溜まったものを飲み込むと、充三が肌着的襟元から手を入れ、結の乳房に触れてきた。

「……………」
いつになく強い力で掴まれ思わず小さくのけぞると、口の中のものが少し零れた。充三はそれを舐めとり、そのまま結を夜具にゆっくりと押し倒した。

結の肌着を脱がせ、充三は自らも着ていたものを脱いだ。

しっかりと抱き合い、肌を合わせるのも初めてのことだ。破瓜された時は充三は結の心中を慮おもったか肌着を剥ぐようなことはしなかったし、結はただ顔をそらし身を縮めて泣いていただけだった。

充三の滑らかに張りつめた筋肉も熱い肌も胸の鼓動も、今夜初めて知った

充三の舌が結の首筋をなぞると、全身が切なさこそそけ立った。

「ほら……………」

充三が耳元でささやく。その息にすら感じてしまう。充三は片手で結を抱き乳房を揉みしだきながら、もう一方の手で結の手を取り己れのを握らせた。結は声にならない声を上げた。

「……………充三……………」

我知らず怯えたような声が出た。充三のものに触れたのは初めてだった。荒々しく反り返り、熱く息づいている。常に優しくよく抑制されていた充三自身とは、まるで別の生き物のようだ……………

「……………なあ、ええか……………」

結が充分に潤っているのを確認し、充三が言葉を重ねた。

充三の胸に顔を押しつけるようにして、結は小さく頷いた。

「ぱち……………つ、と炭が爆ぜた。」

橙色の火花が散る。それは枕元を一瞬照らして消え、夜の闇が再びふたりの寝間を満たした。

「結……………結、つらいか……………」

荒い息を継ぎながら、充三が言った。

「旦那様はこんなやり方はなさらんかったやろつ……………すまん……………優しゅうしてやりたいが、堪こたえられん……………」

「ええの……充三……」

涙に濡れた頬を充三のそれに押しつけ、噛みしめるように結が答えた。

実際修一郎は結を責めても犯すことはしなかったから、充三の言った通り結の体は男を受け入れることには慣れておらず、突き上げられるたびに声が出た。

だが結には、思いもかけなかった充三の猛々しさも愛しかった。

充三はいつも結を気遣っていた。今夜だけは充三自身の心のままに、自分を貪って欲しい……もっと、もっと……奪い尽くして

「もっとして　　うちは、ええの　　」

涙に途切れがちな声でうわごとのように繰り返す結に煽られ、充三は一層激しく腕の中の華奢な体を揺さぶった。

修一郎は「結を貰う」と充三に言った。それが本気の言葉なら、今夜一夜、結を自分に返してくれたのだと思った。

「結……結　　」

腕の中の存在を確かめるように何度も名を呼ぶ。

全身の感覚が一点に集中し、頭の芯が痺れて来た。全身から汗が噴き出し、陽物が脈打ち始める。

もう、止まらない

「充三……！」

泣くような声で結が応えた。

盗み見た充三の表情は眉根かおを寄せ唇を噛みしめひどく心許なく切なげで、結の胸に不思議な感覚が溢れた。

いつも自分を守り、支えてくれた充三。そして今、自分を組み敷き荒々しく貫いているこの存在が、なぜか儂く、小さな子供のよう
に思えて……

充三が息を呑み、果てた。その刹那、結は絡みつけた四肢に力を込め、充三の体を強く抱きしめた。

明かり取りの小窓が仄かに月の光を捉えている。

充三は結を抱きその髪を撫でながら、ことこの後の気怠さに身を任せていた。結は充三の胸に身を預け、とくとくと規則正しい鼓動を感じながらまどろんでいる。夜の静寂しじまの中、ただ満たされて幸せだった。戦も日々の厄介事も修一郎の面影すら、今のふたりには遠かった。

ぱちつ、とまた炭が爆ぜた。

その音と一瞬の火花に、充三が我に返った。手を伸ばし結の肌着を取ると、くつたりと力を失った結を抱き、これを着せようとした。

「あ……っ」

抱き起こされた結がうるたえたような声を上げた。

「どないした？」

「あの……零れて……」

うつむいた頬が朱に染まっている。ああ、と充三は笑うと、借りた寝間着の他に自分の手拭いを取り、それで結の腿の内側を丁寧に拭いた。

「……ごめん……」

「かまへん」

そう言う充三の優しい笑顔、その細やかな手つきもいつも通りだ。充三は自分も寝間着を羽織ると再び結を抱き、横になった。

「……充三……ごめん……」

充三の腕の中で、結が咳くように言った。

「うん？ 何がや？」

優しくそう問われ、結は唇を噛みしめた。

「……うち……充三にお守りのひとつも貰ってやれんで……」

「まだ気にしとったのか」

充三がまた笑った。

「気持ちだけで充分や。どんだけお札を集めたかて、信心がなかったらただの紙切れやろ」

「そやかて……」

「大事に思うその気持ちが人を守るのや 鱈の頭でも」

と、充三は結の腿の付け根をまさぐった。

「ここの毛でもな」

「……………」

え……？」

再び結の頬が熱くなる。

「何……それ……」

「知らんのか、結」

充三は楽しそうに笑うと続けた。

「惚れた女の下しもの毛を持つとれば弾たまに当たらんと言つてな。昔から

男は女房や恋人や、馴染みの娼妓おんなのを大事に持って戦に行ったもんらしいぞ」

「……………」

結は真っ赤になってしまい、顔も上げられない。やっと

「……なんで……あそこの……なんか……」と言つと、思い出したように充三がくつ、と笑いを漏らした。

「何……？」

そう訊ねた結の髪を撫で、充三はいたずらっぽく答えた。

「女には玉タマがないやろ……」

「……………!!」

思わず充三の胸に顔を埋めると、結はその胸板を叩いた。

「充三のアホ……！ うち我真面目に聞いたのに……!!」

あはは、と充三が声を上げて笑った。

「ホンマやて。真面目な話や」

そう言つと結を抱きしめ、

「ほんまは爪でも髪の毛でも何でもええんや、多分な。そやけどあそこの毛なんざ互いに惚れた仲でなかつたら、別にいらんし貰えも

せんやる」と言った。

「さあもう寝よ……明日も早いからな」

夜半。

結は充三の寝顔を見ていた。

寝顔を見るのも初めてのことだ。軽く頬に触れてみたが、存外深く寝入っているのか目を覚ます気配はない。

「……………」
結はそつと手を伸ばし、畳んだ自分の着物から小さな巾着袋を抜き取った。

口を開き、中から小さな紙包みを取り出す。それを開いて中のもを手提げの中の茶封筒に入れると、また何かを包み直し袋に戻した。

そうしてまた充三の胸に顔を埋める。このまま朝までこうしていたい……

そう思いながら、結もまた眠りに落ちていった。

「ほんなら、うち、もう行くね……」

潜り戸の前で結が言った。

夜明け前である。辺りはまだ暗かった。

「もう少し明るうなってからの方がええんと違うか」
気遣った充三に、ううん、と頭かぶりを振る。

「小父さんや小母さんには会いとうない……恥ずかしゅうて……
それにうちの親や他の人にも会いとうないから……」

「そうか」

「ごめんな。小父さん小母さんには、うちが謝ってたって伝えて……
充三……」

そう言いながら、帯の間から小さな巾着を取り出す。

「これ……持って行って……」

「……………」

充三は掌の中のものを見た。

臙脂の縮緬の小さな布袋である。濃い藍色の空気の中でも、そこに薄桃色の桜の花びらがひとひら散っているのが分かった。

結は充三の手に自分のそれを重ねると、その袋を握らせるようにした。

「中は見たらあかんで……ご利益がのうなるからな……」

うつむいたまま言う。充三は微笑むと

「わかった……大事にする。ありがとうな」と応え、結の手を握り返した。

「手紙書いてな……うちも書くから」

「うん」

「気をつけて……絶対、帰ってきてな……」

「わかつとる」

「……………」

もっと話したいのに言葉が出ない。涙ぐんだ結を充三が抱きしめた。

「送ってやれんが、結も気をつけて、元気でな。旦那様のこと、頼んだぞ」

やがてふたりはふたつになり、結が踵を返した。

藍色の空気の中を、駅へと急ぐ。振り向けばそこに充三がいることはわかっていたが、結は一度も後ろを振り返らなかった。

駅では始発を待っている間に夜が明けてきた。

群青色の空が明るい青に変わり、やがて朱が染めていく。新しい日が昇る。

ふと、はらはらと散る白いものに気がついて結は顔を上げた。

桜かと一瞬思ったがそうではない。この辺りは山桜で、花が咲くにはもう少し間があった。

それは風花だった。桜の花より儂い、刹那に消える雪の花もつと降ればいい……と結は思った。

充三も今、きつと同じ空を見ているだろう。儂く美しく舞い散る
風花が、充三への手向けとなればいい
前照灯の光が線路の彼方に見えた。結は立ち上がった。

昼の少し前、結は離れに帰り着いた。

勝手口から台所に入ると、布巾をかけた皿とその傍らに薬湯の土瓶が目に入った。いずれも昨日、離れを出る前に結が用意したものだ。そつと布巾をめくる。そこには出かける前からはひとつふたつ減った牡丹餅があつた。

「……………」
結は再び布巾をかけ直すと、居間へと向かった。

「旦那様、ただ今戻りました」

縁側で本を読んでいた修一郎に、手をつき挨拶する。ここを離れたのはたった一日のことなのに、もう十年も留守にしていたような気がした。

「うん」

と、修一郎は頁に目を落としたままそう応えようと、本を閉じ結を見ずに言った。

「充三は喜んだか」

「はい。ほんまにありがとうございます……………」

頭うぶを垂れたままそう答える。修一郎は少し微笑んだ。

「……………旦那様、今朝から何も召し上がってないのと違いますか……………」

？　うち、急いで支度しますから　「

頭を上げ、結がそう言うと、修一郎は

「ええ。俺は少し寝る」と応えた。

「……………お加減がよいのですか」

気遣うようにそう訊ねた結に、立ち上がりながら修一郎が言った。

「なんでもない。今朝、やけに早う目が覚めただけや」

そして支えようと慌てて寄り添った結に言うともなく続けた。

「一晩くらい平気やと思うとったが……………誰かしらがいつも側にお

るのに慣れとると、ひとりというのは存外に寂しいもんやな」

「……………」

きゆう…………つ、と結の胸が痛くなった。

昨夜、自分と充三が満たされて抱き合っていた時、このひとはこの家にひとりきりだったのだ……

「…………すみません……………」

「謝ることなど、何もなかるう」

修一郎の言葉は素っ気なかったがその横顔は微かに緩み、それもまた結の心を締めつけた。

寝間には夜具が敷きっぱなしだった。結は手早く敷布の皺を伸ばし、掛け布団を整えた。

「やっぱり何か、少し召し上がりませんか…………？ ああ、牡丹餅で良かったら、すぐに蒸かし直しますから……………」

「そっやな……………」

ややあつて修一郎が答えた。

「おまえも何も食うてないやろ。牡丹餅はそのままでええから、茶を淹れてくれ。熱いのをな」

台所で少し考え、結は湯を沸かすのに鍋を使いその上に蒸籠せいろうを載せた。こうすれば湯が沸く間に、ほんの少しでも餅も温まり、柔らかくなるはずだ。

その間に結は水屋から小さな瓶を取り出した。中に入っているのはふきのとうの佃煮だ。これは春先に充三とふたり、近くの里山へ柴を刈りに行った折に採ってきたものだった。この頃は薪や石炭といったものの配給も減っていて、充三は焚き付けの足しにとこまめに山に出かけては柴を集めていた。

充三が集めたその柴は、今も外に積んである。大事に使おう…………と結は思った。

佃煮を薬味皿に取り分け、茶は焙ほっじたものをしっかり濃く淹れた。修一郎と自分、…………それから充三の湯呑みを用意し、それらを盆に

載せて、結は修一郎の待つ寝間へと戻った。

夕刻になっても修一郎は起き出してくる気配がなかった。

充三がいなくても、離れの空気がもの寂しくしんとしている。その空気に堪えかね、夕餉の下ごしらえを終えた結は、物音を立てないようにして修一郎の枕元を覗いた。

血の気のない顔。良くない夢でも見ているのだろうか、眉根を少し寄せた厳しい表情……

昨夜見た充三のそれとはまるで違う。結の心は痛んだ。

そつとその額に触れると修一郎が目を覚ました。

「……あ……すみません……」

「今何時や……」

らしくない心許ない声で修一郎が訊ねる。

「もう夕方です。夕餉にしますか？」

「……いや、ええ……」

まだはつきりもしない様子で修一郎は答えた。日の高いうちに眠ると悪夢を見るといいうが、修一郎は未だ夢魔に捉えられたままのようにも見えた。

「お茶をお持ちしましょうか？ 煎茶の濃いのを……」

「そうしてくれ……」

修一郎は半身を起こすと額を抑え、気怠げに前髪を掻き上げた。

その肩に綿入れを羽織らせる。

「すぐにお持ちします。ちょっと待っててくださいね」

結はそう言い置くと寝間を出て行った。ぱたぱたと軽い足音が遠ざかった。

静けさが再び室内を満たした。夕刻の橙色の光が障子を通して、鈍く弱く差し込んでいる。

寂しい……

先刻、はからずも口をついて出たその言葉を、結はどう聞いただ

ろつ……と修一郎はふと思った。

気にも留めず聞き流したか、それともこの男も、存外に弱いものだなと思っただか……

「……………」

その言葉を口にしたことに、本当は修一郎自身が驚いていた。

俺は本当は寂しかったのか、と思った。そして結が戻ったことが、それほどに嬉しかったのかとも。自分でも見ようともしていなかった心の底を、結に漏らしてしまうほどに

「失礼します」

結の声がし、障子が開いた。

熱い茶を啜っていると、結が言った。

「旦那様、あの、うち…… 今日から充三の寝間を使わせて貰うてはいけませんか」

「好きにしたらええ」

修一郎が短く答えた。

夕餉に結は、やはり充三の茶碗を出してきた。

ほんのひと口だけだが、菜も汁もちゃんとよそつ。

修一郎は眉根を寄せ、不機嫌そうに

「結、そういうことはやめろ。何の意味もないぞ」と言ったが、結は応えず口元を固く結んだまま、手を動かし続けていた。修一郎はそれ以上は何も言わなかった。

つましい食事が終わりに近づいた頃、結が口を開いた。

「旦那様、充三の膳のもの、食べてやってください。そうすれば充三も、うちらと一緒に居れるから」

修一郎はひどく険しい表情になった。不快を隠そうともせず結を睨めつけたが、今日の結はめそめそと泣き出すこともせず、目を伏せ修一郎の突き刺さるような視線に耐えている。

「……………」

修一郎は小さく息を吐くと手を伸ばし充三の茶碗を取り、中のも

のを口に入れた。

「ありがとうございます……」

結が頭を下げた。顔を上げると涙がこぼれそうで、なかなか修一郎を見られなかった。

21 / 帰宅2

その日の家事を終え、結は充三の寝間へと入った。

修一郎が眠っていた明るいうちは物音を立てて起こしてもいけな
いと思い、入ることが出来なかったのだ。電球の薄暗い光に照らし
出された小さな寝間は、考えていた通りきちんと片づけられていた。
以前にしていたように何気なく文机の抽斗を開けた結は、小さく
息を呑んだ。

それが目に入った瞬間、心臓がぎゅうつ、と縮んだ。空だと思っ
ていた抽斗の中には大きめの封筒があった。

封筒の表書きは「山岡修一郎様 田川結様」となっていた。封は
されていない。おそろおそろ封筒の口を開くと、中には小さな紙包
みがひとつととそれぞれに宛てた封書 こちらはきちんと封緘ふうかんさ
れたものが入っていた。

「遺書」だ……

それは直感だった。心臓が激しく動悸を打っていた。包みの方は
封はされていないようだったが、開いて中を確認する気には到底な
れなかった。

開かなくてもわかる。あれはきつと髪だ。充三は深爪だったから
必ず帰ると言ったくせに、何度も誓ったくせに。なんでこんなも
のを抽斗の中にくっそりと置いていくのか……

怒りと悲しみが結の胸を波立たせ、息を詰まらせた。

震える手を抑えつけると、結はどうにか抽斗を閉めた。

「……………旦那様……………」

結の常にない声と呼んだ時、修一郎は机上のスタンドの明かりを
頼りに本を読んでいた。昼間に寝たせいかわ、どうやら寝付けない様
子である。

「なんや」

顔を上げ、声のした方を見る。薄暗い中でも結のひどい表情がわかった。

「どないした……」

充三の寝間から這うように出てきた結が言った。

「うち……やっぱり……」

一旦言葉が途切れる。修一郎が待っていると、思いつめたような声が続けた。

「厚かましゅうて申し訳ありません。うち…… 旦那様のお側で、寝かせて貰うてはあきませんか……？」

別に修一郎と同衾したかった訳ではない。結が充三の寝間を使おうと思ったのは、夜、修一郎に何かあつては困ると思ったからだ。充三がそうしていたように、常に側にいようと思ったのだ。

だがもうこの寝間には入りたくない

「かまへんぞ」

そう言つと修一郎は本を閉じた。

「こつちへ来い」

「ありがとございます……すみません。布団、持ってます……」

「そんなもんはええから、来い」

修一郎は呆れたように少し笑った。

「……………」

おずおずとやつて来た結に笑つて言う。

「なんやその格好。まだ着替えとらなんだのか」

「……す、すみません……すぐに着替えてきますから」

言葉もそこそこに出ていこうとした結の腕を修一郎が掴んだ。

「ええ。俺が脱がせたる」

抱きしめてほんの少しいたずらっぽくそう言つと、言葉通り結の帯に手をかけてきた。

「ま、待つてください……あの、うち、まだやることが……」

「やること？ なんや」

「あ……あの……、あ……行火あんかを……」

上ずった声で答える。行火はただの思いつき、言い訳だった。確かに冷えそうな夜にはまだ用意することもあったが、それは寢床をあらかじめ温めておくためのもので、寝る直前に用いるものではないのだ。

知ってか知らずか修一郎は

「おまえという行火があるのに、そんなもんいるか」

と、結の言葉を一蹴した。

帯を解き襟元をくつろげて、修一郎が手を差し入れる。冷たい手で乳房に触れられ、結は体を震わせ小さな悲鳴を呑み込んだ。昨夜の感覚が蘇る。

「……あ……っ」

思わず漏れた声を修一郎は聞き逃さなかった。

「なんや結…… 欲しいのか……？」

「ち、違います…… あの…… だ、旦那様のお手が……」

冷とつて……とは言えなかった。だが修一郎は気づいていたらしい。少し笑うと

「おまえの体は熱いな、結」
と言った。

自分はどうかしている……

と、結は思った。

昨夜充三に抱かれたばかりなのに、今夜は修一郎に身を預けている。

だが結には、かたや充三を受け入れこなた修一郎を拒むということとは、どうしても出来ないのだった。

自分は修一郎のものだ、という気持ちもあった。なぜかあの夜、そう思い定めたのだ。離れた来られた最初のうち、結には自分が人身御供のように差し出されたのだという思いがあり、充三をひどく恨んだものだった。だが充三と修一郎、ふたりの心を知るにつけ、

そうした恨みも消えた。

今はただ、修一郎の慰めになりたかった。

ことに今夜は、修一郎が望む通りにしたかった。それが昨日自分を充三の許へ送り出してくれた修一郎への、せめてもの礼になる。

充三だって許してくれる

そう思った。

「旦那様」

かすれた声でそう呼ぶと、修一郎が顔を上げた。

「どないした、結……」

そう言いながら親指と中指の腹で、固く尖った乳首を強めに押しつぶすようにした。

全身を電流のような痺れが奔った。思わず吸い込んだ息が小さな悲鳴になる。修一郎の愛撫は元々きつめで、最初のうちは痛みと恐怖ばかりがあった。

だがそんな修一郎のやり方にも慣れた

修一郎の心を知ってしまったえば、そのやり方も自分という存在を確かめようとしているのだと思えた。

「……………」

唐突に全てのことが腑に落ちた。

きつく責めても泣いても恨んでも、決して自分を裏切らない……

そんな存在を修一郎は必要としているのだ。例えば、充三のような充三は自分のようには責められたり辱められたりすることはなかったかも知れない。だが充三も、きつとこのひとに傷つけられてきたのだ。自分を責める時の充三の気持ちはどんなだったろう、どんな思いで、修一郎に抱かれる自分を見ていたのだろう……

それもこれも、修一郎には全てわかっていたに違いない。このひとはいつも確かめていたのだ。どれだけ傷つけても何をしても、充三がこのひとを見捨てないということ……

充三の話を聞けば、誰よりも修一郎が充三を思っていることは疑いようもない。それでもそのやりようだ。

同様に、今は自分のことも大切に思ってくれているのもわかる。責めつばなしで事後は充三に丸投げだったのが、今ではこんな風に愛おしんでくれるのがその証しだ。それでも……

結は修一郎の愛撫に身を揉みながら、快感にかすんだ頭の片隅で思った。

昨日、自分を送り出してくれた時も、きっとこのひとは賭けていたのだ

なぜこのひとは、そんなやり方でしか そんなことをしなかつて

「うちは……旦那様のものや……」

心の内が知らずに声に出たらしい。

修一郎がまた結を見た。

結はその視線には気づかない素振りで、顔を伏せたままそつと修一郎のものに触れた。ほんの一瞬、修一郎の表情が歪む。

「旦那様……今夜は、うちに」

小さくそう言った時の、修一郎の戸惑うような表情にも気づかない振りをした。自分の手をあてがい、ゆっくりと我が身に埋めていく

「結」

常でない声だった。動揺の隠せない、どこかしら弱さを含んだ声。だが修一郎は結の手を払ったり、腰を引いたりはしなかった。

はあ……つ、と、結がゆっくりと息を吐いた。

昨夜充三のものを受け入れたそこには痛みがまだ残っていた。それでも気持ちも高まって体も十分に濡れていたし、修一郎のものはすんなりと優しいかたちをしていたから、最後にはすっかり収まった。

ぐつつ、と締めつける。結の内ですれがびくりと跳ねた。

自身も切なさで満たされながら、結は修一郎に被さるようになり、ゆっくりと腰を使った。

どこか泣き出しそうな、心許ない表情……男は誰でも、こういう

時にはこんな表情をするものか……

「結……」

耐えきれなくなったように名を呼ぶと、修一郎は体を入れ替えてきた。

結を押さえつけ、打ちつける。だがそのやり方も、充三に比べればずいぶんと優しく遠慮がちで、ためらっているようにすら思えた。

いつも優しく気遣ってくれた充三が荒々しく自分を組み敷き、逆に常にはきつい仕打ちをする修一郎がおずおずとためらいがちなのが、結にはひどく不思議に思えるのだった。

ほどなく修一郎は果てた。充三にしたように修一郎の汗に濡れた体を抱きしめると、なぜか涙がこぼれた。

うちはやっぱり、因業や

そう思った。

22 / 新しい命

充三が出征し、ひと月余りが過ぎた。

その日結は町へ出たついでに、久しぶりに八重の長屋を訪ねた。八重と顔を合わせるのも、充三を共に見送って以来のことである。

八重は大層喜んで上がって行けと勧めたが、結は

「いえ、ちよつとお顔を見に寄らせて貰うただけですので」と手を振った。

「まあそう言わんと、一休みして行きつて」

あまり熱心に八重が勧めるので、結もとうとう座敷に上がった。

八重は

「代用品で悪いけど、味はそう悪くないで」と言いながら茶を淹れしてくれた。

「すみません、お仕事の邪魔をして……」

そう言つと八重は笑い、肩をすくめるようにして

「仕事なんかありますかいな。年が明けてからほんまにもうあかわ」と言つた。

「あつてもせいぜいが仕立て直しですわ。今時は贅沢は敵やかいうて、もんぺに二部式やもんなあ……」

「……………」

「結さん、あの臙脂えんじの着物……」

と、八重は続けた。

「絶対袖を切つたりしたらあきませんで。あれはほんまにええ着物もんなんや。着物はちゃんと手入れして置いといたら、孫の代まで着られるんやからな」

「はい……………」

神妙に結が答えた。もとより袖を切るなど考えられない。あの着物は結にとつても、この上ない宝物だった。

時代はますます暗雲の中へと突き進んでいた。先年から衣類も切符制になっていたから、着物を新たに仕立てる人がなくなるのも道理だ。それを思うと、鷹揚な笑顔の裏で、修一郎がどれだけ無理を押しつけて着物を誂えてくれたのかもわかる。

大事にしなければ……

と、結は改めて思った。

「……それにしても」

ややあつて、八重が言葉を継いだ。

「結さんあんた、しばらく見んうちに痩せたのと違いますか？」

何

か顔色も良くないで……疲れてるとちやいますか……？」

「……あ、いえ」

結は顔を上げて一旦は否定したが、また俯いてしまった。

「充三さんがおらんようになって、ひとりで苦労しとるんやろ。大変やなあ」

「いえ……」

顔を伏せたまま、小さく結が答えた。

こうして久しぶりに八重の気さくな人柄に触れ、優しく労わづらわれると、抑えていたものが溢れてくる。

「うち……ほんまに自分があかんたれなのが、ようわかりました」

ととう弱音が口をついて出てきた。

「ただだけ充三に頼り切ってたか……この頃、なんかご飯もよう喉を通らんです。頑丈だけが取り柄みたいなもんやのに、すぐに胸も悪うなつて……」

うちがすっかりせなあかんの、というのを、しかし八重は違うことを考えながら聞いていたらしい。

「結さん……しょうもないこと聞くけど、月のものはちゃんとあるの……？」

「え……？」

思いもかけない質問に、結はきよとんとした表情になった。

だがそれはほんの一瞬のことで、すぐに八重の言葉の意味を理解し

「……あの、そやけど……体の具合で遅れることもあるし……」
と答えてはみたが、思い当たる節に内心は気もそぞろであった。

八重は結の様子に

「もしかして、やや子が出来たのと違いますか……？　もしそうやったら今が一番大事な時や、一回ちゃんと言つて貰う方がええ。ええお産婆さんも知つとるし、そうしましょ？　な？　ひとり不安やったらうちがついて行つてあげます」

と、優しい声で囁んで含めるように言った。

日が少し傾きかけた頃に離れに戻ると、城崎が結を待つていた。

「えろう遅かつたな、何をしとつたのや」

と修一郎が言うのに

「すみません、先生がおいででなるとは知りもしませんで」

と慌てて頭を下げると、城崎は

「かまへん、今日は近所に往診があつたから、帰りに修一郎君の顔を見に寄つただけや」と笑つた。

「結、おまえこの頃具合悪そうにしとるそうやないか。確かに顔色もよくないし……ちよつと診たろう」と続けると、修一郎も横から「そろそろ帰らなあかんとこののを俺がお引き留めしとつたのや。」

おまえこの頃、俺に隠れて吐いたりつらそうにしとるやろ。一度診てもらえ」と言った。

「……いえ……うち……あの、大丈夫です。病気とかとは、違いますから……」

顔も上げられずしどろもどろでそう答えたが、城崎が

「病気かそうでないかは、医者が判断することや」と軽くないした。

「どないしたんや、結。今さら……　これまでに、先生には何度もお世話になつたやろ」

修一郎も畳みかけた。その様子には結の身を心から案じているのがよく表れており、結はますますうろたえて

「心配おかけして申し訳ありません、そやけどほんまにあの、大丈夫

夫ですから」と繰り返したが、ふたりの男の有無を言わせぬ様子に耐えきれなくなったのか、とうとう頭を畳にこすりつけるようにして言った。

「うち、あの……、すみません……やや子が出来たかも、知れんです……」

座敷の空気が重く凝った。

修一郎も城崎も、無言で結を見つめている。結は顔も上げられず、身を固くしていた。

「それは」
と、最初に口を開いたのは城崎だった。

「確かなことなんか？ おまえの勝手な思い込みとは違うのか……」
医者らしい問いだった。結は頭を下げたまま

「あの、今日お産婆さんに相談に行つて……八重さんが、やや子と違うかと言われて、それで……」

と、涙声でつかえながらなんとか答えた。

「……それで間違いないと言われたのか」

「はい、あの……まず間違いないやろつて……」

そこまで言つと、結は思いつめたように一層頭を下げ、手をついて続けた。

「お願いします、産ませて下さい……！ 決してご迷惑はかけません、必ずご恩はお返しします。お願いします……！」

「誰の子や」

城崎が修一郎を見、結も思わず顔を上げた。

「……あの」

「充三か？」

修一郎の言葉に、城崎の眉が驚いたように上がった。

「……違います……」

よつやく、小さな声で答えた結に、修一郎が重ねて言った。

「結、正直に言っつんや。俺は責めとるのと違うぞ。充三の子でもか

まわん、その方がええくらいや」

修一郎は一旦言葉を切ったが、結が押し黙って答えないのでまた続けた。

「もし充三の子でも、おまえが望むなら俺の子として育てたってもええ、籍にもちゃんと入れてやる。……俺の言うことがわかるか？

俺はただ、ほんまのことを知りたいのや」

その言葉通り、その声には質すような厳しさはなく、むしろ子供に言い聞かせるような懇切さであった。

「……………」

それでも結が答えられずにいると、

「結」と城崎が促すように声をかけた。

「……旦那様……………」

「充三の子か。そうなんやな」

「違う違う……………」

修一郎を遮るように結が声を上げた。

「この子は旦那様の子です……………！ 間違いありません、絶対、旦那様の子や……………！」

固い表情で、再びふたりの男が結を見つめた。

「結」

と城崎が何ごとか言いかけたのを制するよつに、修一郎がきっぱりと言った。

「わかった、もうええ」

気遣わしげな城崎の視線に気づかぬ振りで続ける。

「母親のおまえがそうまで言うのや。俺の子供で間違いなかるう」

「旦那様……………」

「泣かんでええ、子供のことは何も心配いらん。俺がちゃんとしてやる」

だが言葉とは裏腹に、修一郎の表情はひどく厳しいものだった。

結は何も言えず、しゃくりあげながら再び深く頭を下げた。

23 / 新しい命2

「充三とは、ほんまに何もなかったのか……？」

門を出て少し歩いたところで城崎が訊ねた。空は柑子色かんじいろに染まり始めている。結はそれには答えず、俯いたまま独り言のように小さく言った。

「……旦那様は、ご自分の子が欲しゅうないのでしょうか……？
充三の子の方がええやなんて……」

「……惚れた女に自分の子が出来て、喜ばん男はおらんわ」

ぼそりと城崎が言った。その言葉に結が顔を上げ、もの言いたげに城崎を見た。

「そやけど、修一郎君には素直に喜べん理由わけがある……」

「それはうちが……百姓出の女中やからですか……？」

歩きながら城崎が結を振り返った。その目には憐憫があった。

「……修一郎君はな。自分の病が子供にも遺伝するのやないかと、それを恐れとるのや」

「……」

結が立ち止まり、城崎も歩みを止めた。

「結、修一郎君の病を知つとるか……？」

「……いえ……うちは……」

改めて訊ねられ、結は消え入りそうな声で答えた。

「充三にはただ、……お体の弱いお方やからいつもよう注意して無理をさせんように、何かあったらすぐに先生をお呼びするようにと、それから力のいることも……怪我も絶対させるなと言われて……」

「修一郎君が血を吐いたのは見たやろうが……怪我をしたり、体を腫らしたりしとるのも見たことがあるか？」

「……いえ」

結は正直に言った。自分が知る限り、怪我をしたことはない筈だ。体のどこそこを腫らした、というのも、後で聞いたことはあっても

実際に見たことはなかった。修一郎の具合が悪そうな時はいつも充三がつきつきりで、世話も全てひとりでしていた。

自分には見せないようにしていたのだ……、と、ようやく結は思い当たった。おまえはすぐにうるたえて泣くからな、という充三の言葉が胸に蘇った。

「修一郎君も充三も、おまえには知らせとくなかつたんやろ……」

城崎もそう言った。

「だが、こうなった以上、おまえも知つとかなならん」

城崎は結を見据えるようにして続けた。

「修一郎君の病はな、血の病や。どこからでも出血するし、一旦そうなつたらなかなか止まらん……去年血を吐いたのもそのせいやし、あの若さで不自由そうにしとるのもそのせいや。何度も内出血があると、関節が壊れてしまふのや」

「

「命にかかわる病や。そやけど医者にもどうすることもでけん……古うからある病やが、今もまだ原因もわからんし治療法もわからんのや」

結が息を呑んだ。ようやく城崎の言っていることが呑み込めてきた……

「……そやけど……」

と、震える声でようやく言った。

「先生がいつも、なんとかしてくれたのと違うのですか……？ 旦那様も充三も、先生をそれは頼りにしとるのです……」

城崎の表情も苦しそうに歪んだ。

「この病に輸血が効くのは、経験的にわかつとるのや。それでとりあえず血は止まる…… 血漿も効くが、こっちは僕らの手には入らん。全部戦地に行ってしまうからな……」

「

「結局病を治すことはでけんや。出血を止められるだけや。それもこれからは、どうなるか」

「……先生……」

「おまえも覚悟はしておけ、結」
城崎はついにその言葉を口にした。

夕餉の時、修一郎は充三の膳を押しやって結に言った。

「おまえが食え」

「え…… そんなこと……」

「腹の子の血肉になるなら、その方が充三も喜ぶやろ」

修一郎にそう言われ、結はおずおずと椀を取った。元々修一郎は、そんな言い方をする人間ではなかった。自分を氣遣つてのことだということ、結にもよくわかった。

夜になった。寝間着に着替えた結を手招くと、修一郎は夜具の上
に座ったまま、その体を後ろから抱きしめた。

結が小さく細く、息を吐く。

修一郎は寝間着の上から結の下腹に手をあてがうと、

「不思議やな…… ここに、子供が……」と独りごちるように言っ
た。

だがその表情は相変わらず暗かった。このひとは、やはり己れの
病が子に遺伝するのを恐れているのだろうか、と結は思った。

「大丈夫です…… きつと、丈夫な子を産みますから」

結がそう言うと、修一郎はほんの少し結を見、それからふ……つ、
と笑いを漏らした。その表情はひどく寂しげで、結には修一郎が泣
き出すのではないかとさえ思えたほどだった。

「旦那様……」

「結…… 俺の母親はな」

結の名を呼びながらも、誰に語りかける風もなく、修一郎が話し
始めた。

「俺を産んだことを、ずっと後悔しとったのや……」

最初は俺のことを、不憫にも申し訳のうも思つてたかも知れん……
……そやけど身内や親戚から、総領息子をこんな片輪に産んだことを

責められ続けてな。俺のことを疎むようになった」

「……………」

「俺ももう大人や。今は母親の気持ちもようわかる……
そやけどな、結。いくら気持ちが悪かったとて、心に受けた傷は
消えんし、母親を許すことも出来んのや」

結が言葉を見つけれずにいると、修一郎は結の腹を撫でながら
続けた。

「結、おまえは丈夫な子を産むと言ったが、もし俺のような子供が
生まれたらどないするのや。」

俺の母親も、父親も、子供が出来て喜んだやろう……今のおまえ
みたいにな。生まれるのを心待ちにした筈や。まっとうな子供
が生まれることを疑いもせんで そやのに生まれたのはこの俺や

「

そこまで言うと、修一郎はまた口元を歪めた。

「旦那様……もう」

「俺は生まれてくる子供にこんな思いをさせとくないし、……おま
えにも、俺の母親のような気持ちを味わわせとくない」

「うちは、旦那様の親御様とは違います……！」

とつとつ結は、ふり絞るように言った。

自分の腹に置かれた修一郎の手をしっかりと握ると体をねじり、
涙のにじんだ目で修一郎の瞳をひたと見据える。

「この子には、絶対旦那様のような思いはさせへん……！ 大事に
可愛がつて育てます。もし重い病でも……、うちは絶対、この子を
見捨てたりせえへんから」

「……………そうか」

修一郎は微笑んだ。

「それならええのや。おまえが後悔せんならな」
それからまた結を抱きしめて、

「おまえも母親になるのなら、もっと強うなれ。すぐにめそめそ泣
くな」と言った。

「……………」

はい……………」

と、結が修一郎の胸に顔を埋めるようにして小さく答えた。

だがその言葉とは裏腹に、涙が溢れてきたことには修一郎も気づいたはずだ。

それでもももつ何も言わず、修一郎はただ結の頭を抱き、その髪を撫でていた。

23 / 新しい命2 (後書き)

いつも拙作をお読みくださり、ありがとうございます。

今回、修一郎の病気について、少し書いておこうと思います。

モデルとなった病気は実在のものですが、この病気は現在では原因もわかっていませんし

適切な治療法もあり、患者の方のQOLも向上しています。

今でもシリアスな病気であることは確かですが、必ずしもこの項で書いたような、

「命にかかわる／覚悟の必要な」病気ではありません。

いうまでもないことですが、修一郎の病気についての表現は、差別的なものも含めて

創作上のことであり、舞台となった1940年代半ばの一般的な認識・状況であって、

現在のものとは違う　ということを念頭に置いて、お読みいただければと思います。

24 / 祝言（前書き）

文中、旧字を使用しています。もし文字化け等ありましたら、お知らせ頂けると助かります。

24 / 祝言

充三さん、お元氣ですか。

こちらは皆元氣でやつてをります。旦那様もお元氣です。

今日は充三さんにお傳へしたいことがあり、この葉書を
書いてみます

「……………」

結は万年筆を置き、顔を両手で覆うため息をついた。もう何度も手にとってはまた置く、その動作を繰り返している。

充三に、子供のことをすぐにも知らせたい。だが、どう書けばいいのかわからないのだ。

障子を明け放した居間で、結は葉書を書いていた。否、書こうとしていた。梅雨の前の、爽やかな初夏の昼下がりである。しかし結の心はどうにも曇りがちだった。

昨日は色々なことがありすぎた……

身籠もっていると感じたこともそうだが、城崎から聞かされた修一郎の病の真実と、修一郎自身の言葉が結の心を乱れさせていた。

正直なところ、修一郎の病がそこまで 命にかかわるほど重いものだとは思ってもいかなかったのだ。結は唇を噛みしめた。充三は何度も何度も、あれほど旦那様を頼むと念を押していたのに、自分は何を聞いていたのか

またその病に、修一郎が深く傷つけられていると知ったことも、思わぬ衝撃だった。

修一郎は結にとっては、強く超然とした存在だった。だが修一郎として人の子だ。自分が考えなしに口にした「丈夫な子」という言葉がどれだけ修一郎を傷つけたか、それを思うといたたまれなかった。

今日、修一郎は車屋を呼ばせ、付き添おうとした結を退けてひと

りで出かけていた。

修一郎が自分から、それもひとりで出かけるなど、結にとっては初めてのことだった。どこへ行くとも言わなかったが、結には質することなど出来なかった。

出かける前、充三に子供のことを知らせても良いかと尋ねた時、修一郎は少し笑って

「そうしてやれ。あれならきつと喜ぶやろ」と言った。

だが結の心中は実は複雑だった。

充三は、本当に喜ぶだろうか……

いや、きつと喜ぶには違いない。充三はそういう男だ。それはわかつている。

だが結は、充三の心の底を思わずにはいられないのだ。子供のことを知らせたら、充三はほんのひとかけら、もしかしたら自分の子では……とは思わないだろうか

結は昨日の修一郎の言葉も胸で繰り返してみた。

充三の子でもかまわない、むしろその方がいい

あれは多分、半分は本心なのだろう。他ならぬ充三の子であれば、修一郎にとってもそれなりに愛しい存在になるのかも知れない。だが、それで修一郎の心は満たされるのだろうか……

最初に奉公に上がった日、修一郎が充三に自分を犯させたことを結は長い間恨んでいた。なぜ修一郎自身がそうしなかったのか、それも修一郎の嗜虐心から出た仕打ちかと、ずっとそう思っていた。

だが昨日の告白を聞いてみれば、本当の理由は別にあるように思っただのだ。修一郎はそれから決して結を犯そうとはせず、専ら口で奉仕させていた。そういうやり方が好きなのだと疑いもしていなかったが、本当は違っただのだ……、と結は思い当たった。

修一郎は、きつと妊娠を恐れていたのだ

「……………」

結は机に肘をつき両手を額に当て、息を吐いた。

自分は間違っただかも知れない、と思った。

修一郎の子だ、と答えたのは、問いつめられて咄嗟に出た言葉だった。もとより確信も確証もない。山岡家の嫁という地位が欲しかった訳でもない。そんなことは考えてもいなかった。

ただ、腹の子が修一郎の子だと自分が信じたかっただけだ。そして修一郎にも、そう信じて欲しかった。

なぜだろう……、と結は自問した。

どこかで、なぜか修一郎が喜んでくれるような気がしたのだ。同時に充三は、……きつと許してくれる　そう思った。

何もかも、混乱した頭の中で瞬時に判断したことだった。ほとんど無意識に答えを選び取っていたのだ。きちんとした考えも何もなく……だから結は、今さらぐずぐずと悩んでいるのだった。

結が離れの居間で葉書に向かい、たった一言を書き倦^{あぐ}ねていた頃、修一郎は本家の居間で家族と向かいあっていた。母屋を訪れるのは四年振り、充三のために金を借りに来て以来のことである。

女中が紅茶を置き部屋を出て行ったのを汐^{しほ}に、父親の喜重郎が口を開いた。

「久しぶりやな、修一郎。元気そうで何よりや。たまには顔を見せたらどないや」

言葉は親密だが声はそうではない。どこかしらに他人行儀なわだかまりが漂っていた。

修一郎は小さく頭を下げた。

「お心遣い、ありがとうございます」

その場の他の者　母親の嘉寿子、そして弟の敬次郎は、いずれも固い表情のまま口をつぐんでいる。

「それで今日は何の用や。また金でも足りんようになったか」

「いえ」

修一郎は喜重郎の言葉の刺を無視した。

「おかげさまでこの頃はなんとかやっております」

「……………」

「今日、こちらに伺ったのは」と言葉を継ぐ。

「添いたい女が出来ましたので……結婚の許可をいただきたく」ざわつ、と部屋の空気が粟立った。ほんの少しの沈黙の後、喜重郎が言った。

「それは誰や」

「離れで下働きをしている娘です」

「充三が連れて来た娘か……」

やはり知っていたか、と、修一郎は目を伏せたまま思った。

修一郎が母屋を無視すると同様、母屋も修一郎にはこれまで一切関わって来なかったが、動向は絶えず探らせていたのだろう。別居はしていても修一郎も山岡家の一員、ましてや長男である。それは当然の行動ではあった。

「どこの馬の骨とも知れん水呑み百姓の娘など、この山岡の家に入る訳にはいかんな」

と、喜重郎が素っ気なく言った。

「わしが応と言ったところで、他の親戚連中が黙っちゃおらんわ。嫁が欲しいなら相応しい娘をわしが選んだる。器量も気だても、家柄もちゃんと釣り合うええのをな」

「俺の嫁になりたがるような娘が、ええ氏しにおるとも思えませんが」
修一郎は微かに口の端を歪めて応えた。

「大事な娘を長男とはいえ跡取りでもなんでもない、世間で噂になるような変わり者の片輪な男の嫁になど、まともな家なら頼まれてもお断りでしょう。なんとしても山岡の末席に加わりたい、という下心でもあれば別でしょうが……」

修一郎の皮肉な口ぶりに、喜重郎はあからさまに顔を顰めた。

「それに俺にも、他の娘ではあかん理由がある

下働きの娘、結と申しますが、その腹には俺の子がおるのです
嘉寿子、そして敬次郎も驚いたように顔を上げた。ふたりのいずれかの体がテーブルのどこかにでも触れたのか、かちゃん、とカツプが耳障りな音を立てた。

「……まさかおまえが、女中風情に手をつけるとは思わなんだぞ……
女に不自由はしとらんかったやろうが」

苦虫を噛み潰したような表情で喜重郎が言った言葉が終わるか終わらぬかのうちに、嘉寿子の尖った声が質した。

「やや子がおるといふのは、ほんまのことなんか？」

「はい」

「おまえは……！ 騙されとるのと違いますのか。おりもせんやや子が出来たというて男を騙すなど、世間ではようある話や」

唇を震わせ、嘉寿子が言い募った。

「もしやや子がほんまでも……充三の子と違うのか。そうや、充三が連れこんだ娘なんやる？ 貧乏人がふたりして、おまえを騙しとるのに違いない。おまえはアホや……影で使用人に唾つばわれとるのにも気づかんで」

「お母さんはご自分の息子が、そんな間抜けとお思いですか」

感情を面おもてに出さず、修一郎が応えた。

「俺にかて人を見る目はある。充三も結も、そんな人間やありません」

「兄さんは昔から、充三が大のお気に入りにやっただけだからな」

と、横から敬次郎が口を挟んだ。

「もしその女中の腹の子が充三の種でも、それはそれでええとでも思うとるのかも知れんが……、あの離れや土地やはどないなるんや。あれらは元々山岡の財産ものや。それをそんな、わけのわからん子供にくれてやるんですか」

修一郎が射るように敬次郎を見た。

「家督の代わりに俺が貰うたものをどう遣おうが、俺の自由と違うのか」

先刻までとは打って変わった、冷たく、鋭い声である。そこには有無を言わせぬ厳しさがあった。

「惚れた女とその子供、親身に尽くしてくれた男に幾いくばくかを残してやって何が悪い。それとも敬次郎、おまえは俺が死んだら、みんな自分のものやと胸算用しとったか」

「控える修一郎！ 敬次郎は山岡の総領や、無礼な物言いは許さんぞ！」

顔を背けた敬次郎の代わりに、喜重郎が声を荒げた。

「失礼しました」

凍るような目で敬次郎を見据えたまま、修一郎は慇懃にそう言った。

南向きの窓は開け放たれ、柔らかな風と明るい光が客間へと入ってくる。だが室内の空気は重く冷たく凝こもっていた。

「ともかくこの話、許す訳にはいかん。相当にその娘が気に入ったようだが、何も結婚するまでもなかるうが。月になんぼかの金でも与えておけば満足しよるわ」

「そういう訳には参りません。俺は結に約束しました。必ずちゃんとしてやる、子供は俺の籍に入れてやる」と

「馬鹿者が！」

とうとう喜重郎が怒号を上げた。張りつめた空気の中、怒りで赤黒く染まった喜重郎の顔を、修一郎の目がまっすぐに見据えている。「重い病で不憫やと甘やかして育てたのが間違いやった　いつもいつも、わしをがっかりさせおつて……！」

ふ……、と、修一郎の表情が緩んだ。

「おふたりには、不出来な息子で申し訳ないと心からそう思つてます。俺はこの家の厄介者で間違いない　そやけど」

目を伏せ、修一郎は静かに続けた。

「大人にはなれんと言われ続けて育つた俺が、女に惚れて子までなしたのや……それを喜んでくれるのですか」

さすがに嘉寿子は胸を衝かれたような表情になった。とりなすように喜重郎を見たが、喜重郎は厳しい表情のまま、押し殺した低い声で言った。

「おまえは勘当や。今おまえが持つてるものは錢別代わりに皆くれてやる　二度とこの家の敷居を跨ぐな」

修一郎は微笑んだ。それはこの場で初めて見せた、不思議に晴れやかな笑顔だった。

嘉寿子は喜重郎の横顔を見つめたまま絶句すると今度は修一郎を見、

「修一郎　何をしとるの、早う謝つて　」とつろたえた声で促したが、頭を下げた修一郎が口にしたのは違つ言葉だった。

「ご厚情、感謝いたします……お父さん。今までありがとうござい
ました」

そう言つと修一郎は立ち上がった。

それから嘉寿子に微笑みかけ、

「お母さん、どうぞ末永くお元気で」と言い、ことの成りゆきに茫然としている敬次郎にも

「敬次郎、おふたりを頼む」と声をかけた。

「修一郎」

「放っておけ！ もう息子でも何でもない……！」

母の涙声と父の怒号、そして使用人の物見高い視線を背に、修一郎は生まれ育った屋敷に永の別れを告げたのである。

修一郎が帰宅したのは午後を少し回った頃である。

ひどく疲れた様子だったがその表情は妙に晴れやかで、出がけのどことなく固く緊張した横顔を見ていた結には訝しく思えたほどだった。

「お帰りなさい、旦那様。お疲れでしょう……」

そう言つと、修一郎は結を見て小さく笑つた。その笑顔に結は少し安心し、続けて尋ねた。

「どちらへお出かけやつたんですか……?」

「母屋や」

「……………」

異な事を聞いた気がした。

結の怪訝な表情を気にとめる風もなく、修一郎が言葉を継いだ。

「充三に手紙はもう書いたのか?」

「あ、はい……、いえ……」

なんと書いたものやら考えあぐねて……とも言えず、語尾が曖昧に消えた。だが修一郎はやはり笑顔のまま、

「結、籍を入れてやるぞ。充三にも知らせてやれ。世間体もあるしこのご時世や、何もしてやれんが一緒に写真くらいは撮ろう。先生や八重さんも呼んで、祝うて貰おう」と言つた。

結は呆けたような表情になつた。

「なんや? 結、俺はもうちょっとはおまえが嬉しそうにするかと思つとつたぞ」

からかうようにそう言われても、言葉が出てこない。

「……………いえ……………あの……………」

ようやく口を開く。

「そやけど……………あの、旦那様は……………」

「母屋のことは気にせんでええ」

修一郎はあっさりと言った。

「俺は勘当や。もう母屋も離れものうなった」

「え……」

修一郎はさばさばとしていたが、結にはいきなり脳天を殴られたかのような衝撃だった。

「……そんな……勘当……やなんて……」

自分が原因だと言うことは聞かずともわかった。

「うち、あの、お詫びしてきますから……!」

今にも駆け出さんばかりににうるたえてそういう結に、修一郎はそっけなく答えた。

「おまえの詫びが何の役に立つ。第一母屋の人間がおまえなんぞに会うか」

「そやかて……、あの……」

「ええから茶なり入れてくれ」

言われてようやく、結は修一郎が帰宅した時のまま、玄関先で突っ立って話していることに気がついた。

「すみません……! すぐにお部屋にお持ちいたします」

慌てて頭を下げばたばたと足音高く遠ざかる結を、修一郎は優しい面差しで見送った。

結が湯飲みを盆に載せ居間に行くと、修一郎はもう着替えてくつろいでいた。

「おまえの親にも来て貰うか? 日取りは先生や八重さんの都合で決めるつもりやが、来て貰うなら旅費くらいは出してやってもええぞ」

修一郎は機嫌良くそう言ったが、結は浮かぬ表情のまま、

「……いえ」

と、言葉を濁した。

「勘当やなんて……うちはやっぱり、良くないと思います……」
遠慮がちながらしつこく繰り返す結に、修一郎も笑顔を消した。

開け放した障子からは気持ちの良い風が入ってくる。外の日差しは明るかったが座敷は仄かに翳り、畳の感触もひんやりとしていた。「親子の縁は……、そないに簡単に、切れるもんと違うんやないですか……」

黙ったままの修一郎に、結はためらいがちに切り出した。その厳しい表情を見て一旦口をつぐんだが、修一郎が何も言わないのでまたおそおすと言葉を継いだ。

「……うちは子供のこと、旦那様に認めて貰うただけで十分です。そやからほんまに……うちではあかんのやったら、お願いです、旦那様から旦那様にお詫びして下さい……」

「山岡喜重郎が一旦勘当を言い渡した不肖の倅の詫びなど聞く訳なかるうが。仮にも一帯の大地主、山岡家の総領やぞ」

とうとう修一郎が押し出すように言った。

結がまた何かを言いかけたが、修一郎の口調に押し黙った。その様子に修一郎も表情を和らげ、

「あのひと俺が憎いだけで勘当を言うたんと違うぞ」と言葉を継いだ。

「おまえにはわからんかも知れん。そやけどこれが、一番八方丸う収まるやり方なんや」

「……………」

「山岡がどれだけの家ものかわかるか？ 大きい家はな、自分の家、自分の家族のことだけ考えとればええのとは違うのや。一族郎党、全部を束ねていかなならん。個人の我が俣など通らんのや……結」

子供に言い聞かせるように、ゆっくりと続ける。

「若隠居でおらんも同然でも俺は本家の長男や。その俺が百姓上がりの女中風情と一緒になると言うて、うるさ方の親戚連中が黙つと思うか？ 俺が山岡から出れば、文句を言われる筋合いものなるやろうが」

「……………」

「……そやから……うちは……旦那様とやなんて……そんなだい

それたこと……」

うつむいて消え入りそうな声で言う結に、修一郎はさらに重ねて言った。

「あのひとはな、俺が今持つとるものは全部そのままくれると言った。どういう意味かわかるか？ もう他人になるこの俺に、今まで通りの生活をくれたのや。この離れも土地もこのまま俺のものや。わずかとはいえ田畑や山もある。贅沢さえせなんだら、おまえや子供、それに充三くらいはこれまで通りに養ってやれる」

そこまで言うと、修一郎は少し笑った。いつもの親や家を語る時の表情ではなく、含みのない澄んだ笑みだった。

「俺は今日ほど、親を有難いと思うたことはなかったぞ。どれだけ疎んじあつとつても、親は親やとな」

「……………」

修一郎の言うことはわかる気がした。

しかしそれでも、否、それだからこそ尚更、親の情を感じたのが親子の縁を切られたその席であったことに、結は無惨な思いがしたのだ。

また結は、修一郎がそうまでしてきつぱりと自分を選んでくれたことにも驚き、身の置き所のない申し訳なさも感じたのである。

確かに修一郎は「子供のことはちゃんとしてやる」と言った。しかしそれはこの家で養育し、きちんと教育もつけてやる、といった程度の言葉かと思っていたのだ。「籍に入れてやる」とも言った言葉から、もしかしたら庶子として認めてくれるつもりかも知れない……とは思ったが、それ以上のことは考えもつかなかったし、結にはそれで充分すぎるほどだった。

修一郎は何の覚悟も考えもなかった自分とは違い、考え抜き、心を決めたに違いない。先刻修一郎が言った通り、不仲であったとしても親子は親子だ。余人には伺い知れぬ情もあるはずだった。

胸が詰まり、それが涙になってこぼれ落ちた。修一郎はいっそう優しく穏やかに、

「俺はどうせ、あの家では死んだようにしか生きられん。もつと早うにこうすれば良かったのや。親父も俺も、一番ええ方法がわかっていながら今まで思い切れなんだ　結」と言い、その手を取った。

「みんながええように収まったのや。そやから泣くことはない。ええな、このことはもう気に病むな」

結は小さく頷いた。それが精一杯だった。

26 / 祝言3 (後書き)

ようやく再開……

と申しますか、ぼちぼち再開です^^; 長らく放置で申し訳ありませんでした。

少しずつでも書いてゆきたいと思ってますので、またよろしく願
いいたします (^ - ^)

数日来降り続いた雨も上がり、その日は朝から晴れていた。

床の間には正月と同じように松竹梅の掛軸をかけ、蓬萊を飾る。

正月の不思議に明るく暖かな雰囲気再び客間を満たした。

瓶子へいじには呉服のささ屋が届けてくれた清酒を注いだ。ささ屋には特には知らせなかったが、八重に聞いたのか祝いに届けてくれたのだ。伏見の上物だった。この頃にはこうしたものも、なかなか手に入らなくなっていた。

修一郎は城崎と共に、午前中のうちに役所まで婚姻届を出しに行った。八重も早いうちから来て、結の着付けや結髪、化粧を手伝ってくれた。

花嫁衣装は臙脂の振袖である。やって来た八重はまぶしそうに「よう似合うてるわ、ほんまにええ御寮さんや」と褒めてくれた。「八重さん、それでは出かけてきます。すみませんが結のこと、よろしゅうお願いいたします」

修一郎がそう声をかけると、八重は愛想良く

「はい、行つてらっしゃい。結さんの支度はまかせて下さい」と答えた。

それからおもむろに持参のバッグからポーチを取り出し、「結さん白粉おしろいも口紅も持つてへんやろ？ 簪もうちので悪いけど持つてきました。そら今のままで十分きれいやけど、今日は特別な日や。うんときれいにして、旦那様を驚かせてあげましょ」と言った。

果たして届けを済ませ、帰宅したふたりの男は目を見張った。ふくらと結った髪を珊瑚玉や鼈甲細工べっこうの簪で飾り、白粉で肌を整え鮮やかに紅を差した結は、内から照り映えるような美しさだった。

修一郎もきちんと紋付きに着替えた。

城崎が媒酌人を務め、ふたりは契りの杯を交わして夫婦となった。

「結さん、ほんまにきれいや…… まだ十八やもんなあ……」
八重は涙ぐまんばかりである。城崎にも胸にせまるものがあつた。城崎が初めて修一郎に会つたのは、十年ほども前のことだ。帝大を出た先生が都会から赴任してきたというので、難しい患者だつた修一郎を引き合わされたのだ。

修一郎はその時十四になるかならぬかだつたが、持つて生まれた弱い体と病のせいやか、ひどく大人びた 否、老爺のような風情をその身に纏つていた。人生にも自分自身にも何の夢も抱いていない、醒めた瞳……ただひとつ、そこに深く暗くちらちらと燃える鬱屈した怒りだけが若く熱い血を感じさせるような、いびつな少年だつた。

城崎にも無力感があつた。最新の医療を学んでも、目の前の子供の病の治療法もわからず原因すら知れないのだ。その後病院を辞し診療所を開いた城崎が私的にも修一郎とつきあい始めたのには、修一郎の聡明さが都会に学んだ城崎には好ましかつた他に、医者でありながら力になれない負い目のようなものも理由にあつた。

今、目の前の修一郎は、新妻を優しく愛おしむ眼差しを持った一人前の男だ。ほどよい緊張感が頬を明るく紅潮させ、表情にも翳りは無い。同じ年頃の他の者と変わることはない、若くのびやかな男がそこにいた。

この場に充三がいたら……、と城崎はふと思つた。

この祝言を、どれほど喜んだことだろう

充三が結を連れてきた時、城崎には充三の行動が奇異に感じられたものだつた。

充三の様子を見れば、この男が結をどう思つているかは容易に想像がついた。翻つて修一郎は女を消閑の具ほどにしか考えていないのが明らかだつたから、それを知る充三がなぜ自分の大事な幼馴染みを差し出したのか、その真意を量りかねた。

だがこの三人を外から見守るうちに、充三の願いがわかるような気がしてきたのだ。今日の修一郎の曇りのない晴れやかな表情、結

の幸せそうな笑顔を、充三はどれほど見たかったことが……

「これで充三さんがおっいたら、もう何も言うことなかったのになあ……」

城崎の思いを知ってか知らずか、八重がつぶやくように言った。

「……ほんまに仰る通りです」

城崎も応えりともなく囁いた。

昼前には写真屋の永沢も来た。

「この度は、まことにおめでとう存じます」

きちんと背広を着た永沢が丁寧に頭を下げる。

「永沢さんが言つた通りの、真正正銘の家族になりました」

修一郎が笑つてそう言うのと永沢は慌てて手を振り、今度は米搗きバツタのようにぺこぺこ頭を下げて

「いやもう、その節は大変失礼いたしました。何も知らんと適當なことを申し上げてしまいました」
などと言つた。

「いや、私も嫌みで言つたのと違います。永沢さんは私どもにとつて、月下氷人のようなものや」

笑顔でそんな風に答える修一郎を、結は不思議な思いで見つめていた。そこにいるのが一年前、初めて会つた頃の修一郎と同じ男だとはどうにも思えないのだった。

あの頃はこのひとが、憎くて恐ろしくてしかたがなかつた

それを考えると、今こうして修一郎を慕い、夫婦めおとになれたことにこの上ない幸せを感じている自分自身のことも不思議だと思つのだ。ひとの縁えにしは不思議だ……自分という新しい「家族」を得るために、修一郎は自分の家族を失つた。そんなことも含め、結はそう思わずにはいられないのだった。

庭でふたり、それから城崎と八重も交えて写真を撮つた。

空は抜けるように青く、空気は澄んでいる。前日までの雨に洗われた庭木の緑が鮮やかで、庭土は水気を含んでしっとり落ちつ

ている。初夏の日差しに少し汗ばむほどだったが、梅雨の合間の爽やかな風が心地良く頬を撫でてくれた。

「やっぱり一張羅を着てきて良かったわあ」

しきりに恐縮しながらも八重はそんなことも言い、嬉しそうだった。

「結さん、親御さんに来て貰えんかったのは残念やったなあ」と言うのに、結は

「旦那様は汽車賃も出してくれると言うてくださっただんですけど、この時期は田圃も忙しいですし」と答えた。

多分両親には自分に対する負い目があるのではないか、と結は思っていた。この家に奉公に上がった時、修一郎がぼんと出した前金は女中の給金には多すぎた。充三は両親には修一郎について詳細には語らなかつたが、多分、娘がどんな扱いを受けるかは薄々気づいていたはずだ。

自分の晴れ姿を見て安心してほしい気持ちは結にもあつたが、それとは別に、呼んでも来ないだろうとも思っていた。

昨日届いた、妊娠と結婚を知らせた手紙の返事には母の薄い鉛筆の字で、「何のお祝いもしてやれず申し訳ない。旦那様にお会いしておまえのことを頼むことは出来ないが、心を尽くしてかわいがつて貰いなさい」とあつた。春先にこっそり帰郷し、顔も見ずに戻つたことに対しては何の言葉もなかつたが、もしかしたら充三の伯父夫婦は、結の帰郷を両親をはじめ他の村人には黙っていてくれたのかも知れなかつた。

ふと表情を翳らせた結に、八重は

「写真が出来たら送つてあげたらよろしいわ。親御さん、旦那様のお顔も知らんのやろ？ 優しそうな男前なのを見たらきつと安心なさるわ。それに結さんの綺麗な花嫁姿にはびっくりします。親には子供は、いつまで経つても子供のままやからなあ」と明るく言った。

「はい、そうしたいと思つてます」

結も再び笑顔になり、そう答えた。
そうこうしているうちに仕出しが届き、場は酒宴へと移った。

「本日は私どものためにご足労いただき、ありがとうございます。至らぬふたりですが、こうして所帯を持つことが出来ました。ご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしゅうお願い申し上げます。何もありませんが、どうぞゆっくりとおくつろぎください」

修一郎がそう口上を述べると、客も口々に

「おめでとうございます」

「どうぞ末永くお幸せに」などと祝いを述べた。

皆のもの他に末席にもうひとつ膳があり、そこに酒肴が取り分けられ酒も注いだ杯が置いてあるのを座敷の客人は見たが、それについて何かを訊ねる者は誰もなかった。

もうひとりの「家族」が、今ここにいれば

それは座敷にいた者全ての思いだった。

宴はなごやかに、日が暮れる頃まで続いた。

数日後の話である。結が使いから帰宅すると、居間に手拭いが二反置いてあった。

傍らには半紙と水引もある。

「……旦那様、あの、これは……？」

怪訝そうに訊ねるのに、修一郎は

「手拭いや。見ればわかるうが」と笑って答え、なおも真意を量りかねたような結に言った。

「いくら世間とつきあいが無いといつても、所帯を持ったのや。近所にも挨拶くらいはしとかなあかんやろうが」

「……………」

頬が赤らむのを感じる。先日の祝言を夢のようにも感じていた結には、「所帯を持った」実感などまるでないのだった。

手拭いは麻の葉の意匠を藍に染め抜いたものだった。これを適当な長さに切つては半紙で包み、上から水引をかける。その包みを持ち、ふたりで出かけた。

「隣の山岡です。このたびこの結と祝言を挙げましたので、ご挨拶に上がりました。下働きをしていたこれのことは、すでにご存じかと思いますが、縁あって夫婦となりましたので、これからはそのようつきおつてやって下さい。私はこの通り体が不自由でなかなかお役には立てませんが、これからは皆様と共にお国に尽くして参りたい所存です。どうぞこれ共々、よろしゅうお願い申し上げます」

その口上を聞き、結は胸が締めつけられる思いだった。世を疎み世間を憚って生きてきた修一郎、その修一郎を世間がどう見ているか、当の本人が知らぬはずはない。それでもこうやって今さら世間と関わるうとするのは、結を氣遣つてのことだというのが痛いほどに分かった。

修一郎が頭を下げ、結もあわててそれに倣った。

行く先々の玄関で修一郎は同じ言葉を繰り返したが、それを受ける側もあからさまであれ遠慮がちであれ、等しく好奇を隠しきれない目でふたりを見た。

何軒めかの家を辞した時、とうとう結が言った。

「旦那様、お疲れやないですか……？ あとはうちひとりでご挨拶してきますから、どうかもう、帰ってお休みになってください……」

修一郎が立詰めで疲れた様子だったのは事実だが、結には修一郎が、何か見せ物にでもなっている気がして耐え難かったのだ。

修一郎は結を見ると片頬で笑った。

「おまえひとりでは心細うてしょうがない。それにこういうことは、主がきちんとすべきやろう」

そうまで言われては、もう何も返せなかった。ただ黙って、修一郎を気遣いながらゆっくりと歩いた。

用意した包みをすっかり配り終えて帰宅したのは、そろそろ日が傾き始めた頃だった。日暮れまでにはまだ時間があったが、結は湯を立て、

「お風呂用意しましたから、ゆっくり浸かってください」と修一郎に声をかけた。

背中を流してくれといわれて単衣ひとえの裾をからげ、襷たすきをかけて風呂場を覗いたが、修一郎は

「なんやその格好。掃除でも始めるのか」と笑うと、

「後にしとけ。一緒に入ろう」と言った。

「え……そやけど……、まだ日も高いですし……」

「風呂に入れと言ったのはおまえやろうが。どの道それでは濡れねずみになるだけや。ええから早う脱いで来い」

修一郎に促され、結はためらいながらも着物を脱いだ。

離れの造りは小体こていだったが、風呂場は存外に広かった。湯船は大人がふたりで浸かるにはさすがに狭いが、洗い場は充分の余裕であ

る。

この離れは元々、山岡の先代が妾を囲うのに普請したものであったらしい。田舎家には似合わぬ瀟洒でモダンな佇まいは、そうしたところにも理由があるのだろう。風呂場の窓も大きく外光をよく取り入れ、この時間なら明かりなどいらなかった。

少し透かした窓からは心地よい風が入ってくる。外はすでに初夏とも思えぬ陽気だが、湯を使った素肌にはむしろそのくらいの気温が気持ちよかった。

だが結には仄かに翳った明るさも、肌を撫でる爽やかな風さえも恥ずかしいのだった。かつて、同じような明るい昼間にこの場所で味わった惨めさや恥ずかしさとは違うものだったが、結はやはり身を縮め、肌を隠そうとした。

「おまえは面白いな」

修一郎はその言葉通り、面白そうに言った。

「いつまでたっても恥ずかしいのやな」

「そういうことは……言わんでください……」

結はうつむき、消え入りそうな声でやっと応えた。肩まで朱を散らしたように染まっている。

「さんざん剥かれてあられもない姿を晒してきたくせに、今さら何が恥ずかしいのや」

ますますうつむき、応えることさえできない結に、修一郎は重ねて言った。

「ほんまにおまえはかわいいな……」

言葉にすると、ふつふつと実感が湧いてくる。愛しさがこみ上げ、修一郎は湯船から出ると結に手を伸ばした。

「……お背中お流ししますから、あの、向こうを向いてください……」

……

真っ赤になりながらその手を逃れ、蚊の鳴くような声で言う結に、修一郎は笑いながら素直に従った。

「旦那様、加減はどうですか？きつうないですか？」

少し強めの力で修一郎の背中を擦りながら、結は修一郎に声をかけた。

「うん。丁度ええ」

修一郎の視線がなくなり、恥ずかしさがやわらぐと、結の心にも少し余裕が出来た。

修一郎の背中が白く薄かった。こうした明るいところで修一郎の裸体を見たのは、初めてかも知れない。結は思うともなく、充三の背中を思い浮かべていた。

浅黒く滑らかに張りつめた肌。熾火おきに照らし出された背中がくつきりと筋肉を浮かび上げらせ、そこに浮いた汗さえも美しかった……

「膝や腰は痛みませんか……？」

充三の面影を振り払うように、また訊ねる。年頃はそう変わらないの……と、修一郎の痩せた背中に心が痛んだ。修一郎の膝くるぶしや踝くるぶしに特に変形は見られなかったが、結は城崎が「体が不自由なのも病のせい、病で関節が壊れてしまう」のだと言ったのを、はつきりと覚えていた。

「大丈夫や」

修一郎は含みのない声でそう答えると振り返った。

「……あ……あっ」

抱き寄せられて思わず声が出た。恥ずかしさに緊張しきっていた体が、勝手に反応してしまう……

「や……っ、やめ……あの……だ、旦那さま……お手を、離して」

拒絶するはずの音が甘くかすれている。神経がそそげ立つような快感が体の内側を走り、下腹が潤うのを感じて、結は思わず腰をよじった。だが修一郎は、ほんのしばらく結の反応と肌の手触りを愉

しただけで、それ以上のことはしようとしなかった。

「……やめとこう。腹の子に障ってもあかんからな」

笑ってそう言った。明るい風呂場で痴態を晒さずにすんだ結は心底ほっとしたが、少しだけ、ほんの微かな失望も残った。それが何なのかに気づき、羞恥に結の体はますます火照った。

「さあ……そやけど、困ったな」

そんな結の様子に気づかぬげに、からかうように修一郎が続けた。「女のおまえはどうにでもなっても、男は一旦こうなると納まりがつかん」

そう言いながら結の手を取り、手拭いの下の己れのものを握らせる。頬を赤らめながら、結は身の内に愛しさがこみ上げてくるのを感じていた。

それを初めて知ったのは、充三と抱き合った時だった。修一郎に抱かれた時、その感覚はいつそう鮮明になった。

自分を蹂躪し辱める存在、醜矮で直視も出来なかった「それ」が、なぜか愛しく大切に思えたのだ。可愛い、とさえ感じる。それは幼い子供に抱く感情に似ていた。

「旦那さま……うちが……」

消え入りそうな声で囁くようにそう言うと、結はゆっくりと身をかがめた……

翌日、結は八重の長屋にいた。

お茶でも、と八重が言うのを結は笑って辞した。先に城崎の診療所を訪ねていた。城崎は往診に出て留守だったが、城崎の妻が迎えてくれた。

このひとは名前を弥生といい、夫と同じく医師である。ほっそりとした顔立ちも控えめで、城崎よりは少し若いようだ。この時代、職業婦人はまだまだ少なかった。ましてや田舎町のこととて、診療所の女先生と言え、ば近隣では知らぬ者もなかったが、結はこのひ

と 弥生と会うのは初めてだった。

診療所は患者もおらず静かだった。挨拶をすませ、結婚祝いに配給で貰った酒と例の手拭いを差し出すと、弥生は丁寧に祝いの言葉と礼を述べ、茶を勧めた。

「先日はお招きいただきながら、診療所（じゆりやうじよ）を空にする訳にも行かず、失礼いたしました」

弥生の女医らしい知的な声と物腰に、結は学もなければ華もない、田舎者の己れが恥ずかしくなった。頬を赤らめた結の様子を勘違いしたか、弥生は優しい笑顔で

「本当にお若くてかわいらしい奥様でいらつしやる…… 結さんおめでたですってね。良いお産婆さんもご存じでしょうけど、私どもで出来ることでしたらいくらでも力になりますから、困ったことがあつたらどうぞ頼ってくださいね」と言った。

その後八重を訪ね、その人懐っこい笑顔を見たら、なんとはなしにほっとした。

「城崎先生の奥さん、上品なおひとやったやろ」

結ははい、と頷いた。

「ちよつと地味やけどな…… まあ女医さんやから、あれくらいが丁度ええわな」

八重は笑いながらそんなことを言い、

「あの奥さん、元々ええとこのお嬢さんで、東京か横浜か、あつちの方で育つたらしいわ。言葉もなんや違つてたやろ」と続けた。世間の噂に詳しいのは、相変わらずのようである。

弥生に差し出したと同じものを手渡すと、八重は

「わざわざええのに、こんな……」と言いながらも嬉しそうに受け取った。

「麻の葉ですか…… 修一郎さん、ほんまにやや子が嬉しかったんやなあ」

包みを解き、ほう……と溜息をつきながら八重が言った。

麻の葉は、麻が丈夫でまっすぐに育つことからそれにあやかつて

子供が無事に育つようと、また魔よけの意味もあり、無事を祈って昔から産着や着物、小物などにも用いられてきた文様である。

「それやとうちも嬉しいんですけど……」

結がためらいがちにそう応えると八重は呆れたように笑い、

「何を言ってますのや。好いた女おんなに自分の子が出来て、喜ばん男がどこにおりますかいな」

と、いつぞやの城崎と同じことを言った。

本当に修一郎の子なのだろうか……

胸の奥底にちらりともたげた不安を、結は慌てて抑えつけた。

修一郎が、結の腹の子を己れの子だと信じたのだ。だから自分も、そう信じ抜こうと決めた。本当のことなんて、きつと神様にしかわからない。「信じる」こそが大切なだと結は思った。

「この手拭い、ご近所に配ってもまだようけ余ったので」と、気持ちを変えようと結が言った。

「襦むす襦きでも縫うたれと旦那さまが言うんですけど…… それよりは産着にしたろうかなあと思うとるのです」

「ああ、それがよろしいわ」

機嫌良く八重が応えた。

「襦おしめ襦めなんか、着倒してたくたになつたくらいの古着ボロで丁度ええのや。これやったらきつとかわいらしい産着が出来ますわ」

産まれるのが待ち遠しいなあ、と、八重が温かい笑顔で心底待ち遠しそうに言った。結の心も軽く温かくなった。

30 / 隣人たち3

充三からの葉書が届いたのは、新聞がミッドウェイ海戦を報じた当日である。

華々しい戦果を報じた記事を読みながら修一郎はむっとり黙り込み、不機嫌な表情だった。こうした時、結は修一郎に話しかける言葉を持たなかった。離れに入った最初の頃のように萎縮し、ただおろおろと顔色を伺うことしか出来ずにいた。

昼過ぎ、郵便受けに充三からの葉書を見つけた結は、思わず

「旦那さま……！」と声を上げた。

結の声と気忙しげな足音に、縁側で本を読んでいた修一郎が顔を上げた。

「何や、けたたましいなん」

結に向けたその表情は険しかったが、結が「葉書が、充三から」と言うのを聞き、その手に持ったものを見たとき、ぱつとそこに赤みが差した。

結が差し出した葉書をもどかしげに手に取る。裏面には小さな張子の戌が描かれていて

旦那様、結様。御元氣ですか。

御葉書有難う御座いました。教練で覚えることが多くなかゝ手紙を書けず

ご無沙汰致しましたことお許し下さい。

此處での生活にもやうゝ慣れて來ました。私は元氣でやつてをりますので

心配はなさらなさい。

御結婚、御懐妊、本當に御目出度う存じます。心よりお祝ひ申し上げます。

御二人の許へと歸る頃には、屹度赤ちゃんもよちゝ歩いてゐる

ことでせうね。

早く會ひたい。御二人の赤ちゃんはどんなにか可愛らしいこと
せう……！

又手紙を書きます。そちらの様子も御知らせ下さいね。

どうか御二人とも御體に氣をつけて御無事で御過ごして下さい。

御二人の御多幸と御健勝をお祈り致します。

几帳面な丁寧な字で、そうあった。

「これだけ……充三……苦勞しとるのと違つやるか…… 軍隊はき
ついとこやというから……」

心細げな声でそう呟くように言った結に、修一郎は

「あれは真面目やし利口な男や。何でもそつとう器用にこなすしな
心配いらん、きつとちゃんとやつとる」と応えた。

その声には先刻までの不機嫌さは露ほどもなく、充三への思いが
溢れていて、結の心も熱くなったほどだった。

翌日は婦人会の作業日だった。この日は午後に来客の予定があり、
また朝から体が熱つぽく、気分もすぐれなかったが、そんなことで
休む訳にもいかない。幸いその日の仕事は慰問袋の縫製と梱包で、
たいした作業量ではなかった。

縫い上がった慰問袋に供出された品や町中まちなかで買ったあれこれ、子
供達の書いた手紙や絵を詰める。それらの品に込められた、残った
者の氣遣いや祈り 昨日充三からの便りを受け取ったばかりの結
には、一層それが胸に染みだ。

今は内地にいるが、遠からず戦地で戦わねばならない。その時こ
うした慰問袋は、どれだけ充三の心を暖め、励ますことか……

これを受け取る兵士の一人ひとり、充三と同じ存在なのだ。そ
う思うと、作業の手にも熱がこもるのだった。

作業所での話題はもっぱら海戦の勝利と戦について、それからや
はり結と修一郎のことだった。

「すごいなあ、結さん、玉の輿やね。羨ましい……」

小さな声で話しかけてきたのは、隣で手を動かしていた若い女だ。
「いえ……そんな、とんでもないです」

結はためらいながらそう言った。玉の輿……そう思われるのも無理はない。修一郎は結のせいで山岡家を勘当されている。だが隣人がそれを知るはずもなく、結もそのことを誰かに話すつもりは全くなかった。

ふたりの会話が聞こえたか、年かさの女が言った。

「身分違いは失敗の元や。人には分相応というのがあるんや」

隣の女は顔を伏せたまま、

「……新婚さんに、そんなきついこと言うたらんでも……」

と、ぶつぶつと呟くように言った。

「生まれも育ちも違うことは、よう承知しています…… うちはいれまで通り、旦那様にお仕えするだけです」

独り言のように結が応えた。聞こえたのか否か、年かさの女はもう何も言わなかった。

その後話題は戦を経て暮らし向きへと移った。血液型の話が出、結は思いきって聞いてみた。

「A B型のお方は、こちらにはおられますか？」

この頃には空襲に備え、たいていの者は自分や近親者の血液型を知っていた。

「……さあ、どうやるう」

隣の若い女がややあつて口を開いた。

「A B型はけっこう珍しいからなあ。うちとこもこないだ全員調べたけど、全員AとOでA B型はおらんかったわ」

「うちのお爺ちゃんがA Bやったなあ。そやけど倅も孫もA型なんよねえ」

もうひとりがそう答えた時である。

「そのひとに血液型の話なんかするの、やめとき」
と、少し離れた場所から声がした。

「血い抜かれるで」

「どきん、と結の心臓が踊った。声の主は結を見ず、

「そのひとの旦那さんて、山岡の長男やろ。生まれつき、なんやへんな病気やねんてな。うちの知り合いが昔山岡さんここで働いとったけど、長男が寝込むたんびに血い抜かれて大変やっただて言うてたわ」

と、尖った口調で続けた。

「……………」

隣の女が驚いたような目で結を見、周囲の空気も変わった。

「うち……………あの……………」

結が何とか口を開いた時である。

「ホラホラしようもないお喋りはやめて、手を動かして！」

と、今度は班長が大声で言った。皆俯いて作業に戻り、結も口をつぐんだ。

「結さん、今日のことあんまり気にせんときな」

作業を終えてそれぞれが帰宅し始めた頃、隣にいた女が戸口を出たところで気遣うように声をかけてきた。

「はい。……………ありがとうございます」

自分のうつかりした一言が修一郎を貶めることになってしまったかと気に病んでいた結は、慰めの言葉に涙が出そうになった。

「若旦那さんが病人なんは、悪いけどみんなとうに知っとることや。今さら誰も驚きやせんわ。……………どんな病かは……………そら知らんかったけど……………」

女は一旦言葉を呑み込んだが、その後、あんたも病人の世話は大変やろうけど、頑張りな、と続けた。あっさりとしたその言葉の裏の気遣いが、結には有難かった。

31 / 隣人たち4

客人がまだ来てなければ良いかと念じつつ結は帰路を急いだが、三和土たたくにはすでに見慣れぬ靴があった。急いで手拭いで汗を抑え、髪を撫でつけて居間へ向かう。居間は障子が開け放たれ、二人の男が談笑しているのが見えた。

「旦那さま、ただ今戻りました」

手をつき、頭を下げる。客人にもいらっしやいませ、と挨拶しながら顔を上げると、丁度そこに座っていた男と目があった。

男の眉がかすかに上がった。見たところ四十半ば、瘦躯ながら遅しい。短く刈り込まれた髪はぱらぱらとごま塩混じりで、赤銅色に日焼けしたその顔には深く皺が畳まれている。結にも、その男が何者なのかはすぐにわかった。

「俺の女房や」

修一郎が笑ってそう言い、結は慌てて

「結と申します。どうぞよろしゅうお願い申し上げます」と再び頭を下げた。

「充三と同郷や」と修一郎が続けると、男は驚いたふうもなく笑顔で、はい、と応えた。

「この度はご結婚おめでとう存じます。竹谷と申します」

そう言いながら、竹谷と名乗った男は傍らの包みを結の前に押しやった。

「しょうもないもんですが、どうぞ受け取って下さい」

「すみません……お氣遣い、ありがとうございます」

包みの中は旬の野菜だった。かすかに魚の匂いもする。一瞬胸がつかえたが、それを呑み込み、結はまた頭を下げた。

「うちの名代を務めてもるとる男や。田畑でんぱたのことは充三とこの竹谷に任せつきりやったが、充三がおらんようになってもたからな。お

まえにも色々覚えて貰わなならんし、一度会つておくのも良かろうと思つてな」

横から修一郎がそう言った。

「名代人のお方ですか……」

結が応えるともなく言った。自分の村の名代人を思い出ししていた。在郷の地主で、このご時世に太鼓腹を突き出した男だった……

「山岡さんがええ地主さんで、わしらもほんまに助かってます」

「べんちゃらを言つても、出て来るのは薄い茶くらいのもんやぞ」

修一郎が笑つてそう言うのを聞き、結はあつと小さく声を上げた。

「すみません、うちときたら気が利かんで……！　すぐにお茶をお持ちします……！」

ぱたぱたと足音が遠ざかる。

「ほんまにどうしようもない……充三がおるうちに、もうちつと行儀を仕込んでくれたら良かったんやがな」

「可愛いらしいおひとやおませんか。修一郎さんによつ似合にあつとつてや」

居間では二人の男が笑つた。修一郎はもとより、竹谷の目にも温かさがあつた。この男は自分たちと同じ出自の娘、そしてそれを娶つた地主に対しても、これまで以上の好意を覚えたようである。

泊まつていけというのを、竹谷は近隣に縁者があるからと辞し、夕刻に発つた。

玄関先で、結は改めて頭を下げた。

「今日はわざわざお越しいただき、大事な作物もようけいただいて、ほんまにありがとうございます」

「奥さん、わしのようなものに頭を下げることはありません。もう百姓でも女中でもない。堂々としてなされ」

竹谷が力づけるようにしっかりとした声で応えた。結は郷里の父を思い浮かべ、何か甘酸っぱい、幼な子のような気持ちになった。

実際に父に甘えた記憶はほとんどない……だが父とは、きつとこ

うした時に励ましてくる存在なのだろうと思った。

「田圃たんぼの方は、どうですか……？」

そう訊ねると、竹谷はふうっ、と小さく溜息をつくようにして、「今年ことしは天気はまあまあやが……若い男おとこが次々に兵隊に取られてますからな……残こった爺おじいと女子供こどもでは、なかなか大変ですわ」と言った。

「田植えの時期には町中の女学生とかも手伝いに来てくれましたが……赤子の世話やら汚れ仕事やら、全然ようしよらんですしねえ」
そう言っいって竹谷は笑い、

「まあわしらは一生懸命てんめい田畑でんげを守っていただけや。山岡さんに小作料も払はわなならんしな」
と続けると、一礼して去って行った。

「竹谷は機嫌きげんよう帰かったか」

居間いまに戻ると、修一郎がそう声をかけてきた。
はい、と答こたえると、

「あの男、結むすが気に入こったようやったな。……あれにはおまえと同じくらいおなの娘むすめもおるし、我が娘むすめのような気がしたんやろうな」と言いった。

「はい、うちも……あのおひとを見とって、なんや郷里くりにの父を思おもい出だしました……」

「おまえが竹谷の娘なら、ここにはおらん道理ことわりやな」

修一郎が短みく言いった。小さな棘いばらを感じ、結は口をつぐんだ。が、
すぐまに思おもい直ただした。修一郎の言いう通りとおりなのだ。

「もし、うちとこの地主ぢゆうしさんが旦那様だんなさまなら……今いまもうちうちは郷里くりにで田圃でんぼを耕かしてたかも知しれません」

「……………」
「充三みつぞうかて……もしかしたら、こちらには奉公ほうこうに上あがらんかったかも……………」

「小作せうさくを夜逃よにがげにまで追おい込んでどないする。争議じょうぎでも起こされた

日には目も当てられんわ　尤も」

と、修一郎が吐き捨てるように言い、「俺がおまえらの村の地主やったとしても、充三の親が借金踏み倒して逃げんかったとは限らんがな」と続けた。

旦那様は、充三の親を良く思っていないのだろうか……、と、結は思った。だがそうであつたとしても、結にも修一郎の、彼らに対する気持ちはわかる気がした。借金を肩代わりしたのが結局は修一郎であることを差し引いても、充三の親に対しては、結自身もわだかまりを感じていなかった。

生活が苦しく借金を重ねたのは、彼らだけが悪いのではないかも知れない。結の家とて娘の身売りを考えたくらいだ。それをせすにすんだのは、ただの巡り合わせだということもわかっている。だがいくら切羽詰まつたからとて、充三を見捨てていくことはなかつたではないか。充三は幼いうちから家のために働いていたのに。そのまだ半人前だつた充三に、借金まで押しつけて

「食事の支度を、して来ます」

むかむかと胸に上がってきた苦いものを抑えつけるように、語尾をはつきりと言うと結は頭を下げた。

台所で先刻貰つた物を刻んでいると、修一郎がやって来た。

「旦那さま……こんなとこに」

と、結が言いかけたのを遮り、

「竹谷のやつ、何を土産にくれたのや？」と結の手元を覗き込む。

そこにあつたのは南瓜やきゅうり、豌豆といった類と、二尾の干し魚であつた。

なにやら不思議そうに干物を見た修一郎に結が言った。

「鮎です……うちらもこの時分には、よう川に捕りに行きました。

ようけ捕れた時には、こうやって干しといたもんです」

結の顔色はいまひとつだったが、その声には懐かしさが溢れており、それを聞いた修一郎の胸にも温かさが満ちた。

「家で食うために干しとったのを持ってきてくれたのか。それは悪いことをしたな」

修一郎は笑って言った。

「そやけど鮎は俺も好物や。干物というのは初めてやが、あの男ええもんをくれたわ。今夜はこれをつけてくれ」

「はい……！」

結の顔色がぱつと明るくなった。子供を宿してこの方、どうとうことのない食材や料理の匂いに苦しめられることも少なくなかったが、あまり食べ物に執着のない修一郎が嬉しそうだったのが結にも嬉しく、胸の悪さも忘れた。

夕餉の席である。結の膳に干物がつけてないのを見、修一郎の表情が翳った。

「余計な気を遣うたか？」

「……いえ」

「つわりがきついのか」

「いえ、……あの」

結は慌てて頭を振った。

「そんなことはないんです。ただ、あの……なんやちょっと、食べ物好みが変わったみたいで……」

修一郎に心を見透かすように見つめられ、結は声も小さくなり、顔を伏せてしまった。

「結」

「……うちは今は、鮎はいりません」

俯いたまま、結が言った。

「旦那さまが美味しそうに食べてくださったら……うちにはそれが、一番のごちそうや」

修一郎はなおも結を見ていたが、視線を緩めると箸を取り、

「そんなら遠慮なくいただきこう」と言った。

「お味はどうですか……？」と結が不安げに訊ねるのに

「うん、美味しい。ちゃんと鮎の香りがする」と笑った。
それを見て結も笑顔になった。そして自分も茶碗を取り、食べ始
めた。

梅雨が明けた頃である。修一郎は離れをぐるりと取り囲んだ高い板塀を取り払い、代わりに低めの生け垣を作らせた。

低いといっても人の目線ほどの高さはある。だが空が広くなり、枝葉を透かして往来の様子もかいま見えて、結には世間が一気に近くなったように思えた。

「なんやお座敷が明るうなったような……」

結がそう言うと、修一郎も笑って、

「往来からもきつと内なかが見えるぞ。おまえが裸で吊されたり縛られたりしとるのを見たら、みんなそら度肝を抜かれることやるうな」と言った。

「そんなことは、やめて下さい……！」

結は驚き、うろたえて懇願した。実際に縁側で裸に剥かれたこともある結には、修一郎の言葉が本気とも冗談ともつかないのだった。「誰か適当な男を下働きに雇うか。俺ではおまえを吊るすことなど出来んからな」

「旦那さま……」

色を失い、今にも泣き出しそうな結を見て、修一郎は呆れたように言った。

「アホか。おまえは冗談と本気の区別もつかんのか。俺がほかの男に、自分の女房を弄いじらせると思うか」

「え……」

結は頬を赤らめた。からかわれたのだとようやく気がついた。だが、本当に冗談なのだろうか……

赤の他人ではなく、充三ならどうだろう。結が修一郎の妻になつた今、修一郎はそれを理由に充三をも自分から遠ざけるものだろうか??

明るい座敷で、結は泣き暮らしていたかつての日々を思い出していた。

修一郎が自分を責めるのに充三を使っていた理由に、結はもう気づいている。充三と結、互いを思うふたりの気持ち、修一郎は初めから知っていたのだ。ふたりの心が流す血は、修一郎の捻れた情念を満足させたに違いない。

だが修一郎が結を充三に責めさせたのは、それだけが理由なのか

……
修一郎と充三、対照的なふたりだと結は思ったことがあった。華奢で病弱な修一郎には、充三はどう映っていたのだろう。自分を軽々と抑え込み、きつちりと責め上げるあの腕を、修一郎は欲しいと思ったことはないのだろうか。

「……………」
いつ頃からか、結には不思議な感覚があった。結の裸身に触れ、これを苛む充三の指先が、そのまま修一郎のものであるかのような感覚だ。充三を通じて修一郎が結につながって来るような、不思議な??。

ぼんやりと表情が失われ、眼差しが遠くなる。明るい初夏の日差しの中、思いに没入していく結の傍らで、修一郎もまた口をつぐみ、何事かを心に思い浮かべているようであった。

日々は瞬く間に過ぎた。七月も半ばを過ぎたころ、待ちわびていた便りがあった。充三からの葉書である。

それは異国風の町並みを写した絵葉書で、

旦那様、結様、お變はりなくお過ごしですか。

私は満州に配屬が決まり、今佳木斯に来てゐます。

佳木斯は美しい街です。そしてとても涼しくしのぎやすいです。

そちらはもう梅雨も明けて蒸し暑くなってきた頃ではありません

か。

おふたりともどうかくれぐれも御身おいとひになり、お元氣でお過ごし下さいますやう。

私の事は何も心配は要りません。國境の警備が仕事で、戦はありませんから、どうかご安心下さい。

おふたりと、それからおふたりの可愛い赤ちゃんに再會できる日を今から心待ちにしています。

とあつた。消印は薄くかすれており、読み取れなかった。

「満州……」

結が呟くと修一郎は立ち上がり、自室の本棚から地図帳を出してきた。

「佳木斯……ここや」

修一郎が指し示す。満州の最東端、ソビエト連邦との国境である。

「こないなところに……冬は寒いのと違うやろか……ソ連がすぐそばやないか」

修一郎はちよつと黙つた。が、すぐに言葉を継いだ。

「寒いのは難でも、満州なら内地も変わらん。営舎もしつかりしろつし、ソ連とは条約があるから、せいぜいあつても国境での小競り合いやろつ……大丈夫や」

そついう修一郎の声には、結に言い聞かせるとともに自分自身をも励ます響きがあつた。

それから半月も経たぬ八月の頭、事件が起こつた。

その日、結が安産の祈願に住吉神社へ詣でるといふのに、めずらしく修一郎が同行すると言つた。

修一郎は信心を持たぬ男である。その修一郎が妻とともに安産祈願とは奇異な話であつたが、結には思いもよらぬ修一郎の氣遣いがたまらなく嬉しかった。空は抜けるように青く、気温はすでに高かつたが空気が乾いていて氣持ちのよい帰路を、修一郎と結はゆつく

りと歩いていった。

前方から若い男と年かさの男が連れ立って歩いて来るのが見えた。ふたりとも軍服姿である。若い男のあからさまに不機嫌そうな表情が遠くからものはっきりと見え、結はひどく不安になり顔を伏せた。

すれ違いざま、修一郎の杖が若い軍人の足にひっかかった。

「あ……っ」

杖を取られ、修一郎がつまづき、膝をついた。

「旦那様……！」

「貴様、わざと杖を引っかけてやるう！」

若い男が居丈高に怒鳴った。修一郎は目を合わせず、

「申し訳ありません」とのみ言った。

「だ、旦那様、大丈夫ですか？」

結は自身も膝をつき、修一郎を助け起こそうとした。修一郎は十分に気をつけて歩いてきた。いいがかりだ、わざと引っかけたといふならそれは軍人の方ではないか。そんな思いが猛然と結の心に突き上がった。だがやはり口にはできなかつた。

「貴様お国の役にも立てん片輪者のくせに、昼間からのんびり女と散歩とはええ身分やの」

軍人は反論も反抗もしないふたりになおも言い募った。軍人への怖れも忘れ、結は震えるような怒りを感じたが、当の修一郎は眉ひとつ動かすこともなく目を伏せたままであつた。

年かさの方は呆れ顔ながら止めることもせず成り行きを見ている。修一郎が目も合わせず表情も変えず、最初の言葉の後は押し黙って答えなかつたことが気に食わなかつたのか、若い軍人は

「なんやその不満げな顔は。役立たずのくせに一人前の顔をしておつて」

というなり、ちょうど手をつき、結の手を借りて立ち上がるうとしていた修一郎の肩の辺りを蹴った。

「っ！」

足蹴にされて修一郎は後ろに倒れ、咄嗟にそれをかばおうとした結が下敷きになった。

「結……！」

「う……、うちは、平気です……それより、旦那様が……」

言葉と裏腹に結の表情が歪んでいる。下敷きになった拍子に、どこかを強く打ちつけたのかも知れなかった。

「責様恥ずかしゅうないのか。女に庇われて、それで日本男児か、恥を知れ！」

きつ、と修一郎が軍人を振り返った。

「恥知らずはどっちですか。仮にも帝国軍人が逆らいもせん片輪と腹にやや子がある女を相手にして、何が楽しいのや」

「何……!？」

若い男の顔がみるみる赤黒く染まった。その時である。

「山岡の若旦那さんやおませんか……! 一体どないされたんですか？」

また別の男の声がし、年かさの軍人の表情が動いた。

自転車に跨った中年男である。結はこの男に見覚えがあつた。何度か離れにも来たことがある氷屋で、屋号を三方屋みかたといった。自転車から下り己れの背後から近づいてきたこの男に気づいたか否か、年かさの軍人は若い方に

「そのくらいにしとけ。瑣末な粗相や、ことさらに荒立てることもなからう」

と早口で言うつと、今ひとつおさまりのつかぬげな若い軍人を促して足早に立ち去った。

三方屋は駆け足で近寄ってきて膝をついたままのふたりを覗き込んだ。

「どないしました。あの連中に殴られでもしましたのか」

「な……殴られはせんかったのですけど」

結は涙声で答えた。

「旦那さま、旦那さま……!」

修一郎は眉根をきつく寄せ、奥歯も噛みしめたひどく厳しい表情である。

変に手を着いたのか、すでに手首が腫れはじめていた。

「こらあかん……。骨でもいっとならえらいこつちや」

気遣わしげな三方屋の声に、修一郎が言った。

「すみません、……手を貸してもらえませんか」

「城崎先生のところへ??」

と結が言つのを制して

「家がもう近いですから、そつちまでお願いします」と続けた。

「……わかりました。しっかりとまって下さいよ」

三方屋は修一郎の腕を肩にかけ、空いた手をこの怪我人の脇に差し入れて立ち上がった。

離れに戻った結はばたばたと布団を敷いた。気が急いでいるせいか、手が震え、敷布をきれいになかなか広げられない。

三方屋は寝室まで修一郎を抱えてきてくれた。

「すみません、ありがとうございます」

礼を述べる結の表情も固く、心なしか歪んで見える。額に汗が浮かんでいるのは、夏の気温や忙しく動いたから、というだけではないうだった。

「奥さん、ええから横になってなされ。奥さんもだいぶ具合が悪そうや。わしが先生を呼んで来ますよって」

「いえ、うちはあの、大丈夫ですから……」

そつ言う声もこわばっている。

「結、ええからそのひとに甘えさせてもらえ。……すみません、よろしゅうお願いします」

横から修一郎の声がした。

「旦那さま」

「若旦那さんの言う通りや。腹にお子がおるのでしょう? 何かあったら大事やからな」

すぐに戻りまっさかいな、と男は言い置き、離れから出て行った。

「……………」
結は座り込んだまま、にじるように修一郎に近づいた。

「旦那さま……旦那さま、大丈夫ですか？　うち、どないしたら…

…」
修一郎は腕を上げ、結に触れると言った。

「俺よりおまえや。きつそうな表情かおをして……先生が来るまで、おまえも横になつとれ」

病床の修一郎に促され、ようやく身体を横たえたものの、結の心は一向に落ち着かなかつた。

なぜこんなことになってしまったのだろう。ついさっきまで、あんなに幸せだったのに……

自分のせいだ……、と思うと、涙が出て来た。

なぜ今日という日を選んだのだろう。今日出かけなければよかった。出かけるにしても、足の悪い修一郎についてきて貰うことなどなかつたのに？

考えても詮ないことがぐるぐると頭を廻めぐる。加えて腹が張ってひどく苦しく、子供がどうにかなくなってしまったのではないかという不安に結の心は張り裂けそうであった。

ほどなく玄関の引き戸を開ける音がし、結はあわてて身を起こした。

「かまへん、寝とれ」

寝間に入ってきた城崎は気遣わしげにそう言うと、後からついてきた妻に向かい

「結を診てやれ」

と続けた。

「蹴られたそうやな？　頭は打たなんだやろうな？」

ひどく切迫した声であった。結からは城崎の表情は見えなかつた

が、それは声同様、厳しいものに違いなかった。

「いえ、それは……。結が俺を庇うて下敷きに……」

「防消の若造が、軍隊をかさにきて偉そうにしくさつて……。病人を足蹴にするなど、軍人のやることも思えませんか」

城崎夫婦とともに再び戻った男が、いまいましげに口を挟んだ。

防消というのは警防団のことである。先年、戦時下の地域の防災や警備を目的として組織された団体であり、あの若い軍人は、その警防団に新しく着任した軍属とのことであつた。

「三方屋さんが来てくれて助かりました……。迂闊に口答えしてしもうて、あのままやつたら俺は殴り殺されとつたところや」

修一郎が軽口を言った。が、その笑顔はこわばっており、その場の者も一樣に押し黙つたままであつた。三方屋が修一郎の言葉をどう取つたかはわからなかつたが、結をはじめ修一郎の病を知る者にとっては、それは冗談どころか充分に起こり得た恐ろしい現実だったのである。

修一郎のシャツをはだけて肩の辺りを見た城崎は眉を寄せ、傍らの男に

「三方屋さん、あとで氷を届けて貰えますか？」

と訊ねた。

「承知しました」

男が請けあうのを聞き、城崎は続けて妻に声をかけた。

「結の様子はどうか」

「お腹がちよつと張つてますけど、大丈夫だと思えます……。修一郎さんを庇つて力が入つたのと、今日の騒ぎで動揺したせいでしょう」

弥生はそう答えると結に向かい、
「お産婆さんは本町の坂下さんでしたよね。あとで寄つてくれるよ
う、伝えておきますからね」

と優しく言った。

すみません……と答え、結は背を向け修一郎を診ている城崎にお
そるおそる呼びかけた。

「先生、旦那さまは??」

「左手を捻挫しとるな。骨は大丈夫や。それから膝も打つとるし、だいぶ腫れてくると思うがこれはもうどうしようもないから、うるたえるんやないぞ。ええな」

修一郎の左手首を副木で固定しながら、城崎は振り向かずそう答えた。

どれだけ時間が経ったものか、再び三方屋が姿を見せ、「先生」と声をかけた。

「結さん、お勝手お借りしますよ」

「あ……、うちが」

と言うのを、いいから、と手を振り、弥生が立ち上がった。

「すぐ町立病院に入院の手続きを取る。あそこなら輸血もなんとかなるやろうから??」

「入院なんぞ金輪際ごめんや。俺はここでええ」

城崎を遮るように修一郎が言った。

「??修一郎くん」

「旦那さま……、あ、あの……病院に行かれたほうが……」

結が心配そうに声をかけると、修一郎が吐き捨てるように言った。「病院にはもううんざりや。入院したかてベッドに縛りつけられて寝とるだけやないか。ここにおるのと大差ないわ」

滅多に聞くことのない、尖った声であった。その表情がひどく歪んでいたのは苛立ちのせいか、それとも痛み of せいか……

じんわりと目頭が熱くなり、結は顔を背けた。

「……今は結も普通の身体やない。これからどんどん腹の子も育つて大儀になってくる。ひとりでどれだけのことが出来るか……入院すれば看護婦が修一郎くんの世話をしてくれる。結も余計な心配はせんですむ……」

城崎の押し出すような声に、結は慌てて振り返り、修一郎を見た。城崎の言葉に気づいたことがあったのか、修一郎も苛立ちを露わにしたきつい表情だったのが、困惑を浮かべた頼りない様子に変わ

っている。

「……………」

修一郎が言葉を発する前に、結が言った。

「うちのことなら大丈夫です。うち…………あの、うちで出来ることなら、一生懸命お世話しますから…………！」

「結」

ふたりが振り返り、結を見た。そこへ弥生がいくつかの氷嚢を抱えて戻ってきた。

気休めですけど…………と言いながら、冷たくないように手拭いでくるんだ氷嚢を、修一郎の手首や膝の辺りに置いていく。

「三方屋さんが毎日氷を届けてくれますからね。患部の上に置いたら痛むから、こうやって脇から冷やすようにね」

「はい。ありがとうございます」

「結、ほんまにひとりで大丈夫か？」

城崎の気遣わしげな声に、結ははい、ともう一度答えた。

「僕らはもう帰るが…………なるべく毎日来るようにするし、何かあったら夜中でもかまわんから、必ず知らせるんやぞ。ええな」

「はい、よろしゅうお願いいたします」

結が頭を下げ、修一郎も

「我が仮言つてすみません」と詫びた。

「かまへん。医者は病人の面倒をみるのが仕事や」

城崎は優しく言うど病人の肌布団に軽く触れ、立ち上がった。

ええから休んどれ、というのを、結はふたりを見送りに玄関先までついてきた。

「結、前に僕が言ったこと、覚えとるか」

靴を履きながら、城崎が低い声で訊ねた。

「……………」

「輸血のことや。あの病には輸血しかない」

城崎は結が答えるのを待たずに言葉を継いだ。

「……………はい」

「だが今は、その血が手当ででけん……………」

「……………」

「修一郎くんはもともと数の少ないA B型や。これまでは山岡の使用人や取引先に協力して貰うとったが、本家と縁が切れた以上、それは修一郎くん自身が承知せんやろう。そうなたら自分で探すしかない」

「はい……………」

すつつ、と首の後ろが冷たくなるような感覚を覚えながら、結は小さな声で応えた。

「僕のほうでも探してみるが、結も心がけとってくれ。それから」

城崎は声を響めるようにして続けた。

「修一郎くん、相当に苦しむと思うが……………おまえまで一緒になつて泣くんやないぞ。こうなつたのはおまえのせいやない、おまえが自分を責めても誰も得せんや。修一郎くんもつらいし腹の子にも障る。ええな、わかつたな」

「……………はい……………」

結はうつむくように頷いた。ことさらに城崎が念を押すのが、結には修一郎の厳しい状況を示しているように思えてならなかった。

「あの……………」

震える声で、結が続けた。聞くのが恐い。だが聞いておかねばならない。

「旦那さまは……、まさか、あの……」

「大丈夫や」

口ごもった結に心中を察したか、城崎が励ますような声で言った。「出血もないし、頭も打つとらんといいいな。蹴られたのが腹でなかつたのが、不幸中の幸いや……」

そこまで言うと、城崎はふと口をつぐみ表情を曇らせた。

「……先生……？」

「なんでもない」

城崎は再び結に笑いかけた。そして手を軽く上げると、待たせていた車屋で帰っていった。

傍らには弥生がいる。陽はすでに中天にあり、空は眩しくひどく暑かった。城崎はふう……っと大きく息を吐いた。その表情はひどく疲れて見えた。

「……充三がおってくればな……言うても詮ないが」

「供血者が現れないと、ちょっときついですね」

と、弥生が後を引き取った。

「現れたところで、長い目で見れば手放しで喜ぶこともでけんがな」
城崎は苦笑った。

「結のことも心配や。修一郎くんの具合が悪いところを、ほとんど見たことがないというから……」

城崎は途中で言葉を切り、上を向いて再び嘆息した。

城崎夫婦を見送った結は台所へ向かった。

流しに置いた洗い桶の中には、手拭いを被せた氷が置いてある。

欠いた後の氷は半貫目ほどの大きさがあり、結はそれを氷箱の中に入れた。

離れに奉公に入った当座、結にはこの四角い木の箱が何なのか見当がつかなかった。特に興味も持たなかったし、使ったことも開け

たことすらもなかつたが、ある時どこで手に入れたのか、充三がこの箱からよく冷えた蕨餅わらびを取り出して修一郎に供し、結にも食べさせてくれたことがあって、その時これは氷箱だと教えられたのだ。た。

家事を預かる自分が使いもししていない氷箱の中になぜ氷があるのか、あの時は疑問にも思わなかつた……どこまで自分は、己れのことしか考えていなかつたのだらう。

結は再びあふれそうになつた涙を堪えながら、寢間へと戻つた。

横たわり目を閉じた修一郎は、眉根を寄せた厳しい表情であつた。

「旦那さま」

枕元で小さく声をかける。返事はなかつた。結はしばらくそこに座り修一郎を見ていたが、戸を叩く音に立ち上がった。

やつて来たのは産婆の坂下スミである。スミは小柄で童顔の愛想のよい女で、齡としは八重と同じ頃に見えたが、八重が言うにはもつと年上だということであつた。

スミは丁寧に結を診、話を聞いてくれた。そして結はスミに太鼓判を押され、ようやく安心したのだつた。

「あんたも大変や。無理をするなど言つても無理な話やろうけど、思いつめてなんでもひとり抱え込まんようにな。つらい時はまわりを頼つたらええねんで」

スミの優しい言葉に結はまた涙ぐみそうになつた。まさに今日、自分たちは周囲に助けられたのだと思つた。

「すみません……ありがとうございます」

「お腹のやや子も、もう動き出すからな。お腹を蹴ってきたり、かわいいで」

「……え」

思わず結は顔を上げた。ようやく赤みが差したその頬に、スミは暖かな笑顔で、

「今日はびっくりしたやろうけど、やや子はそない簡単に流れたりしません。大丈夫や。旦那さんも心配しとつてやる、ちゃんと安心

させたりな」と言った。

スミを送った結は、再び台所に行くと水屋を探った。

目当てのものは少し探すと見つかった。水呑すいのみだ。結は先の氷を小さく欠いて入れ、水を注いで修一郎の枕元へ戻った。

「修一郎くん、具合はどうや」

翌日、昼過ぎに現れた城崎は結の顔をみるなり訊ねた。

「それが……」

結は口ごもるように小さな声で答えた。

「もう、つらそうで……えろう腫れて紫色になって……」

「あざになるなら、その方がよっぽどマシやがな」

城崎は歪んだ、奇妙な笑いを漏らした。

「それにあの、右手が上がらんと仰って……」

「右手……蹴られた方やな」

答えるともなく言うつと、城崎は

「腫れはちゃんと冷やしとるか？」

と訊ねてきた。

「はい。今朝もあの、氷屋さんが来てくれました」

「よし」

城崎は答えると、寝間の障子を静かに開けた。

「具合はどうや。痛みは強いのか」

横たわる修一郎に、先と同じ言葉をかける。修一郎はちよつと笑つてみせた。その痛々しい笑顔は、聞くまでもなかるう、と言つているようにも見えた。

城崎が寝間着の前をはだけた。昨日蹴られた肩は胸の辺りまで腫れあがり、紫色の内出血が広がっている。結はそれを見て声を上げそつになった。膝と手首の腫れしか見ていなかったからだ。

「手が……ちよつと……」

修一郎が表情を歪めてうめくように言った。

「痺れとるのか。出血が神経を圧迫しとるんやな」

「腫れはのうても動かんのではほんまにどうしようもない……どう

「た、溜まるんやつたら」

と、結は震える声で言った。

「抜くことはでけんのですか……？ その血は……」

「さつき言つたやろ」

城崎は辛抱強い声で、子供に言うように繰り返した。

「抜いてもまた溜まるのや。そしたらまた抜くのか？ いたちごっ

こには意味がないやろ」

「……それやつたら……」

ややあつて、結が再び口を開いた。まなじりに涙が溜まって今にもこぼれ落ちそうである。

「どないしたら、ええんですか……？ うちらは……何もでけんのですか……？」

「何もでけん。見とるだけや。 供血者を探す以外はな」

耐えきれずうつむいた結に、城崎は

「泣くなと言つたやろう。修一郎くに余計な心配をかけるんやない」

と言つた。それから励ますように肩に手をやると続けて言った。

「修一郎くんはな、子供の時分からこんなことは何度も乗り越えて来とるのや。大丈夫や」

はい……、と答えはしたものの、結の心は晴れなかった。昨日から何度も浮かび上がりその度に沈めてきた、自分のせいだという思いがまた、どうしようもなく心に膨らんで来た。

そつと寝間を覗くと、修一郎は目を閉じ厳しい表情ながら、城崎の訪問で少し気が紛れたのかまどろんでいるように見えた。

結は簾すだれを下げ、陽の光を遮ると外へと出た。

以前作業中に、「お爺ちゃんがA B型だ」と言っていた女の家を訪ね、供血を頼んでみようと考えたのだ。夏の盛りの太陽が、往來をじりじりと照りつけていた。

女は在宅していたが、結がおそろおそろ要件を切り出すと、案の定拒絶と同情がないまぜになった表情になった。

「結さん、悪いけど……」

短くはない沈黙の後、顔も上げられずにいる結に女が言った。

「うちのお爺ちゃんももう年やねん。このところの暑さでしんどそうにしとるし、悪う思わんとって……。旦那さんはそら気の毒やと思うけど……大怪我をして輸血せな助からんとか、そういうことではないのやる？」

「……はい……それは……」

結は消え入りそうな声で、ようやく答えた。

「誰か他に、若い人探して。な？ 悪いね、力になれんで」

「……すみませんでした。急に来て、無理言うて……」

そのまま深く頭を下げると、結はその家の玄関先を辞した。

何か悲しく無性に腹立たしく、胸がむかむかとして仕方がなかった。

女の言うことはわかる。自分が老人の身内なら、やはり同じことを言ったのかも知れない。だが。

確かに命に係わる怪我ではないかも知れない。だが痛々しく腫れ上がったあの体、あの苦しみを見てもそう言えるのか。

強烈な夏の日差しに照らされた明るい往来をうつむき涙を堪えて歩く結を、道行く人は怪訝な目で見送った。

帰宅し新しい氷嚢を用意した結は、それを持って寝間へと向かった。

氷嚢を取り替えても修一郎は目を閉じたままであった。その額に浮かんだ汗を氷嚢を包んでいた手拭いでそつと拭き取ると、結は物音を立てないようにゆっくりと立ち上がった。

寝間を出、立ち去ろうとした時である。

「出かけとったのか」

障子の向こうから声がした。

「あ……。はい……」

「近隣に供血を頼みに行つとったか」

「いえ……」

答えはしたが、震える声はかすれていた。だが修一郎は気づいたか否か、ただ

「そんならええ」

とのみ言った。

「初めからから他人ひとをあてにせなんたら、助けてくれんというて他人を恨むこともないんやからな」

「はい……あの、氷嚢の水を捨ててきます」

やっとの思いで答えると、結は走るようにして台所へと逃れた。

もう耐えられなかった。水屋の前へたり込むと涙があふれた。どれだけ口を押さえても、堪えきれない嗚咽が次々に漏れた。

何でもするのに

何もでけんわ

充三の言葉が、どうしようもなく胸に蘇る。

修一郎が血を吐いた時、うめくようにそう言った充三の気持ちは今こそわかる。

城崎と共に、病に苦しむ修一郎を見つめながら、何度無力感に打ちひしがれてきたのだろう……それを思うと、また泣けてくる。

「……………」

結は口元をぎゅっと引き締めると、手元にある氷を欠いた。

今朝も三方屋は氷を届けてくれた。以前から離れに出入りしていたらしい三方屋はある程度この家の事情を呑み込んでいるようで、最小限のねぎらいや気遣いの言葉以外は口にせず、結にはそれが有難かった。

修一郎が寝ついて三日になる。城崎は「出血が止まれば腫れは引く」と言ったが、それはいつだろう。供血がなくてもいずれ自然に止まるのだろうか、それは何日後のことなのか……。

昨夜、修一郎は傍らに自分の寝具を敷き伸べた結に向かって、「別の部屋で寝ろ」と言った。

「おまえがおつては俺が寝られん」

「……………」

結はこわばった声で答えた。

「うち……………」

「アホか……………」

風邪でも引いたらどないする気や」
修一郎は顔を顰めた。ひどく不快そうな表情だったが、それは多分、半分は痛みのせいだろう。結は

「それやったら、そばにおらせてください……。お邪魔にならんよ

う、気をつけますから……」

と、再び言った。

結は何かというとすぐに泣く気弱く頼りない女だが、どうしてもなかなか強情な一面を見せることもあり、この時もしつこく食い下がった。

「結、おまえは」

苦しげに表情を歪めたまま、修一郎が唐突に問いかけた。

「おまえは、俺がおまえの子供でも一緒におれるのか」

「……え」

思わず聞き返す。修一郎が何を聞いているのか、その意図を量りかねた。

「子供は痛みを我慢でけん。動かんように縛りつけられたまま泣きわめく子供のそばに、おまえはおれるのか」

「」

結は答えを失った。以前の結なら、即座に「おれる」と答えたとだろう。だがこの数日で、結には修一郎の言葉の意味がひしひしと骨身に沁みてわかったのだ。

おとなの修一郎が痛みに耐えるさまでさえ、結には痛々しく目を背けたくなるものだった。

ましてやそれが腹を痛めた幼い我が子なら 自分には、その苦しみに寄り添って、一緒に耐えることが出来るのか。

子供が出来たとわかった時、修一郎はぼつりと自分の生い立ちを話してくれたことがあった。母親に愛されず育ったこと、今でも母親を許せずにいること。

生まれてくる子供には、自分のような思いはさせたくない。同時に結にも、自分の母親と同じ気持ちを味わわせたくない……修一郎はそう言ったはずだ。

あの時自分は何と答えただろう。何も知らず、なぜああも偉そうに一人前なことが言えたのか。そしてこのひとは、自分の答えを聞いて本当はどう思ったのか……あの時の自分を、消せるものなら消

し去ってしまいたい……。

「……うちは」

消え入りそうな声で、ようやく結が答えた。

「今はわかりません……そばにおれるかどうか……。そやけどうちは……、必ずそばにおってやりたいと思うてます……」

結は修一郎の言葉を待った。だが修一郎は、もう何も言わなかった。

「……結、なんやその顔は……」

翌日現れた城崎は、結の顔を見るなりそう言った。

「すみません……お見苦しゅうて……」

結は情けない声で詫びた。同じせりふを聞くのは朝からこれ度目だ。最初に修一郎、その次には三方屋、そして今は城崎にまで、同じことを言われてしまった。

今朝目覚めると、ひどく瞼が腫れていたのだ。ものが見づらく違和感があり、鏡を見る前から腫れているのが自分でもはっきりとわかった。泣きながら寝入って瞼を腫らしたのはこれが初めてではなかったが、今回は特にひどい。

「朝から氷水で冷やしたりしとるんですが、なかなか腫れが引かんで……」

「気になって触ったり擦ったりしとるのと違うか？ そつとしかかんとあかんぞ。あと冷やすばかりやのうて、温めるのと交互にやってみい」

城崎は医者らしく具体的に助言した。それからいつものように、修一郎の様子を聞いてきた。

「昨夜も一晩中つらそうにしとられて……ほとんど眠っておられんです」

「それでおまえも一晩中泣いとったのか。一緒になって泣くなと言ったやろ」

「……………」

すみません…………、と、結は口の中で小さく言った。

「食事はどうや。何か食べとるのか」

「それが……………」

結は言葉を濁した。

「…………痛みがきつうて食事どころやないのはわかるが……………」

城崎の表情も翳った。

「食わな身が保たん。ましてや修一郎くんは、元々体力もないんやからな」

それから顔を上げ、

「修一郎くんを診に行こう」と言った。

「寝られんそうやな」

城崎が話しかけた。

「久々にこれは…………ちよつと、きついです……………」

どうにか笑って見せながら修一郎が応える。

一通りの様子をあらためたあと、城崎が鞆から金物で出来た小さな箱を取り出した。中には注射器が入っている。次いで城崎はアンブルを取り出すと、中の薬液を注射器に吸い上げた。

「これくらいしか、してやれん」

注射を打ちながら城崎が言った。痛み止めである。

「このままではきみも結もまいってしまふやろ。気は進まんやろうが、本家に事情を打ち明けて、頼ることも考えた方がええ」

修一郎は今度は目を閉じ、眉根を寄せたまま答えなかった。

「イヤやと言つても、僕が連れてくるからな。打つ手があるのになれ以上、患者が苦しむのを見過ごすことは僕にはでけん」

それは医者としての、城崎の宣言であった。

「先生、すみません……。あの、ありがとうございました……」

客間で結が城崎に冷たい茶を差し出した。城崎はふうつ……。と溜息をついた。

「勘当したかて息子は息子や、本家も首を横には振るまい。状況はそれこそ痛いほどわかるやろうしな」

そう言いながら、城崎の表情は今ひとつ釈然としないものであった。主治医として長らく修一郎とその家族に接してきた城崎には、修一郎と家族の係わり、そしてそれぞれの心中もよくわかつていたのである。

「あの……。うちも探してはみたんですけど……」

結が言い訳をするような、おずおずとした様子で言った。

「断られたか」

「はい」

「この近所なら沼田の爺さんやな。あのひともしもつええ年やし、無理はない。この夏は大儀そうにしとるしな……」

みんなきついものや……。と、誰に言うともなく城崎が呟いた。

「あの……。痛み止めが効くんやったら……」

しばらくして今度は結が切り出した。

「毎日打ってもらうことはでけんのですか……？ そしたら……旦那さまも少しはラクになるんやありませんか……」

「あれはモルヒネや」

「モルヒネ……」

「結は知らんか」

「城崎が続けた」

「モルヒネは麻薬や。よう効くが副作用がある。使い続ければ当然中毒にもなる。効くからといって、気軽に使える薬やないんや」

しばらくは楽になるはずだから何か消化のよいものを食わせてやれ、それからゆっくり寝かせてやれと言い置き、城崎は帰っていった。

城崎を送った結は寢間に戻った。

「旦那さま……」

小さく声をかけると、修一郎が目を開けた。

「腕がだるうてかなわん。さすつてくれ」

はい……、と答え、結は修一郎の傍らに座った。痺れたままだという右腕を膝の上に取り、ゆっくりと撫でるようにさすりながら

「……痛み止めは、あんまり効いておらんのですか」

と訊ねた。

「いや」

再び目を閉じ、修一郎が答えた。その声はこれまでの張りつめて尖ったものではなく、どこか所在なげな儂さを帯びていた。

「よう効いとる……さっきまでの、腹が煮えそうな痛みがウソみたいに……」

「そうですね……よかったです……」

「そやけど、痛だるいにはあんまり効かんようやな」

目を閉じたまま、修一郎は小さく言うと少し笑った。

「おまえの手の方がよっぽど効く……」

結は充三の掌を思い出していた。泣き暮らしていたあの頃、自分の心と体を揉みほぐしてくれた厚く温かな掌。あの優しい掌に癒され慰められたことが、修一郎にも何度もあるはずだ。

「……………」

痛みに耐えかねて泣き叫ぶ子供の側におまえはいられるのか、と訊ねた修一郎、そのとき結の脳裡に浮かんだのは、たったひとり、誰もいない部屋に寝かされて泣いている子供の姿だった。そしてそれは、幼い修一郎自身の姿に違いないのだ。

そうであれば、修一郎がひとの温みをはじめて知ったのが、充三の掌によってではなかったとなぜ言えるだろう……。

「充三に手紙は書いとるのか」

「あ……、はい」

結は我に返った。そんなはずはないのに、心の裡うちを読まれた気がして頬が熱くなった。

「書いとるのですけど……なかなか返事がのうて……」

「大変なんやろ、あれも……。物見遊山に行つとるのは違つからな……」

修一郎が寝ついて以来、こんな風に穏やかに話せるのも初めてのことだ。結は痛み止めを心底ありがたいと思った。

「充三がおつてくれたら……」

言うまいと思っていたのに、つい口から零れてしまった。修一郎は応えなかった。眠ったのかと手に取った腕をそつと置き、結が立ち上がるうとしたとき、修一郎が口の端で少し笑った。それからひとりごちるように言った。

「あれも山岡に来たばかりに、俺の輸血の容れ物代わりにされて……難儀なことや」

結はふと不安になった。修一郎はこんなことを言う人間だったろうか。

結はまた座り直し、再び修一郎の腕をさすった。

「そんなこと……。充三は旦那さまのこと、それはお慕いしとるのです。お役に立てて喜んどるはずや」

「あれはアホや……頭はええくせにな」

修一郎は目を閉じたまま言った。

「自分の体におかまいなしに血を抜かれて、喜ぶアホがどこにおる……俺はあれの血を吸うて生きてきたようなもんや……」

「旦那様……もう」

おやすみになった方が……、と言いかけた結にかまわず、抑揚のない、どこか夢を見ているような声が続ける。

「俺は何のために生まれたのや……他人ひとの血を吸うて……何のために……痛い、きつい思いをするために……」

何もでけん……どこにも行けん……ただ息をしとるだけで……それでも怖^{こお}うて、自分では死ねん」
結は耳を塞ぎたかった。これ以上、修一郎の血を吐くような告白を聞きたくない。

それでも　と、結は唇を噛んだ。修一郎が、これまでひとり胸の底に押し沈めて来た思いを吐き出そうとしている……自分はそれを受け止めなければならぬと思った。

だがようやく出て来たのは、月並みな言葉であった。

「……そんなこと……言わんで……」

消え入りそうな声で結は続けた。

「自分のために生きられんのやったら……うちと、子供のために生きて……。充三かて……どれだけ旦那さまを思うとるか……」

修一郎はふと目を開けた。

「今はそんなこと、考えてない……これは昔の話や」

涙ぐんだ結を見、不思議に優しい笑顔でそう言った。それからまた目を閉じた。今度こそ寝入ったようである。

あれは麻薬が言わせた言葉だ。それは結にもわかつている。だが結には、あれが紛うことのない修一郎の本心だということもわかった。

修一郎はどのくらい眠っていただろうか。結は気にかけてたびたび寝間を覗いていたが、日が翳りだした頃、修一郎が目覚めているのに気づいた。

「旦那さま、お目覚めですか……？ 具合はどうですか」

「うん。……大丈夫や」

修一郎は小声ながらはつきりと答えた。痛み止めが切れ始めたのか少し眉根を寄せてはいたが、久々に痛みから解放されぐっすりと眠ったおかげでか、その表情は大分にすっきりとしている。

「あの、少しでも何か召し上がりませんか？ 冷たいものを用意してとるのですけど」

と結が訊ねると、これまでは不快そうに首を横に振るだけだったのが、「うん」と短く応えたので、結の表情もぱっと明るくなった。「すぐにお持ちしますから」

そう言つと、結は病人を気遣い静かに立ち上がった。

匙の上でかすかに乳色を帯びたやわらかそうな塊が、涼しげに震えている。蕨餅に見えたそれを、結は慎重に仰臥したままの修一郎に含ませた。

冷たくなめらかな舌触り、ほのかな甘みに修一郎は少し微笑んだ。

「これはカタクリか」

「はい」

結はまたひと匙すくいながら頷いた。

「葛か蕨粉でもあったら良かったんですけど……片栗粉しかのうて」

「懐かしいな……子供の時分には、冬にはよう食べたもんやが」

「葛湯みたいにしてですか？」

うん、と修一郎は答え、

「そうか……夏に固めて冷やすと、こんな風になるんやな」

と言つて笑つた。修一郎がものを口にしてくれただけで結も嬉しく、ほつとした。

以前充三が供した蕨餅を機嫌良く食べていたのを思い出し、あるいはと修一郎が寝ている間に作ったのだ。大事にとつて置いた砂糖も奢つた。喉ごしを考えて白蜜にしてカタクリにかけたのだが、修一郎はそれも気に入ってくれたようだ。

「充三がどこぞでか蕨餅を貰うて来たことがあつたな」

修一郎も同じことを思い出したらしく、ふとしたようにそう言つたが、結はそれを聞き、一瞬心臓をぎゅうつと掴まれたかのように感じた。思わず顔を伏せるようにして病人を盗み見たが、そこには別段の色もなく、結は何とはなしにほつとした。

多分修一郎は、寝入る前に自分が何を言つたのか、あるいは何かを言つたことさえ、覚えていないのだろう……そう思つた。

「はい、うちも……思い出して、それで」

再び笑みを頬に浮かべ、結はそれのみを応えた。

その時玄関を開ける音がした。

「先生……あの、どないかされたのですか……？」

玄関先に城崎の姿を認め、結は不安げな声で訊ねた。城崎は常にない大きさの往診鞆を下げていた。

「ちよつとな……」

城崎にはめずらしく、曖昧に答えると

「修一郎くん、どうや？」

と、今や挨拶代わりとなつた言葉を再び発した。

「あ、はい。痛み止めがよう効いて、さっきまで寝とつてでした。

あの、ちよつとですけどカタクリも口にされて……」

「そうか」

笑顔ながらどこかよそ事のような風情でそう答えると、城崎は「この後客がある。何時いつになるかはわからんが、若い男や。来たら寝間の方に通してくれ。何も聞なんかんでええからな」と言い置き、寝間へと向かった。

「……………」
客がある、と言われたからという訳でもなかったが、結は三和土に下り、戸口から外を見た。急に辺りが翳りだしたのは、時刻のせいのみではなかったらしい。重たげな雲が空を覆い始めていた。ついに暗雲から大粒の雨が降り出した頃である。勝手口を叩く者があつた。

慌てて結は応対に立った。果たして客は若い男で、雨とはいえこの暑い夏に、長袖の黒っぽい合羽を羽織っていた。

「こちらは山岡さんのお宅ですか？ 城崎先生が来ておられると思うのですが」

合羽を脱いだその男は年の頃は二十歳かそこら、声にも落ち着きがあり、髪は短く刈っていたが色白く極めて知的な風貌で、百姓や職工の類でないことは一目で知れた。

「はい。どうぞこちらに」
言われた通り、結は何も聞かず男を寝間へ案内した。

寝間には修一郎のもの他に、結のものではない布団が敷き伸ばられてある。先に城崎に言われ、結が敷いた客用の寝具だ。吸香と薬湯を満たした小ぶりの薬缶やかんも枕元に置いてあつた。

「お待ちしました。どうぞ」
城崎が座つたまま男を誘こびなつた。

「結、もうええぞ。用があつたら呼ぶから下がつとれ」
城崎は続けて言った。はい、と答え、去り際にちらりと傍らを伺つと、男のいささが緊張した面持ちが目に入った。

城崎が結に声をかけてきたのは、一時間半ほども過ぎた頃だつたろうか。

城崎は男について、起きてくるまで寝かせておくように、それか

ら余計なことは何も聞くなと繰り返し、雨の中を帰っていった。

男が結の前に顔を見せたのは、もう夜中であった。

「奥さん、すみません……すっかり寝入ってしまった」

居間の障子の向こうで、いささかうろたえた声が出た。

「あつ、すみません、お目覚めでしたか」

結も慌てて障子を開けた。

「今日はほんまにありがとうございました……あの、もしよかったら」

と、結は夜目にもわかる紙のように白い男の顔に言った。

「朝までお休みになって行かれませんか？ 客間に夜具を用意しますから、それと何か、夜食も」

いえ……、と男は少し笑うと答えた。

「身内でもない者が、ご主人が床に伏せておられるお宅に泊まるなど、とんでもないことです。遅うまでお邪魔し、その上お気遣いまでいただいて申し訳ありませんでした」

「……あの、これくらいしかでけんですけど」

玄関へと男を案内した結は、雨具に袖を通そうとしている男に声をかけると、手に持っていた布袋を手渡そうとした。

「これ、持って行ってください……」

男は薄暗い玄関の明かりにすかさずに結を見、それから結が手にした布袋を見た。口を紐で縛ったそれは大きさもそこそこあり、ずっしりと重そうである。

「奥さん」

男は結に、静かな声で言った。

「そういうお気遣いは無用です。供血は僕なりの思惑があつてしたことや。ほんまのところ、自分のためにしたこと、ご主人を思うてのことではないですから」

「それでも」

結はなおも続けた。

「そちら様のお考えがどうでも、こちらが助けて貰ったことに変わりはありません。どうか持って行って……精一杯の、こちらの気持ちなんです」

「……………」
それでも男はためらう素振りを見せたが、結は構わずその手に押しつけるようにして袋を持たせた。手触りから中身が米であることが知れる。男は困ったような表情になったが、そこまでされて素直に受け取った。

「すみません……ありがとうございます」

布袋を大事そうに脇に抱えるようにすると男は戸を開け、小さく頭を下げた。

「どうかご無事で……」

男は少し微笑んだようだった。出ていくと再び頭を下げ、静かに引き戸を閉めた。

徴兵逃れ……。

結にももう、あの若い男が試みようとしていることの見当がついていた。

多分学生なのだろう。元々学生は徴兵を猶予されていたが、先年からそれも次第に撤廃されていたのである。

徴兵逃れが良いのか悪いのか、それは結にはわからなかった。郷里では貧しく若い働き手が次々に戦に取られていたから、裕福に育ったであろう学生が優待されていることに不満がない訳ではなかったが、充三が戦地へと去った今、誰も戦では死んで欲しくない……というのが結の率直な思いであった。

ましてや修一郎のために供血に応じてくれた男である。真意がどうであれ、結にはただありがたかった。名も知らぬ、もう二度と会うこともなからう男の無事を、結は手を合わせて祈った。

39 / 昏(くら)い夏8 (後書き)

こんばんわ、いつもお読み下さり、ありがとうございます。

エントリーしてありましたアルファポリスの「第三回恋愛大賞」も、
いよいよ本日で最終となりました。

応援下さった皆様、どうもありがとうございました。

今回の更新で、本章もお終いです。

どうにかキリ良く終わることが出来、ほっとしています。

大賞終了後はまたカメの歩みの如き更新速度に戻るかと思いますが、
よろしければ今後もおつきあい下さいますよう、お願い申し上げます。

期間中の応援、重ねてありがとうございました。

二つまでのあらすじと登場人物紹介（前書き）

大変ご無沙汰しております；

ようやくどうにか連載も再開できそうです。見捨てずお待ち下さっていた皆様、どうもありがとうございます。新しくこれから読んでみようかという皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

えと、それで……

前回投稿時よりえらく長い間が空いてしまったので、再開に先立って、「これまでのあらすじ」をつけてみました。

「以前読んでたけど、もうお話は忘れちゃった」

「これから読んでみようかと思うけど、最初から読むのはメンドクサイなあ」

という方がおられましたら、ぜひご活用いただければと思います（笑）。

では、改めまして、今後とも「恋恋記」をよろしく願い申し上げます。ヽ(´▽｀)ノ

ここまでのあらすじと登場人物紹介

<ここまでのあらすじ>

昭和17年、春。

貧しい小作の娘、結は、徴兵検査のために帰郷した幼馴染の充三の誘いを受け、これの奉公先である山岡修一郎の許へと奉公に出る。修一郎は一带の大地主の長男だったが、病身を理由に弟に早々に家督相続を譲り、ひとり充三のみを連れて家を出て、離れで世を厭いひっそりと暮らしている男であった。

またこの男は嗜虐癖の持ち主であり、それを承知の上での奉公だったが、辱めは耐え難く、結はふたりの男を恨んで泣き暮らしていた。なぜ自分をここへ連れてきたのか、修一郎のためか？と問われ、「旦那さまと、それからおまえのためにもなると思った。そして自分も、おまえといたかったから」と答える充三。

幼い頃から働きづめで、ろくに小学校にも通えなかった充三に読み書きを教えたのは修一郎である。ふたりの間には他にも係わりがあり、充三は修一郎に対し、言葉に尽くせぬ恩義を感じていた。

田舎の旧家に似合わぬ合理的な考えを持つ上に、生まれつきの病身を抱えた修一郎は、孤独でいびつな男であった。

充三と結 このふたりは互いにほのかな思いを抱きあっていたが、それゆえに充三は、主のその孤独と欠けた部分を、ほかならぬ結が埋めることを願っていたのである。

三人の暮らしに変化が見えなかつたかけは、修一郎の吐血であった。恐ろしく冷血な主人でしかなかった修一郎の弱々しい姿を見たとき、結の中で何かが変わった。

また修一郎も、そんな結に初めて心を動かされる。

充三はそんなふたりを、自身の気持ちを押し隠して見守っていた。

冬になり、修一郎は結に仕立てを習わせる。師匠は八重といい、噂好きだが気のいい女で、結の良き理解者となった。

明けて正月、修一郎は結のために晴着を誂え、充三には自身の着物を下げて三人で写真を撮る。

新参の写真屋に「ご家族ですか？」と訊ねられ、笑って「そうだと答える修一郎。

それは家族に恵まれなかった修一郎が得た、かりそめの家族であったかもしれない……。

修一郎と充三、そして結の、奇妙で静謐な正三角形。しかし不思議な均衡を保った三人の暮らしは、充三に届いた召集令状によって終わりを告げる。

入営のために帰郷する充三を見送ってやれ、と結に言う修一郎。自分は修一郎のものだ、という気持ちがありながらも、充三への思いに突き動かされ、郷里へと走る結。

驚きながらも修一郎の言葉を聞き、結を抱きしめる充三。

「おまえの、結を貰う」「いつかの修一郎の言葉が胸をよぎる。それが本気の言葉なら、今夜一晩、結を自分に返してくれたのだと充三は思った。

後見人の伯父夫婦の気遣いで、最後の夜をふたりで過ごせることになった充三と結は熱く抱き合う。

翌朝、充三を見送り帰宅した結は、思いがけず寂しげな修一郎の様子に胸を衝かれる。

その夜、修一郎に抱かれた結は、唐突にこの男の本質を悟る。そして自分自身についても……

一月あまりの後、結の妊娠が発覚する。

誰の子かと問われ、咄嗟に修一郎の子だと答える結。他意はなく、

ただ、なぜか修一郎が喜びそうな気がしたからだだったが、修一郎、そしてその場に合わせた医師の城崎の表情は厳しいものだった。その理由を、自分が百姓出の女中だからか……？と問うた結は、城崎から、修一郎の病が原因も治療法もわからぬ上に、命に係るものだということを知ることがされる。

修一郎の家族、特に母親に対する複雑な思いを知った結は、改めて修一郎の孤独に気付く。

結の腹の子を自分の子と思い定めた修一郎は、結との祝言を報告に本家へ出向き、勘当される。

動揺する結に対し、「これが一番八方が丸く収まる方法なのだ、俺は今日ほど親をありがたと思ったことはない」と言う修一郎。

身近な人々に祝福され、ささやかながらも幸せな新生活を始めたふたり。だが夏のある日、通りすがりの軍属に言いがかりをつけられ修一郎が蹴られたことから、影が差す

<登場人物> 年齢は初登場時のものです

田川結：17歳。貧しい小作の娘。充三に勧められ、修一郎の許へ奉公に入る。

素直で従順だが強情な一面も。充三の幼馴染みであり、仄かに思いあう仲。

五百蔵充三…
いむろく

20歳。山岡家の奉公人。今は修一郎ひとりに仕えており、これを心から慕っている。

賢く誠実な人柄だが、言葉は少なく感情もあまり表に出さない。

山岡修一郎…

充三の3 - 4歳上。充三と結の主。

大地主の長男だが、家督を弟に譲り隠者のような生活をしている。

不治の病を患い、聡明伶俐ながら鬱屈を抱えている。嗜虐癖の持ち主。

城崎… 町の診療所の医師。修一郎の主治医であり、つきあいも長く深い。

修一郎や充三に信頼されている。

八重… 結の仕立ての師匠。町の老舗であり、山岡家と懇意の呉服屋、「ささ屋」の針子。

寡婦。口は軽いが、人柄がよく面倒見もよい。

スミ… 産婆。

山岡喜重郎・嘉寿子・敬次郎…

修一郎の両親と弟。一帯の大地主。

夏の盛りに闘病を強いられたのが元々弱い身体にほどに堪えたのか、秋の声を聞いても修一郎の体調は回復せず、病床に起き伏しするようになった。戦局を告げる新聞やラジオでは相変わらず勇壮な文言が踊っていたが、それが次第に厳しさを増していることには、誰もが気付き始めていた。

それでも離れでは明るい話題もあつた。次第に翳る日々の中にも、結の腹の子は順調に育っていたのである。

その日は修一郎も加減が良く、縁側で読書と穏やかな日差しを楽しんでいた。

炎天の夏にはどことなくしおたれて見えた生け垣の緑も優しく瑞々しく、空は青く高くどこまでも晴れやかで、戦の影など感じられない昼下がりである。

「あ……」

と、薬湯を持ってきた結が小さな声を上げた。

「今、やや子が……」

修一郎が眉を上げた。結は単の着物に割烹着を重ねていた。この頃は外に出る時はもっぱらもんぺ姿だったが、これを修一郎が嫌ったため、離れにいる時は結は着物であることが多かった。割烹着の上から腹に触れてみたが、しっかりと腹帯を巻かれたそこは固く守られていた。

「これではわからんな。身のうちのことは母親にしかわからんやろうな」

そう言つて修一郎は笑つたが、結は少し残念そうな表情になつた。以前から胎動を感じることもあり、それを修一郎にも伝えたいのだが、どうもうまくいかないのだ。

だが修一郎は結の言葉だけで存外に満足したようである。その笑

顔は優しかった。

夜になり寝巻きに着替え、布団に入ろうとしていた結がまた声を上げた。腹帯を解くと、

「旦那さま、旦那さま、触って……！」

そう言いながら修一郎の手を取り己の腹に押しつける。修一郎は手を掴まれ一瞬眉根を寄せたが、結のするまま、そこに掌を這わせた。

しばらくそうしていたが、やがて、

「あ……！」

と、声を上げた。

「動いとるの、わかりますか……？」

結が嬉しそうに問いかける。

「うん」

答えた修一郎の声も明るく嬉しげであった。

「ようわかる。……ほんまに、ここに子供が……」

修一郎は結を抱き寄せた。後ろから抱きとめ、両手を添える。結はその手におのが掌を重ねた。温かさがじんわりと、肌と心に広がった。

修一郎も久々の結の重みと体温に、何かを感じたらしい。やがて手を上げると、襟元から手を入れ、結の乳房をまさぐった。

「……っ……」

結の体に戦慄が走り、息が声となって唇から零れる。修一郎も我知らず声を上げそうになった。

ぼつてりと重く熱く、一年前の、芯のある薄いそれとはまるで違う、とろけそうに柔らかかな乳房。

一年前の結とは違うのだ……改めてそう思った。

確かめるようにゆっくりと揉むと、結がまた小さな声を上げた。

その声が妙になまめかしく、修一郎の中心がびくりと震えた。

「おまえの腹に子がおらなんだらな……久しぶりに……」

修一郎は最後まで言わず、冗談めかして笑ったが、

「……旦那さま……、あの……」

と、結はなぜか首筋まで紅を刷いたように赤くなりながら口ごもった。

「うん？ なんや？」

問われてもしばらくは恥ずかしげに黙っていたが、やがて

「あの…… スミさんが……、やや子ももうすっかりしてくる時期やから…… ちょっとだけやったら、旦那さまに可愛がって貰うてもええと……」

そこまで言うと、結は顔を伏せてしまった。その頬は真っ赤に染まっている。修一郎は少し驚き、呆れたようでもあったが、

「……今時の産婆はそんなことを言うのか」

と言うと片頬に笑みを浮かべた。

「そうか。せつかくのお墨付きや。そんなら遠慮のう、やらせて貰うかな」

結の寝巻きの紐を解くと打ち合わせがはだけた。思わず掻き合せようとすると結を制すると、修一郎は

「手を、後ろに」と言った。

「……………」

修一郎の意図を察した結はためらったが、やがておすおすと両手を後ろに回した。

その手首を、結の寝間着の紐で縛る。

結の唇から息が漏れる……。

修一郎の縛めは充三のそれとは違い頼りないほどだったが、それでも結の官能を呼び起こすには十分であった。羞恥と快感にすり替えられた苦痛の記憶が蘇り、結の頬を染めた。

修一郎は顔をそむけた結には構わず、結の打ち合わせをつるげると、それを肩から落とした。

ほの暗い明かりの下に、久々に見る結の裸身があった。光線の具合もあるのだろうか、見慣れたはずの結の体がまるで別人のその

ように感じられて、修一郎は小さく息を呑んだ。

たった一年半前、結は痩せこけた幼い体つきの小娘だった。栄養の足りない、若い娘とも思えないかさかさとした荒れた肌をしていた。その結を磨き上げたのは充三だ。どんな手管を遣ったかは知らぬ。自分はある頃、結のことは充三に任せてほったらかしだった……。

祝言を挙げた春先の結とも違う、どこか透明感を増した肌には内側から照り映えるような艶があった。

これまでに修一郎が買った女はいわゆる玄人で、中には荒れた肌の女もいないではなかったが、おのが体は商売道具と心得、しっかりと手入れをしている者がほとんどであった。

だがそんな女達も、今の結のような肌ではなかった。

夜の冷気にぶつぶつと粟立った有り様も生々しく妙に艶めかしい。

「あ……、あんまり見んでください……。うち、……は、恥ずかしゆうて……」

そう言いながら身を擦って修一郎の視線から逃れようとするのを、修一郎は露わになった肩を掴んで押し止めた。

「おまえはまだそんなことを言うところのか」

「そやかて、な、なんやあの……」

肩を掴まれ、向かいあつて肌を晒したまま、結は口ごもった。

「お腹も大きゆうなるし、……あの……それに……みつともない……」

結は最後まで言えずにうつむいてしまった。その様にもたまらない色気があった。

「俺は青臭うて棒きれみたいやった去年のおまえより、今のほうがよっぽどそそられる」

そう言うつと修一郎は笑った。顔を近づけ結を覗き込むように口づけし、ゆっくりとその身を夜具に横たえた。

41 / 借目2 (前書き)

このパートには性的な描写が含まれます。

「あ……明かりは消して下さい……」

「アホか。明かりを消したら何も見えんやろうが」

泣きそうな声でそう言った結の言葉を、修一郎は一蹴した。「
灯火管制の中、明かりが漏れないように雨戸はしっかりと閉^たてて
ある。これで手元の明かりまで消したら修一郎の言う通り、寝間は
真^まつ暗闇になるはずだった。」

修一郎は結の自身も横になると、利き手で結の乳房の感触をひと
しきり堪能した後、ゆっくりとその掌を下へと滑らせた。

丸く張った腹を結は恥ずかしかつたが、修一郎には好ましかつた。
そんな気持ちも、愛しさがこみ上げてきたことにも、修一郎は我事
ながら不思議な気がするのだった。

結は小さく体をのけぞらせ、恥ずかしげに身を振りながらも、修
一郎の掌を受け入れている。やがてそれは結の下腹の辺りまで下り
てきた。腿の付け根に割り入ろうとするのを、結は一瞬腿を固く閉
じて拒もうとしたが、すぐに力を抜いた。

まさぐったそのも以前とは違う……。久々に触れたそこはいつの
間にか柔らかくほころび、文字通りとろけて熱かつた。

母親になるのだ……この娘が。そう思った。

同時に、自分は父親になるのだ、とも。

今まで知らなかった切なさ、修一郎の胸をさざ波のように満た
した。

「結……」

名を呼び、再び口づける。

結は口を開き、修一郎を受け入れた。久々のことで、結の官能も
高まっているらしい。

さあ、どうしたものか……。

と、修一郎は自身も高まっていくのを感じながら、頭の片隅で思

った。

まさか上からのしかかるわけにもいくまい……。

結が母を求める子供のように身を寄せてきた。横を向いた、そのまま抱きしめる。

「……結。これなら、つろうないのか」

結はこくりと小さく頷いた。腹が大きくなってきたといつても、まだ抱きあえないというほどではない。

「紐を解いてください……お願いします……。手が、使えません……」

「使えんで何か困ることもあるのか。こういうのも久々やろう。俺ではもの足りんやろうが」

結の言葉を、修一郎が一蹴した。その声音は以前の懇願を退けるそっけないものではなく、どこか茶目つ気をさえ感じさせる温かなものであった。

結の頬がいつそう熱を帯びる。

「そやかて……うち……、だ、旦那さまに……」

曖昧に語尾が消える。修一郎の指に感じたのか、甘い息を吐きながら、結が腿を絡めてきた。

横向きのまま、修一郎はゆっくりと結の内に己がものを押し入れた。

「ああ……!!」

と、息を引くように上がった声も艶めかしい。

修一郎の胸には、なぜだか郷愁のようなものがせまってきた。

夕暮れの空に泣きたくなるような。世界にたったひとりぼっちの孤独。だけどきっと、誰かが待つてくれている……。

実際に夕暮れの町に一人取り残され、帰り着いた家の灯りの暖かさに安心した経験など一度もないのに。

「結」

再び名を呼ぶ。ゆっくりと動くと、思いもたゆたい零れそうになる。

今の結は修一郎の胸中など、思うことすらできないようだ。ただ、己の感覚に集中しているように見えた。修一郎には、そんな結も愛しかった。

「お願い……解いて……。もどかしゅうて」
「そういうのがええのやる？ もう、こないになつて……」

いやあ……と、小さく呻くように言うと、結はいつそう身体を擦りつけるようにしてきた。

このかたちでは浅くしか繋がれない。修一郎は物足りなさを感じたが、腹に子供がいることを考えればその方がいいのだろう、と思い直した。

熱く包み込んでくる感覚も以前と違って思えるのは、久しぶりに交わったせいだろうか。相手を気遣いながらの交情はどこかもどかしく、気ままなそれとは違う感覚を修一郎に与えた。

結も充分に感じているようだ。それも修一郎には不思議だった。以前の結は愛撫や責めには声を上げて、一旦繋がってしまったと、どこかしら醒めていくようなところがあつたのに……。やはり子供を宿すと、体のそんなところさえ変わってくるのだろうか……。

女は、不思議だ……。改めてそう思った。

結がまた、切なげに身を揉んだ。

「うち……、うち……」

「何や、結」

そう問いかけても、返ってくるのは小さな意味をなさない声だけ……。結が自分の動きにあまりに鋭く反応するのに、修一郎はちいさな不安を覚えた。

腹の子がどうにかなってしまうのではないか……そう思うほどの乱れようだ。

「……結」

たまらず呼びかける。だが結はもう、身をよじり嬌声を上げるだけだ。そうした結に、修一郎の官能もまた押し上げられる。

結の滑らかな腿と腰が、強く絡みついてきた。もう少しこのまま、

久しぶりの結を味わっていたい……そう思いながらも、修一郎もおのが拍動に集中し始めた……。

ふと、目が覚めた。結は寝間の暗がりのなかで身じろぎした。

どれだけの時間が経ったのか、雨戸を閉てた寝間の中では時刻もわからない。先には縛められていた手も、いつの間に解かれたのか自由になっていた。手元のスタンドの明かりも消えていて、自分にそうした覚えがない以上、修一郎がみな始末をしたのだ、と気づき、結の頬に血が上った。

そつと寢床を抜け出ようとすると、まだ繋がったままだった修一郎も目を覚ました。

「すみません、起こしてしまいましたか……。今、お湯を汲んできませんから」

そう言つと、物憂げな様子で

「湯？　なんでや」と問いが返ってきた。

「……汗やらで気持ち悪くないですか。あの、寝間着の替えも……」「かまへん、ばたばたするな。寝とけ」

修一郎はそう言いながら、結を留めるように、これに廻した腕に力をこめてきた。

「……………」
旦那さまは変わった……。

結もまた、そう思った。

汗やその他の体液のねばつく手触り、体臭といった生々しいものを、以前の修一郎は嫌っていた。今もきつと、好きではないに違いない。だがそうしたことを以前のように、神経質に気にしなくなったのだ。

何かと行き届かない自分に対する、修一郎の気遣いなのかも知れない……、そう思い至った時、結の胸に熱いものが染み渡った。

おずおずと自由になった手を修一郎の背中に廻すと、修一郎の手

が上がった。それは結の髪を撫でるようにまさぐると、手の中の頭を引き寄せるようにして自分の胸に凭せかけた。

42 / 惜日3 (前書き)

大変ご無沙汰してしまいました；

見捨てずお訪ね下さった皆様に、まずは感謝を捧げます。

ぼちぼちでも続けたい所存です。今後とも、どうぞ温かく広い心でお見守りいただけたらと思います。

それからひとつ、お知らせとお願い。

今年もアルファポリスネット小説大賞にエントリーしました。

昨年までは「恋愛大賞」にエントリーしておりましたが、「時代・歴史」が本編の本来のジャンルですので、今年は「ドリーム大賞」に参加です。

会期は6月中の1ヶ月間です。なかなか更新もままならないのですが、応援いただけましたら幸甚です。

翌朝、結は日の明け切らぬうちに目が覚めた。

不思議に心が満たされて、身体も軽い。そつと見やった傍らの修一郎の穏やかな寝顔に結は微笑み、起こさぬように静かに寢床を抜け出した。

水を汲み、火を熾して朝餉の支度をする。いつになく気持ちがつきりと晴れやかに高揚しているのは、昨夜修一郎に抱かれたせいだろうか……。結は我知らず頬を赤らめた。

感じることに、どこかしらいつも後ろめたさがあった。充三に責められて声を上げるのは惨めさばかりが募ったし、修一郎の、どこか値踏みをするような冷めた視線もつらかった。己れの意志に関係なく反応してしまう体に、自分が自分でなくなるような恐怖もあった。

あの頃と今、違うものといえば、腹に子供がいることと、愛されている、という実感や安心感だろうか……。

結の内に漣なみのように、修一郎に対する思いが満ちた。

自分もまた、修一郎をかけがえなく思っているのだ……という実感である。巷では戦時色を強め、近隣でも「英霊の家」の標識を掲げた家が増えてきた。先頃には金物の供出を求められ、離れでも必要なものだけを手元に留めて、残りは鍋や釜も供出したが、修一郎は「鍋釜で作った戦車や戦闘機で、米英と戦えるはずがない」と、怒りを隠さなかった。あのときは修一郎の言葉に結も戦地の充三を思い、心臓を押しつぶされそうな不安を感じたものだが、そのことを思い出した今も、結の体と心を満たした幸せな気持ち冷めることはなかった。ほんの少しの痛みとともに首をもたげた後ろめたささえ、幸福のあかしであった。

寝間に戻ると修一郎ももう目覚めていて、これもまた、すっきり

といつにない表情をしていた。

「朝ご飯、召し上がられますか？」と訊ねると

「うん、食べる」

と答えたので、結はほっとした。

向かいあつて朝餉をとる、そうした文字通りの日常茶飯までが何かしら面映ゆく、結は戸惑った。修一郎は常と変わらぬ様子だったので、なおさら結は気恥ずかしい思いがするのだった。

朝餉の後、午前中の家事も一通り終えた結は、台所で一息ついていた。

ふと目に入つたおのが手首には、うす赤い痕がある。昨夜の情交の感覚がよみがえり、結の下腹を甘やかな痺れが満たした。先刻までは忙しく体を動かしていたので余計なことを考える余裕もなかったが、こうしていると昨夜のことが思い出され、気恥ずかしさにいたたまれなくなってくる。

昨夜、自分でも驚くほどの声を上げた。これまでには味わつたことのない、深い官能。

「どないしたのや、結。ひとりでえろう色っぽい表情かおをして」

城崎の声に、結は飛び上がらんばかりに立ち上がった。

「先生……！」

見ると勝手口に、城崎がおかしそうな表情で立っている。

「昨夜はなんぞええことでもあつたのか」

「こ……、こないなところから来んで下さいと、何度もお願いしてますのに……！ げ、玄関から、お願いします……！」

真つ赤になり、しどろもどろな結に城崎は笑いかけ、

「かまへんやろ、こつちに廻つた方がおまえも手間が省けるやろうし、僕も話がしやすい」

と言いながら、土間に入ってきた。

「あの、今日はご近所で……？」

繕うように結は訊ねたが、城崎は特に茶化すこともなく答えた。

「うん、ちょっとな。往診のついでや」

「その様子やと修一郎君も、今日は具合がよさそうやな」

「あ、はい、今朝はぐっすり眠れたご様子で、用意したご飯もみな召し上がりました」

「そうか。よかった」

そう応え、城崎は言葉を継いだ。

「結、おまえはどうや。腹の子は順調なんか」

「はい。おかげさまで……」

ぼうつ、と頬を赤らめた結に、城崎は好ましげに笑いかけた。

「せっかく来たのや、修一郎くんの顔も見て帰るかな」

「おはよう、修一郎君、今日は顔色がええな」

城崎が声をかけたとき、修一郎はきちんと着替え、居間で本を読んでいた。

「おいでやっただんですか。すみません、気づきませんでした」

そう言いながら、修一郎が座布団を勧めると、城崎も気安く座った。

「おかげさまで、今日は気分もええです」

と続けると、城崎が笑った。

「結と同じようなことを言う」

修一郎の怪訝そうな表情に、城崎が応えた。修一郎の頬にもほのかに赤みが差した。

「若いというのはええな。ましてやきみらは新婚や、子供ももうすぐ産まれるし、今が一番ええ時やな」

からかう風もなく、笑うと城崎はしみじみとそう言った。

「そやからふたりとも、決して無理や無茶はあかんぞ。特に修一郎くん、このご時世や、これからも色々あると思うが、父親になるという自覚をしっかりと持って、頑張らなな」

「……はい。わかってます。大丈夫です」

修一郎も微笑んでしっかりと応えた。すっきりと澄んだ、鬨りのない笑顔であった。

茶を飲み、たわいない世間話にしばし興じたあと、城崎は帰っていった。

結が修一郎に薬湯を差し出すと、これは伸ばした結の手首に触れてきた。そうして慌てて手を引っ込めた結に

「先生に笑われたのはこれか」と笑いかける。

「え……」

みるみるうちに結の頬が熱くなった。

赤く痕になった手首が何を意味するのか、結にも思いが至ったのだ。修一郎が結の腕を引いた。

「あつ……」

均衡がくずれ、結の体が修一郎の懐に倒れ込む。

「おまえが身ふたつになつて充三が復員したら、存分にかわいがつてやるからな」

おのが懐に仰向けに寝そべるようになつた結を覗き込むようにしながら、修一郎がくちづけてきた。

「どのおまえも可愛い。泣いとるおまえも笑うとるおまえも、もつと見たい……」

「……旦那さま……」

結は目を閉じた。おずおずと上げた腕が、修一郎の肩に触れ頬を撫でて、やがて首すじに廻った。

子供が産まれ戦が終わつて、充三が戻ったら……。

その日を思うだけで、幸福感が結を満たした。

先の城崎の言葉を待つまでもなく、結にも修一郎にも、状況が決してはかばかしいものではないことはわかつていた。

だが祈るような思いの城崎とは違い、この時ふたりの胸にあったのは、今日に連なる明日に対する夢のような、まばゆくあえかな希望であった。

腹の子が動くのがはつきりとわかるようになり、修一郎が日課のようにそこに触れてくるので、結は寢床に入るときには腹帯を解くようになった。

昼間のふとした時に、また寢床の中でも、そこにいる存在に語りかけるかのように、修一郎は結に触れてきた。たまさかその手を蹴られて破顔する修一郎は、生まれてくる子を待つ若い父親以外の何物でもなかった。

ある時、修一郎が結に向かい、「足を揉んでやろう」と言った。

昼下がり、家事も一段落つき、居間の修一郎に茶を持って行ったときのことである。秋の陽は日ごとに低くなり、畳をやわらかく照らしていた。この頃はむくみも出るようになり、ふくらはぎをさすっていたりするのを見ていのかも知れない。だが結は仰天し、

「そんな、やめてください……！」

といつにない強い調子で言った。

「照れることはなかるう、夫婦やないか」

「て、照れていうとると違えます……！ 旦那さまが……、そんな……。お、お身体に障っても困ります……」

しきりに恐縮し、また修一郎の体調を気にする結を気にもかけず、修一郎は結の傍らに座り、手を伸ばすとそのふくらはぎを撫でさすり始めた。

「……………」

大地主の家に長男として生まれ、傲岸ともいえる雰囲気をも身につけ、皆にかしずかれて生きてきたであろう修一郎、それが今は妻とは言え、小作の娘の足を揉んでやるなど、誰が想像しただろうか。

無心に結の足をさする修一郎の様子は、どこことなく幼子のように

も見え、結はなぜだか甘酸っぱく、泣きたいような気持ちになった。同時にその掌の温かさに、充三のそれを思い浮かべていた。

泣き暮らしていたあの頃、充三の掌が、どれだけ心と体を癒してくれたことだろう。他人の身体など揉んだはずもなかるう修一郎の手つきが存外に堂に入っていたのは、これもまた、同じものを思い浮かべていたからかも知れなかった。

「子供が大きゆうなったら、みなで旅行にでも行こう」と、結の足をさすりながら修一郎が言った。

「どこへですか……？」

結が訊ねると、

「どこへでもや。その頃には、この戦争も終わつとるやろ。どこでも行きたいところに連れて行ってやるぞ」

と、答えた。

「俺もこれまで、どこにも行けなんだ。どこかへ行きたいとも思わなんだが、これからは、家族でいろんなところに行きたいし、いろんなことをしたい……」

優しく微笑みながらそんなことを言ったが、結は修一郎のまだ見ぬ子供を思う心をひしひしと感じるとともに、これが「家族」と口にしたことに、胸を締め付けられる思いがした。

修一郎には、自分の父母や弟に対するわだかまりはもうないのかも知れない。しかし結の心の底のどこかしらには、かつて聞いた修一郎の家族に対する吐露が、いつまでも沈んでいたのだ。「自分のせいで、修一郎は家族を失った」という思いもまた同様であった。

結は言葉を見つけれず、黙った。そんな結の心中に気づいた風もなく、修一郎ももう何も言わず結の足をさすり続けた。

陽がすっかり短くなってきた頃、結はいつものように腹に触れてきた修一郎の掌が、何やら熱いことに気がついた。

そう言えば、修一郎は先日から、おかしな咳をしていたのではな
いか……。

修一郎の不調は今や日常だったので、気をつけていたつもりが逆に慣れてしまっていたのかも知れない。だが気付いてしまうと、結はひどく不安になった。

ここしばらくは城崎も姿を見せていない。秋も深まり、体調を崩す者も増えるのに違いなかった。

「旦那さま、お熱があるのやありませんか？　この頃お加減が良くないのや……。先生をお呼びしましょうか……？」

結は思い切って言ってみたが、修一郎は「具合が悪いのはいつものことや。何もわざわざ先生を煩わせることもないわ」

と取り合わなかった。だが結は放っておくこともできず、隣保の作業で出かけた帰り、こっそり城崎の診療所を訪ねた。

折良く城崎は患者も切れたところで、話を聞いて厳しい表情になり、

「今日は無理やが、明日には寄らせてもらう」と約束してくれた。

「すみません、ありがとうございます……。旦那様はたいしたことはないと仰るのですけど、うちは心配で……」

結がそう言うと、城崎も気遣わしげに応えた。

「わかっとする。修一郎くんは辛抱強いのはええが、言わなあかん時にも黙ってしまうからな。結、おまえが気をつけたらなあかん」

翌日には前日の言葉通り、城崎が離れを訪ねて来た。

近所に往診があつたので、と、城崎はそつなく切り出した。

「この頃は調子の良くない者が多うてな。きみは大丈夫か」

「調子が悪いのはいつものことや」

修一郎は笑って答えたが、結はたまらず、

「この頃なんやお熱もあるようなんです。苦しそうに咳もしてなさるし、風邪でも引かれたかと心配で……」

と横から言った。修一郎は

「結」

と顔をしかめたが、城崎も口を合わせた。

「いや、結の心配も尤もや。修一郎君、きみは人並みの身体やないんやから、十分に気をつけなあかん」

修一郎は少し表情を歪めて笑っただけで、何も応えなかった。

修一郎を診たあと、結を呼んだ城崎の表情はひどく厳しいものであった。

修一郎も同じようにこわばった表情で黙り込んでいる。不安に訊ねることもできずにいる結に、城崎が言った。

「肺炎や……まず間違いない。病院で診て貰う方がええ。もしかしたら結核かも知れん」

声も出せずにいる結とは別に、修一郎が吐き出すように言った。

「いまだき病院に行ったかて、何の役に立つんですか。俺は病院はいやや」

「我が俣を言うもんやない……！もし結核やったとして、結にうつったらどないするつもりや。腹にきみのおるのやぞ」

いつにない城崎の厳しい声が、修一郎を叱した。

「それどころか、きみに何かあったらどないする気や。生まれてくる子を父親のない子にするつもりか」

そうまで言われ、修一郎はふたたび押し黙った。

「とにかく診断がつかんことには、治療もでけん。ええな、ちゃんとして貰うのやぞ」

常の友人としての顔ではなく、きっぱりと医者としての態度で城崎が念を押した。

城崎が離れを辞したあと、結はいつぞやのように、鞆を抱えてしばらくついて来た。

「先生……。今日、仰ったこと……」

おずおずと切り出すと、

「僕の見立て違いならそれが一番ええ。ただの風邪なら、どんだけマシか」

ひとりごちるように城崎が言った。

「どないしよう……うち……、うちが、もうちよつとちゃんとしとつたら……」

立ち止まり、涙声を上げた結に城崎は振り返った。

「夕チの悪い病とまだ決まったわけやない。とにかくまずは、診てもらつことや」

「はい……」

子供に言い聞かせるような城崎の言葉にそう応えてはみたものの、結の心は悔恨と暗い予感で一杯であった。

離れに戻ると、修一郎の背中が目に入った。

どうしても声をかけることができず、結は足音を忍ばせてその場を離れた。

翌日、修一郎は朝から一言も口を利かず、結の付き添いも拒んでひとりで出かけて行った。

昼前には戻ったが、肩で息をし疲れ切った様子であった。元々弱い身体が、さらに衰えているのがひと目で見て取れた。結はまんじりともせず待っていたが、その様子になかなか結果を聞くこともできず、どうだったか、とようやく切り出せたのは修一郎が着替えて横になった後だった。

「まだわからん。二三日したら結果を聞きに来いと言つとつた」

短く要件のみを答え、それきり口をつぐみ目を閉じた修一郎に、結も一旦は続けかけた言葉を呑み込んだ。とりつく島もなかった。

修一郎の閉じた瞼の裏には、先刻診察室で医者から見せられた、白く濁った肺のレントゲン写真が焼きついていた。

結核と肺炎はよく似ている。どちらかは菌を調べてみないとわからない、と言われたが、いずれにせよ、樂觀できる状況にないことだけは確かであった。しかし修一郎は、もう何も言わなかった。

43 / 惜日4 (後書き)

いつもお読み下さりありがとうございます。

作中の「肺炎はうつらない」という言葉について、補足しておこうと思います。

肺炎には色々な原因があり、実際にはうつるタイプの肺炎もあります。

何度かおことわりしてきたことではありますが、「お話の上での」としてお読みいただければと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1660f/>

恋恋記

2011年6月13日01時40分発行